

# 久米高畑遺跡

— 26 次 調 査 —

2008

松山市教育委員会  
財団法人松山市生涯学習振興財団  
埋蔵文化財センター

く め たか ぼたけ  
久米高畑遺跡

— 26 次 調 査 —



2008

松山市教育委員会  
財団法人松山市生涯学習振興財団  
埋蔵文化財センター

## 序

本書は平成7年度から8年度にかけて実施した、民間の宅地開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書です。

調査地が所在する松山市久米地区には、国指定史跡「久米官衙遺跡群」や來住廃寺跡などがあり、同地区は、古代における役所の中核施設が存在する重要地域として広く知られています。

今回報告します久米高畑遺跡26次調査では、縄文時代終わり頃の土坑や弥生時代から古墳時代までの集落に関連した遺構が発見されました。弥生時代前期では90基の土坑が検出され、土坑内からは土器の完成品や赤色顔料が付着した土器のほか、石器の本完成品などが多数出土しました。弥生時代中頃では竪穴式住居址や掘立柱建物址が検出され、当時の住居構造を解明する手がかりを得ることができました。これらは、弥生時代における人々の生活を復元するうえで貴重な資料となるものです。

このような成果をあげられましたのも、関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のおかげと、心より感謝申し上げます。また、本書が埋蔵文化財調査研究の一助となり、各方面において活用いただければ幸いに存じます。

平成20年3月31日

財団法人 松山市生涯学習振興財団  
理事長 中村時広

## 例 言

1. 本書は、松山市教育委員会が平成8年3月から平成8年6月に、松山市米住町で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺構は、呼称を略号で記述した。竪穴式住居址：S B、土坑：S K、溝：S D、柱穴・小穴：S Pである。
3. 遺構の作図・製図、遺物の実測・製図は、小玉重紀子の指示のもと山邊進也、金子育代、仙波千秋、仙波ミリ子、高尾久子がおこなった。
4. 写真図版は大西朋子と小玉が協議し、作成は大西がおこなった。
5. 遺構図と遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に作成した。
6. 本書に使用した方位はすべて真北である。
7. 本書に関わる遺物や記録物は、松山市埋蔵文化財センターで保管している。
8. 本書の執筆は小玉、編集は梅木謙一がおこない、宮内慎一、水口あをいの協力を得た。浄書は平岡直美がおこなった。
9. 製版 カラー写真、写真図版-175線  
印刷 オフセット印刷  
用紙 マットカラー HG 菊判62.5kg  
製本 アジロ綴じ

# 本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	
2. 調査・刊行組織	
第2章 層位	7
1. 基本層位	
2. 検出遺構	
第3章 遺構と遺物	8
1. 縄文時代の遺構と遺物	
2. 弥生時代の遺構と遺物	
3. 古墳時代～古代の遺構と遺物	
4. 中世の遺構と遺物	
5. 時期不明の遺構と遺物	
6. 表採遺物	
第4章 小結	90

# 挿図目次

第1章 はじめに	
第1図 調査地位置図 (縮尺 1/1,000)	1
第2図 西壁・北壁土層図 (縮尺 1/40)	3
第3図 遺構配置図 (縮尺 1/200)	5
第3章 遺構と遺物	
第4図 縄文時代の遺構配置図 (縮尺 1/250)	8
第5図 S K 21測量図 (縮尺 1/40)	9
第6図 S K 21出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4)	10
第7図 S K 21出土遺物実測図(2) (縮尺 1/3・1/4)	11
第8図 弥生時代前期末～中期初頭の遺構配置図 (縮尺 1/250)	12
第9図 S K 10測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	13
第10図 S K 17・22測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	14
第11図 S K 24測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	15
第12図 S K 25測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	16
第13図 S K 28測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・1/2)	17
第14図 S K 29測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・1/3)	18
第15図 S K 30測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	19
第16図 S K 31測量図 (縮尺 1/40)	
第17図 S K 31出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3・1/2)	20

第18図	S K 35測量図・S K 32・35出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・1/3)	21
第19図	S K 40測量図・出土遺物実測図(1) (縮尺 1/40・1/4・1/2)	22
第20図	S K 40出土遺物実測図(2) (縮尺 1/3・1/2)	23
第21図	S K 41測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/3)	24
第22図	S K 50測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・1/3)	25
第23図	S K 53・60測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・1/3)	26
第24図	S K 87測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・1/2)	27
第25図	S K 89測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・1/3)	28
第26図	S K 137測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	29
第27図	S K 90測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・1/3)	30
第28図	S K 93測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	31
第29図	S K 98測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	32
第30図	S K 103測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	33
第31図	S K 106測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	34
第32図	S K 110測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	35
第33図	S K 112測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・1/3)	36
第34図	S K 113測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・1/3)	37
第35図	S K 119測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・1/3)	38
第36図	S K 126・130測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・1/3)	39
第37図	S K 135測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	40
第38図	S K 138測量図 (縮尺 1/40)	
第39図	S K 138出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4)	41
第40図	S K 138出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4)	42
第41図	S K 138出土遺物実測図(3) (縮尺 1/4・1/3)	43
第42図	S K 147測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	44
第43図	S K 出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4)	46
第44図	S K 出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3)	47
第45図	S D 5 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/80・1/4・1/3)	48
第46図	S P 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/2)	
第47図	弥生時代中期前葉の遺構配置図 (縮尺 1/250)	49
第48図	S K 111測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・1/3・1/2)	50
第49図	S K 15・S K 134出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	51
第50図	弥生時代中期中葉の遺構配置図 (縮尺 1/250)	52
第51図	S K 122測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4・1/1)	54
第52図	S K 23・S P 407出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	55
第53図	S D 1 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	
第54図	S D 23出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	
第55図	弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構配置図 (縮尺 1/250)	56
第56図	掘立 7 測量図 (縮尺 1/80)	57

第57図	掘立7出土遺物実測図(縮尺 1/4・1/3・1/2).....	58
第58図	S K 128測量図・出土遺物実測図(縮尺 1/40・1/4・1/3・1/2) .....	60
第59図	S K・S P 出土遺物実測図(縮尺 1/4)	
第60図	古墳時代～古代の遺構配置図(縮尺 1/250).....	61
第61図	S B 3 測量図・出土遺物実測図(縮尺 1/60・1/3).....	62
第62図	掘立2測量図・出土遺物実測図(縮尺 1/80・1/4・1/3) .....	64
第63図	掘立4測量図・出土遺物実測図(縮尺 1/80・1/4・1/3) .....	65
第64図	掘立5測量図・出土遺物実測図(縮尺 1/80・1/3).....	66
第65図	掘立6測量図(縮尺 1/80) .....	67
第66図	S K 146測量図・出土遺物実測図(縮尺 1/40・1/4・1/3).....	68
第67図	S D 10測量図・出土遺物実測図(縮尺 1/80・1/4・1/3) .....	69
第68図	S P 出土遺物実測図(縮尺 1/3).....	70
第69図	中世の遺構配置図(縮尺 1/250).....	71
第70図	S P 1296測量図・出土遺物実測図(1)(縮尺 1/20・1/3).....	73
第71図	S P 1296出土遺物実測図(2)(縮尺 1/3).....	74
第72図	倒木2測量図・出土遺物実測図(縮尺 1/40・1/3).....	75
第73図	S K 出土遺物実測図(縮尺 1/3).....	76
第74図	時期を特定できなかった遺構の配置図(縮尺 1/250).....	77
第75図	S B 1 測量図(縮尺 1/60) .....	78
第76図	S B 2 測量図・出土遺物実測図(縮尺 1/60・1/4).....	79
第77図	掘立1測量図・出土遺物実測図(縮尺 1/80・1/4・1/3) .....	81
第78図	掘立3測量図・出土遺物実測図(縮尺 1/80・1/2).....	82
第79図	掘立8測量図・出土遺物実測図(縮尺 1/80・1/4).....	83
第80図	S K 出土遺物実測図(縮尺 1/3・1/2) .....	84
第81図	S P 出土遺物実測図(1)(縮尺 1/3・1/2) .....	85
第82図	S P 出土遺物実測図(2)(縮尺 1/3).....	86
第83図	S P 出土遺物実測図(3)(縮尺 1/3).....	87
第84図	表探遺物実測図(1)(縮尺 1/4・1/3) .....	88
第85図	表探遺物実測図(2)(縮尺 1/3・1/2) .....	89

## 表 目 次

表1	縄文時代の出土遺物観察表(土製品) .....	93
表2	縄文時代の出土遺物観察表(石製品)	
表3	弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表(土製品)	
表4	弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表(石製品) .....	100
表5	弥生時代中期前葉の出土遺物観察表(土製品) .....	101
表6	弥生時代中期前葉の出土遺物観察表(石製品) .....	102

表7	弥生時代中期中葉の出土遺物観察表（土製品）	102
表8	弥生時代中期中葉の出土遺物観察表（後身具）	
表9	弥生時代中期後葉～後期初頭の出土遺物観察表（土製品）	
表10	弥生時代中期後葉～後期初頭の出土遺物観察表（石製品）	103
表11	古墳時代～古代の出土遺物観察表（土製品）	
表12	古墳時代～古代の出土遺物観察表（石製品）	104
表13	中世の出土遺物観察表（土製品）	105
表14	中世の出土遺物観察表（石製品）	
表15	S B 2出土遺物観察表（土製品）	106
表16	掘立1出土遺物観察表（土製品）	
表17	掘立1出土遺物観察表（石製品）	
表18	掘立3出土遺物観察表（石製品）	
表19	掘立8出土遺物観察表（土製品）	
表20	時期不明出土遺物観察表（石製品）	
表21	表採遺物観察表（土製品）	107
表22	表採遺物観察表（石製品）	

## 図 版 目 次

図版1	1. 2区遺構検出状況（北より）	2. 2区遺構完掘状況（北より）
図版2	1. 1区遺構検出状況（南より）	2. 1区遺構完掘状況（南より）
図版3	1. S K 21遺物出土状況（北東より）	2. 2区西側完掘状況（北より）
図版4	1. S K 24遺物出土状況（南東より）	2. S K 31遺物出土状況（南より）
図版5	1. S K 138遺物出土状況（南より）	2. S K 103遺物出土状況（南より）
図版6	1. S K 137遺物出土状況（南より）	2. 掘立2・S K 122検出状況（南より）
図版7	1. 掘立1完掘状況（南より）	2. 掘立1 S P 955断面土層（西より）
図版8	1. 掘立2完掘状況（南より）	2. S P 1296断面土層（西より）
図版9	1. S K 21出土遺物	
図版10	1. 出土遺物（S K 24・S K 31・S K 35）	
図版11	1. S K 40出土遺物	
図版12	1. 出土遺物（S K 50・S K 53・S K 103・S K 106・S K 126）	
図版13	1. S K 138出土遺物(1)	
図版14	1. 出土遺物（S K 138(2)・S P 1009・S K 122・S P 976・S P 630・掘立1）	
図版15	1. 出土遺物（S P 975・S P 117・表採）	2. S P 1296出土遺物(1)
図版16	1. S P 1296出土遺物(2)	

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

1995（平成7）年11月15日、片岡功氏と片岡やえみ氏より松山市来住町888・889-1地内における宅地開発にあたり、埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。当該地は松山市が指定する包蔵地「127米住廃寺跡」内にあり、松山平野の東部、堀越川と小野川の間にある来住台地上に位置する。台地上には久米高畑遺跡や米住廃寺や来住町遺跡があり、弥生時代から中世までの遺構や遺物が数多く確認されている。申請地周辺の遺跡には、東隣に古代の横列と区画溝を検出した久米高畑遺跡20次調査地が、北東40mに久米評衡の可能性をもつ同1次・11次・22次調査地がある。また、西150mには弥生時代の住居址・土坑・大溝などの集落関連遺構を検出した同23～25次調査地が位置している。

これらのことから、当該地の埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲や性格を確認するために、同年12月7日に試掘調査を実施した。その結果、弥生土器・土師器・須恵器を含む遺物包含層と、溝・土坑・柱穴などの遺構を検出し、当該地に弥生時代から中世までの遺跡があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課と申請者の両者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、建物建設によって失われる遺構と遺物について、記録保存の為に発掘調査を実施することとなった。今回の調査では弥生時代の集落遺構と、官衙関連遺構の確認を主目的とし、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、1996（平成8）年3月21日より調査を開始した。

なお、申請後に一部の所在地が変更し、調査地番の変更が生じた。ここでは、変更になった地番を記述している。



第1図 調査地位置図

## (1) 調査の経緯

本調査は、排土置き場の関係上、調査地を2分割して実施した。北側を1区とし、南側を2区とした。先ず、3月21日から調査区周辺の保全作業を行い、南側の2区から重機を導入して表土の掘削を行った。続いて遺構検出をし、遺構の完掘写真撮影を5月17日に行った。北側の1区の調査は5月22日に開始し、6月22日に遺構の完掘写真撮影を行った。発掘機材の撤去作業を行い、5月23日に調査を終了した。

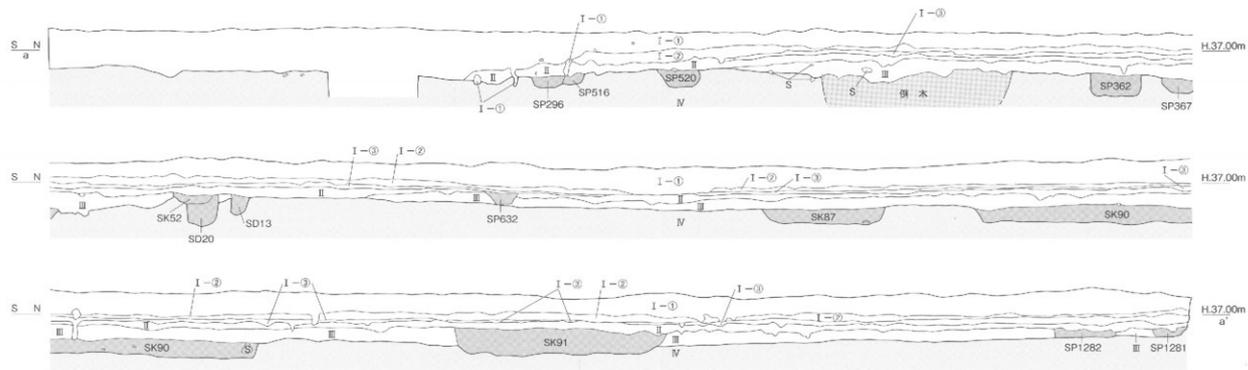
現地説明会は、久米高畑遺跡27・28・29次調査と合同で6月8日（土曜日）に行った。

## 2. 調査・刊行組織

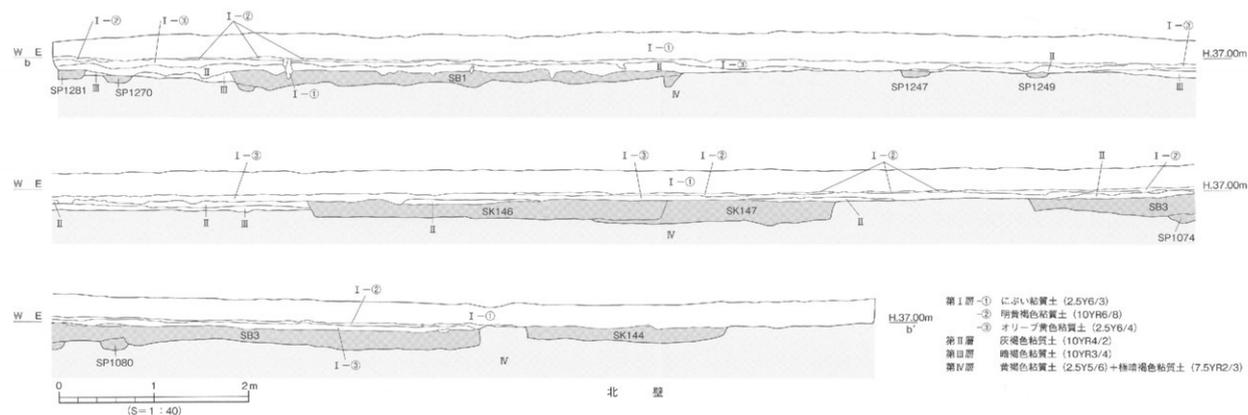
調査地	松山市栄住町887-4、888-1、889-1
遺跡名	久米高畑遺跡26次調査地
調査期間	1996（平成8）年3月21日～同年6月23日
調査面積	1,326㎡
調査委託	財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
調査担当	相原浩二・小玉亜紀子

（平成20年3月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	土居 貴 美
事務局	局長	石 丸 修
	企画官	仙波 和典
	企画官	田中 郁夫
	企画官	田浦 雅文
文化財課	課長	家久 則雄
	主 幹	森川 恵克
	主 査	栗田 正芳
財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	中村 時広
	事務局長	吉岡 一雄
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	丹生谷 博一
	次長兼教育普及担当リーダー	重松 幹雄
	次長兼調査担当リーダー	田城 武志
	調査員	相原 浩二
	調査員	小玉 亜紀子
	調査員	大西 朋子（写真担当）



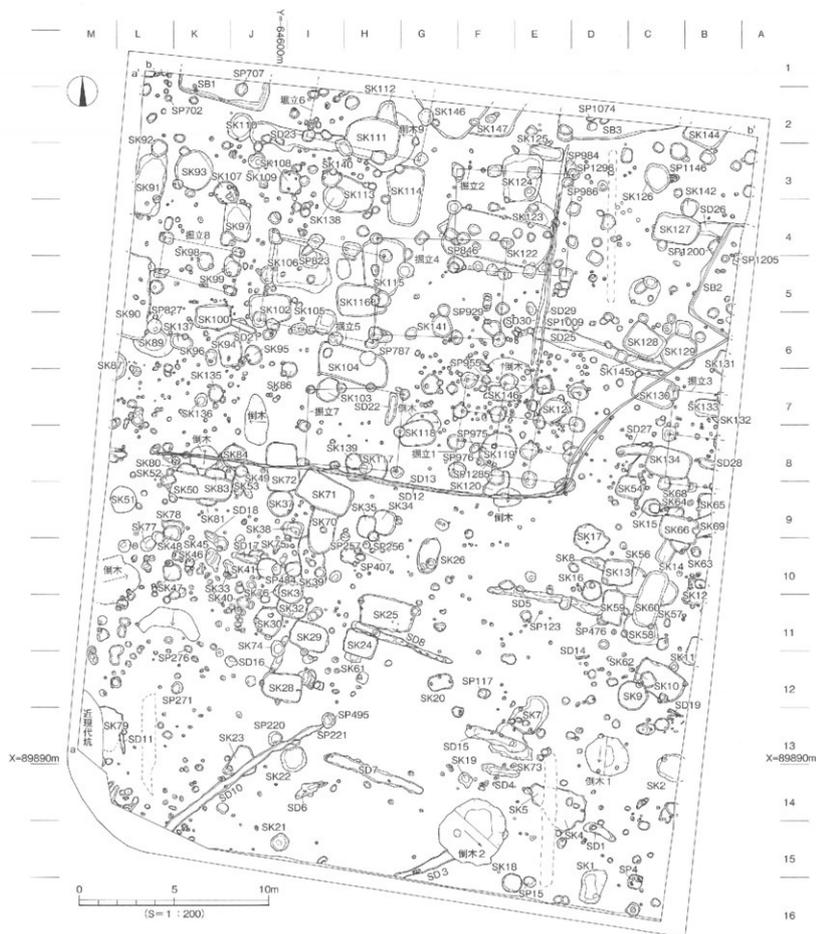
西壁



北壁

- 第I層-① におい粘質土 (2.5Y6/3)
- ② 明黄褐色粘質土 (10YR6/8)
- ③ オリーブ黄色粘質土 (2.5Y6/4)
- 第II層 灰褐色粘質土 (10YR4/2)
- 第III層 暗褐色粘質土 (10YR3/4)
- 第IV層 黄褐色粘質土 (2.5Y5/6) + 綠褐色粘質土 (7.5YR2/3)

第2図 西壁・北壁土層図



第3図 遺構配置図

## 第2章 層 位

### 1. 基本層位 (第2図)

調査地は標高37mに立地し、調査以前は耕作地であった。基本層位は、基盤層を含めて4層に大別される。そのうち、第I層は、土色や土質の微妙な違いから①・②・③の3層に分層した。色調は「新版標準土色帖 1989年版」(農林水産省農林水産技術会議事務局 監修)を参照した。

第I層-①：水田耕作土。にぶい黄色の粘質土 (2.5Y6/3)。

-②：水田床土。明黄褐色の粘質土 (10Y R6/8)。

-③：水田床土。オリーブ黄色の粘質土 (2.5Y6/4)。

第II層：遺物包含層で、弥生土器片が少量出土している。5cm前後の堆積で、北西部に分布している。西になるほど厚くなり、15cm前後の堆積になる。灰黄褐色の粘質土 (10Y R4/2)。

第III層：遺物包含層で、弥生土器片が少量出土している。5～10cmの堆積で、北西部に分布している。暗褐色の粘質土 (10Y R3/4)。

第IV層：本層上面が遺構検出面になる。調査地全体に広がっている。明褐色の粘質土 (7.5Y R5/8) と極暗褐色の粘質土 (7.5Y R2/3)、黄褐色の粘質土 (2.5Y5/6) が混在している。

### 2. 検出遺構 (第3図)

遺構の検出は、第IV層上面(地山直上)で確認した。これは、遺物包含層が後世に大幅な削平を受け、遺物も少量であったからである。

遺構は縄文時代から中世までのものがあり、竪穴式住居址3棟、掘立柱建物址8棟、土坑138基、溝27条、柱穴1232基を検出した。また、遺物が出土した倒木痕を1基確認した。時代別の遺構数は以下のとおりである。

- |          |  |
|----------|--|
| ①縄文時代    | 土坑1基   |
| ②弥生時代    | 掘立柱建物址1棟、溝6条、土坑91基、柱穴14基                       |
| ③古墳時代～古代 | 竪穴式住居址1棟、掘立柱建物址4棟、溝3条、土坑7基、柱穴3基                |
| ④中世      | 土坑1基、柱穴1基、倒木痕1基                                |
| ⑤時期不明    | 竪穴式住居址2棟、掘立柱建物址3棟、溝14条、土坑37基、柱穴1214基<br>倒木痕10基 |
| ⑥現代      | 溝4条、土坑1基                                       |

### 第3章 遺構と遺物

#### 1. 縄文時代の遺構と遺物 (第4図)

縄文時代の遺構には、晩期の土坑が1基ある。

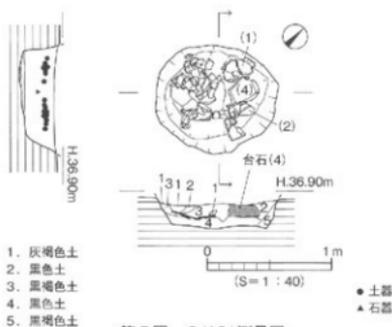


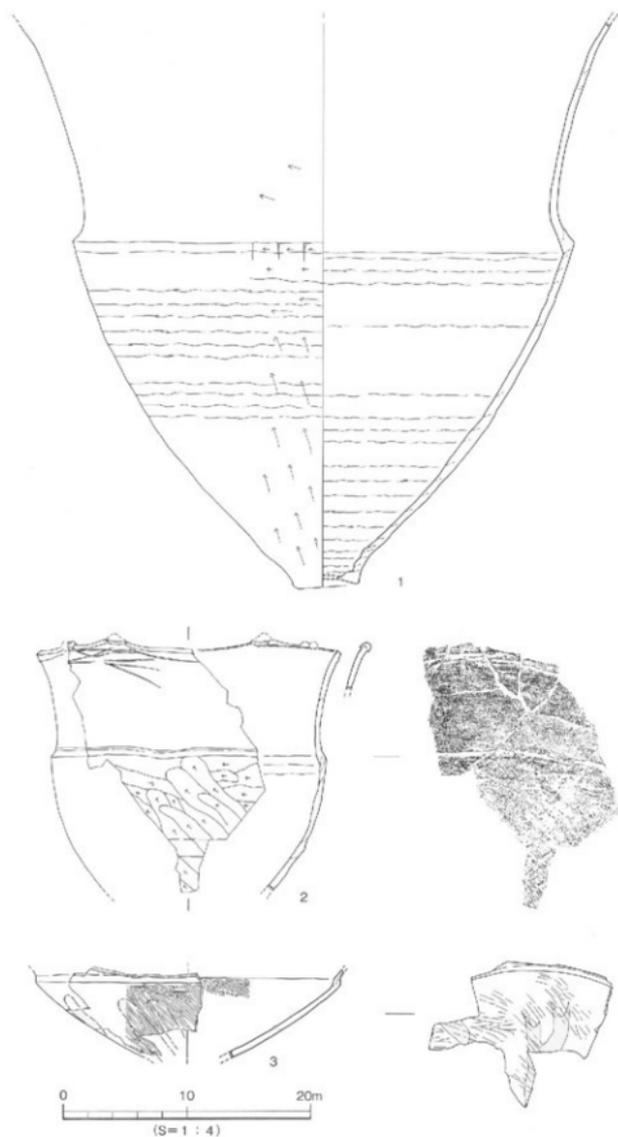
第4図 縄文時代の遺構配置図

## SK21 (第5～7図、図版3・9)

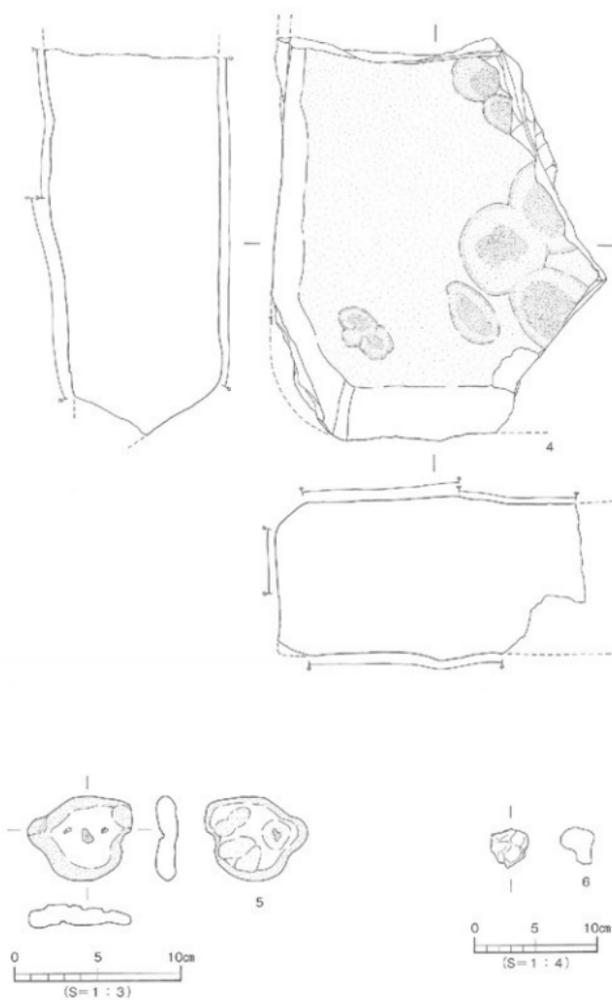
調査区の南側、J15区に位置する。平面形態は円形で、規模は径0.97m、深さ0.28mを測る。底面は平坦で、断面形態は逆台形状である。埋土は5層に分層できる。最下層の5層は黒褐色土で、壁沿いにあり、次いで4層の黒色土がほぼ水平堆積をなす。4層上には、1・2・3層がブロック状になって混在している。遺物は、1～6で全て4層上面付近から出土した。深鉢4点、浅鉢2点、台石1点、用途不明石製品1点、焼土塊が1点ある。出土状況は、台石(4)の西側近くに深鉢(1)が据えられ、胴部～口縁部は南側に横倒しになっていた。深鉢(1)は口縁端部を除き、ほぼ完存していた。底部の中央部が焼成後に穿孔されていた。又、欠損していた口縁端部は故意か、後世に遺構上面が削平された際に失われたかは不明である。深鉢(2)・浅鉢(3)は、台石(4)の東側から出土した。浅鉢(3)には、外面に赤色顔料が付着していた。分析の結果、ベンガラであることが確認できた。

時期：出土した遺物から、SK21は縄文時代晩期前半とする。遺構の性格は、土器(1)の出土状況から墓と考える。1が棺身となるが、2～6は用途が特定できない。





第6図 SK21出土遺物実測図(1)



第7図 SK21出土遺物実測図(2)

## 2. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、前期末～中期初頭、中期前葉、中期中葉、中期後葉～後期初頭に時期比定されるものがある。以下、時期ごとに主な遺構と遺物の説明をおこなう。

### (1) 弥生時代前期末～中期初頭 (第8図)

遺構には、土坑78基、溝4条、柱穴8基がある。



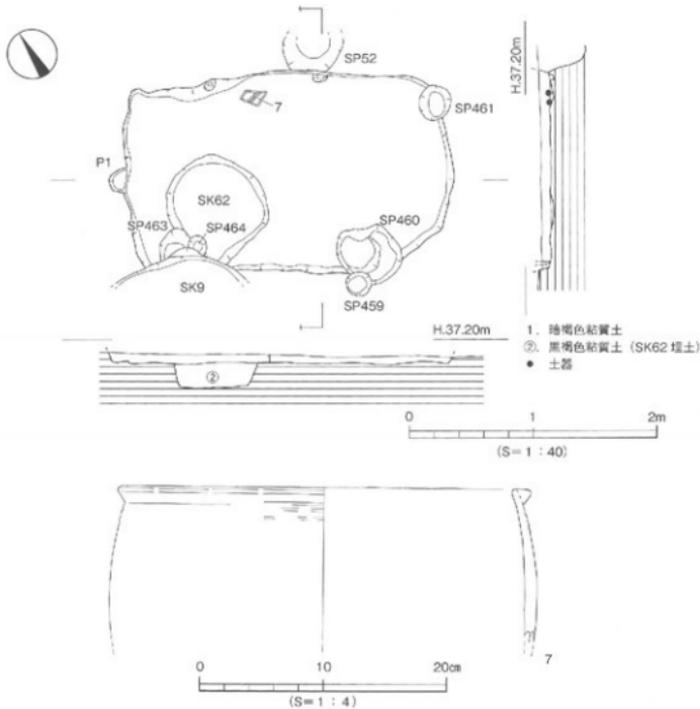
第8図 弥生時代前期末～中期初頭の遺構配置図

1) 土坑 (SK)

この時期に比定される土坑は78基である。土坑の多くは、重複していた。平面形態には、長方形と円形の2種類があり、長方形は37基、円形は40基ある。断面形態は、長方形土坑では筒状・逆台形状・皿状、円形土坑では皿状・袋状に内湾するものがある。殆どの土坑は単一層で埋没し、底面は平坦であり、検出面からの深さは0.1~0.27mであった。

SK10 (第9図)

C12区に位置し、SK9 (古墳時代)・SP459・460・461 (時期不明) に切られ、SK62 (弥生時代前期末~中期初頭) を切る。平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸2.63m、短軸1.64m、深さ0.1mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦になる。埋土は暗褐色の粘質土単層である。西壁中央部では小穴を1基、東壁中央部では小穴を2基確認した。小穴埋土は土坑と同じである。遺物は、底面から変形土器片 (7) が内面を上にして出土した。



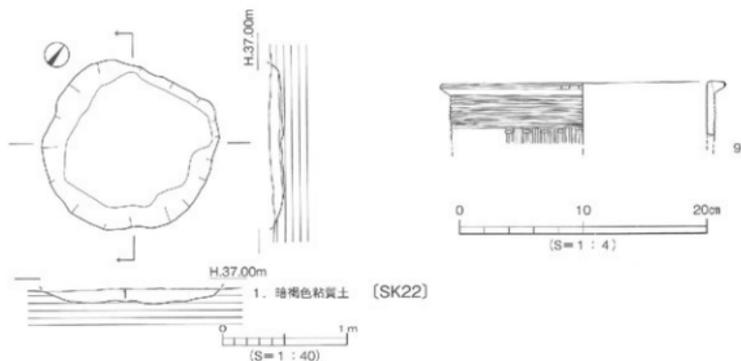
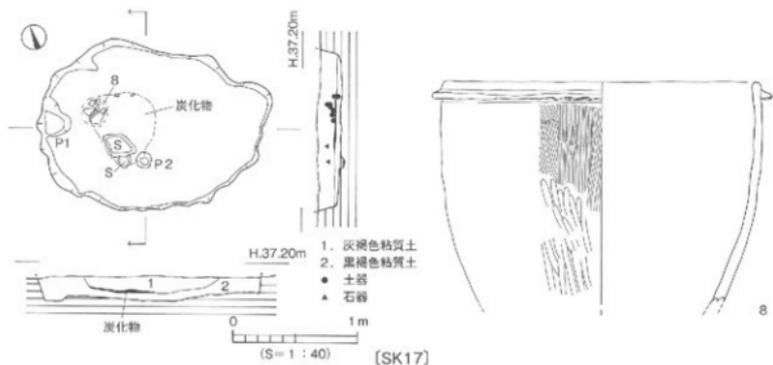
第9図 SK10測量図・出土遺物実測図

## SK17 (第10図)

D9・10区に位置する。平面形態は不整形な円形で、規模は長軸1.89m、短軸1.44m、深さ0.21mを測る。断面形態は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。埋土は2層に分層でき、上層は灰褐色の粘質土、下層は黒褐色の粘質土である。炭化物層は遺構中央部分の2層上面で検出し、約1㎡に分布する。遺物の殆どが炭化物層上面から出土した。遺物は甕形土器片(8)と握り拳大の礫が4点ある。8は甕形土器で、口縁端部のやや下位に断面三角形の突帯を貼り付ける。

## SK22 (第10図)

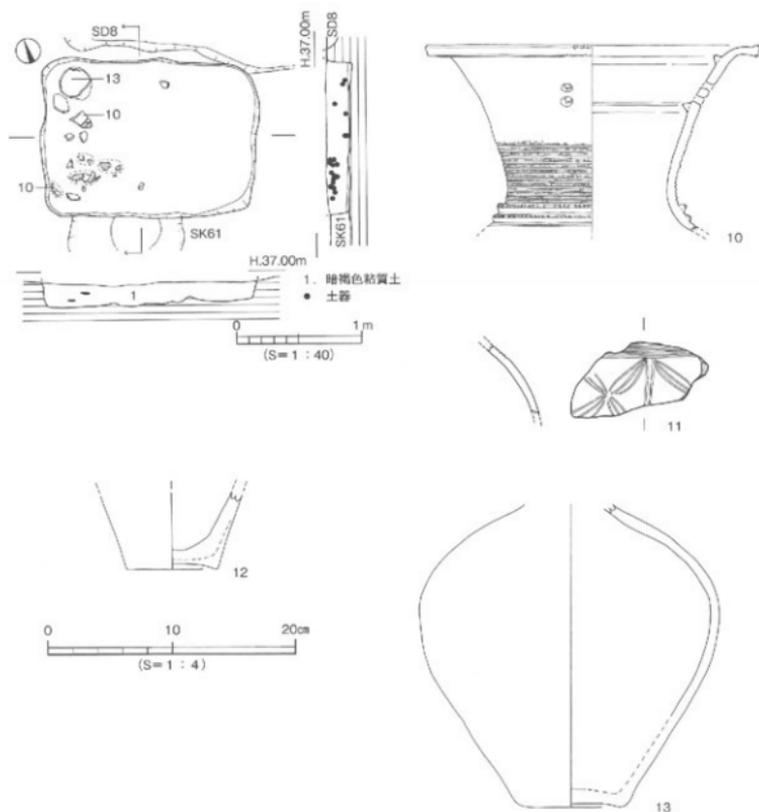
I13区に位置する。平面形態は円形で、規模は径1.41m、深さ0.11mを測る。断面形態は皿状で、底面はほぼ平坦になる。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は、甕形土器片(9)が底面より出土した。



第10図 SK17・22測量図・出土遺物実測図

SK24 (第11図、図版4・10)

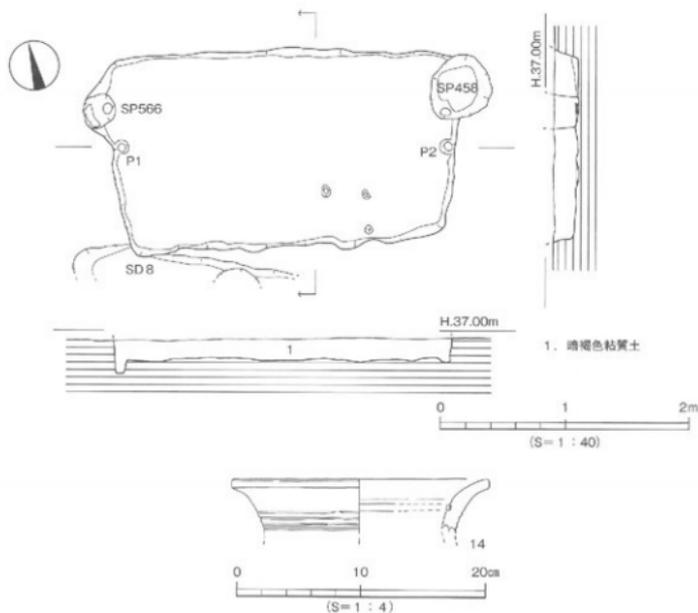
H11・12区に位置し、SK61(古墳時代)に切られ、SDS(弥生時代前期末~中期初頭)・SP398(時期不明)を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸1.72m、短軸1.27m、深さ0.19mを測る。断面形態は筒状であり、底面は平坦になる。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は10~13で、土坑の西側に分布し、10~12は埋土上位、13は底面から出土した。13の壺形土器は、胴部から底部までがほぼ完存し、土坑北西部の壁沿いで出土した。検出状況から、置かれていた可能性がある。この土器内からは炭化物が大量に検出した。



第11図 SK24測量図・出土遺物実測図

S K 25 (第12図)

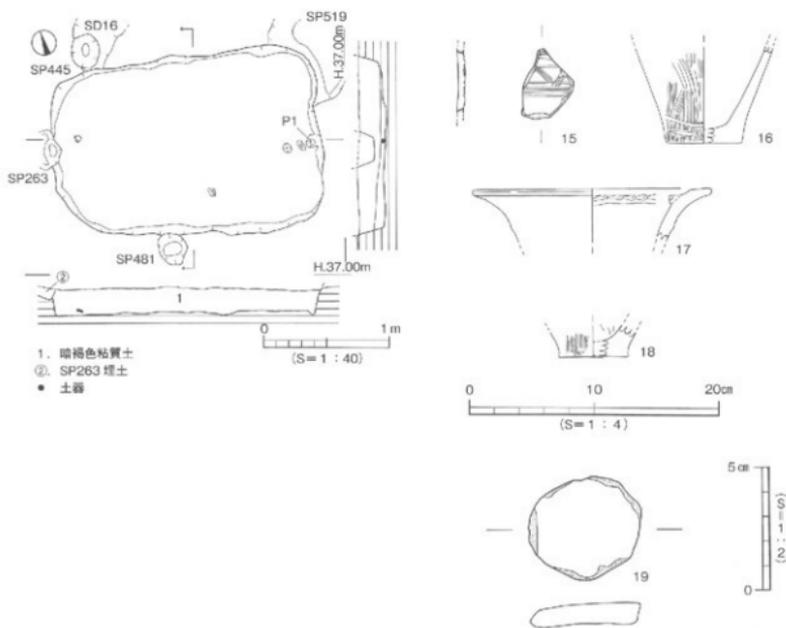
G・H11区に位置し、SD 8 (弥生時代前期末～中期初頭) を切り、SP 458・566 (時期不明) に切られる。平面形態は長方形で、規模は長軸2.73m、短軸1.59m、深さ0.19mを測る。断面形態は筒状で、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。両短辺中央部には小穴 (P 1・P 2) がある。小穴埋土は土坑と同じであり、土坑に伴うものと考えられる。小穴の断面は、土坑壁面側が垂直にたちあがる。14は壺形土器の口縁部で、口縁部内面の突帯は剥離している。



第12図 S K 25測量図・出土遺物実測図

## S K 28 (第13図)

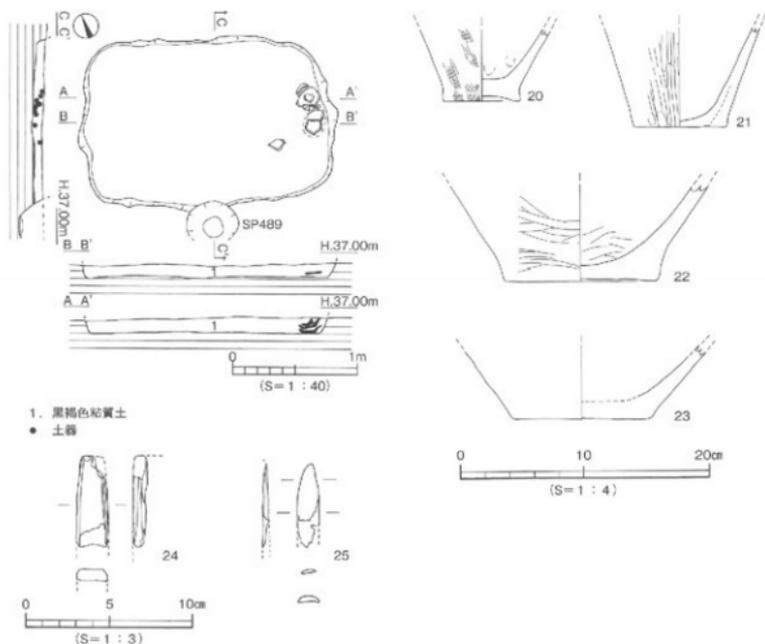
J・I 12区に位置し、S P 263・481 (時期不明) に切れ、S D 16・S P 519 (時期不明) を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸2.10m、短軸1.48m、深さ0.21mを測る。断面形態は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。S K 25と同様に、短辺中央部に小穴 (P 1) を持つ。東壁はS P 263に切れ小穴の有無は判断できない。埋土は暗褐色の粘質土単層、小穴埋土も土坑埋土と同じであった。遺物は、底面から甕形土器 (15・16)、壺形土器 (17・18) の破片と用途不明土製品1点 (19) が出土した。このうち、18の底部内面には全体に赤色顔料が付着していた。分析の結果、水銀朱であることが判明した。その他の遺物や遺構からは、赤色顔料は検出されなかった。



第13図 S K 28測量図・出土遺物実測図

## SK29 (第14図)

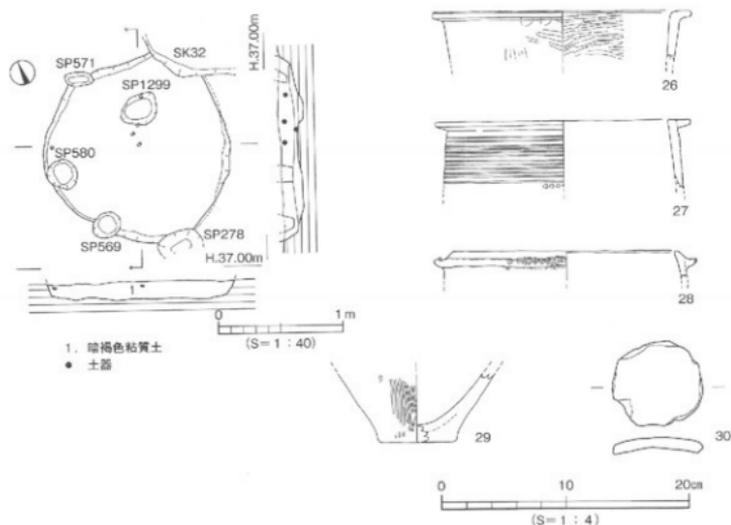
J11区に位置する。平面形態は長方形で、SP489(時期不明)に切られる。規模は長軸2.02m、短軸1.37m、深さ0.11mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦であった。埋土は黒褐色の粘質土単層である。遺物は20~25で、土坑の東辺付近に集中して出土した。甕形土器と壺形土器の底部が上から20・21・22・23の順に重なっていた。なお、22は断面図の軸線からずれているために記載がなされていない。24・25は土器からやや離れて出土した。24は加工斧で、25は用途不明石製品である。



第14図 SK29測量図・出土遺物実測図

## SK30 (第15図)

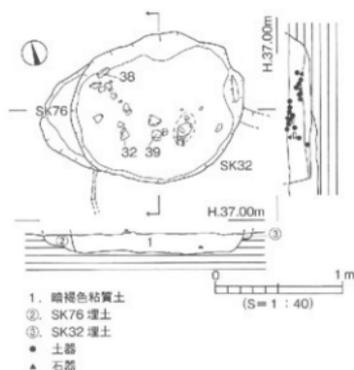
J11区に位置し、SK32(弥生時代前期末~中期初頭)・SP278-569-570-571(時期不明)に切れ、SP1299(時期不明)を切る。平面形態は円形で、規模は径1.50m、深さ0.16mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は東側部分が平坦で、西側は若干の凸凹をもつ。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は26~30で、土坑中央部の埋土上位から甕形土器(26~28)が、土坑西側で壺形土器(29)と用途不明土製品(30)が出土した。28は甕形土器の口縁部で、口縁端部よりやや下がった位置に断面三角形の凸帯を貼り付ける。



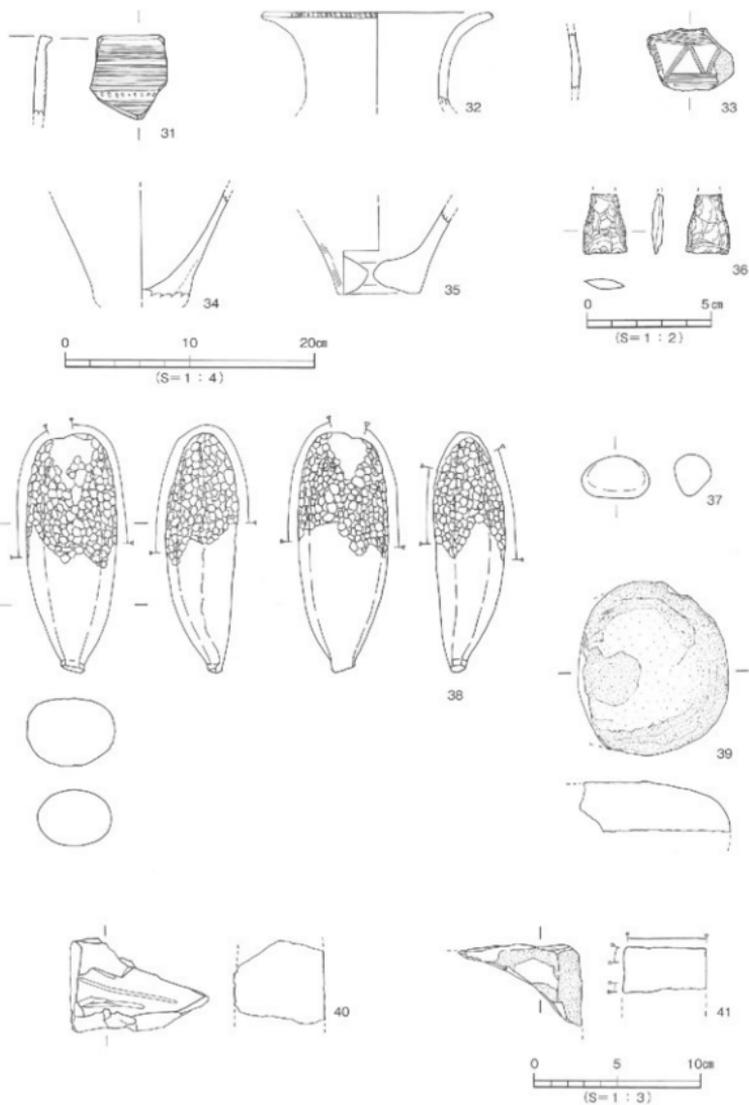
第15図 SK30測量図・出土遺物実測図

SK31 (第16・17図、図版4・10)

J・I～10・11区に位置し、SK32・76（弥生時代前期末～中期初頭）を切る。平面形態は楕円形で、規模は長軸1.60m、短軸1.21m、深さ0.19mを測る。断面形態は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。出土した遺物は31～41で、いずれも二次焼成を受けていた。しかし、遺構の埋土は焼成を受けておらず、焼土も含有していない。35・39～41は中央部上面で、31～34・36～38は西側の底面付近から出土した。



第16図 SK31測量図



第17図 SK31出土遺物実測図

S K 32 (第18図、図版10)

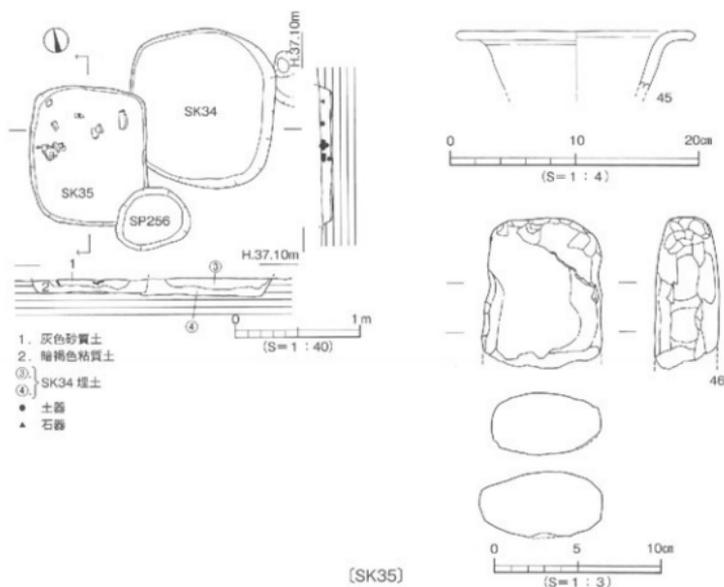
I・J10区に位置し、S K 31(弥生時代前期末～中期初頭)に切られる。平面形態は長方形で、規模は長軸1.70m、短軸1.26m、深さ0.19mを測る。底面は凹凸がある。埋土は黒褐色の粘質土単層である。遺物は41～44で、甕形土器と壺形土器の小片が数点出土している。

S K 35 (第18図)

H 9区に位置し、S P 256(時期不明)に切られ、S K 34(弥生時代前期末～中期初頭)を切る。平面形態は隅丸方形で、規模は長軸1.16m、短軸0.98m、深さ0.09mを測る。断面形態は逆台形状で、



[SK32]



[SK35]

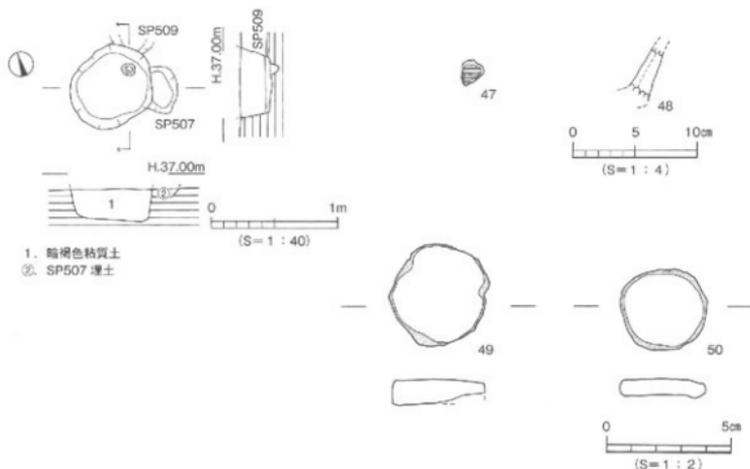
第18図 S K 35測量図・S K 32・35出土遺物実測図

底面はほぼ平坦である。埋土は2層で、上層が灰色の砂質土、下層が暗褐色の粘質土である。遺物は45・46で、上層から、壺形土器片(45)や伏採斧の柄基部(46)が出土した。

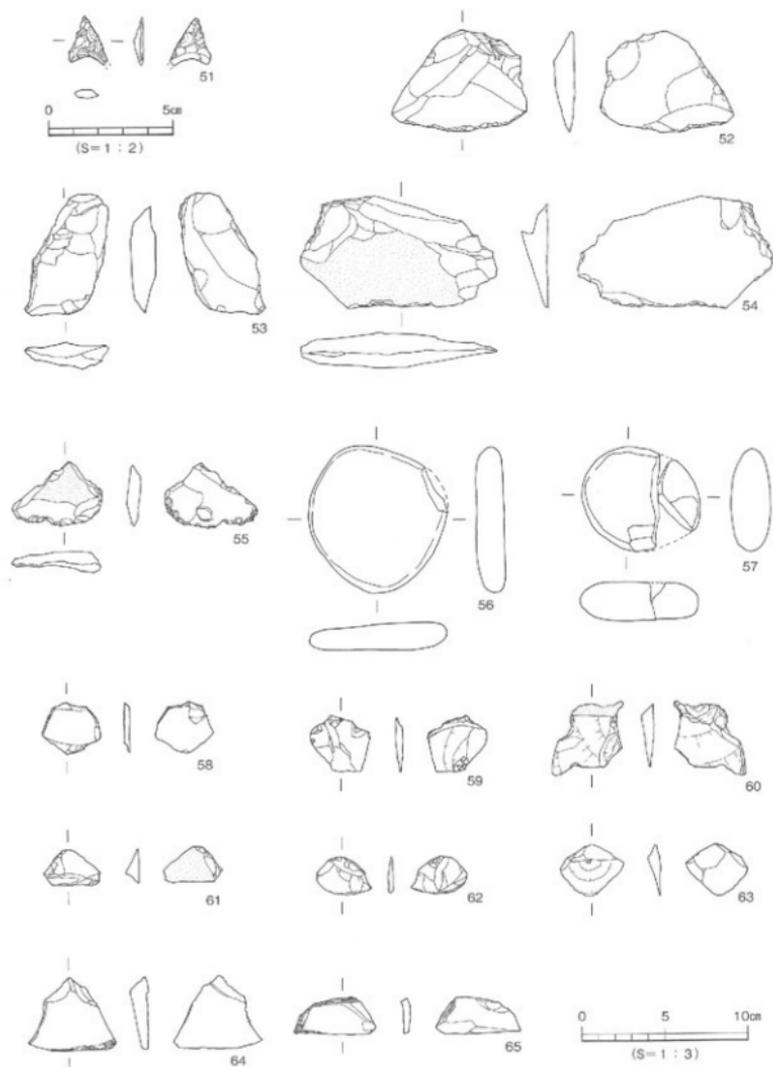
**S K 40** (第19・20図、図版11)

J 11区に位置する。S P 507・509(時期不明)を切る。平面形態は凹形で、規模は径0.69m、深さ0.26mを測る。断面形態は逆台形状である。底面はほぼ平坦で、東側の壁際には小穴が1基ある。土坑埋土は暗褐色の粘質土単層で、小穴も同じ埋土であった。遺物は47~65で、石器の成品や石器素材が多数出土した。成品は打製石鏃が1点(51)、スクレイパーが4点(52~55)、円盤状の用途不明石製品が2点(56・57)で、石器素材はサヌカイト片が8点(58~65)出土した。土器は小片が出土したにすぎない。他に、用途不明土製品が2点(49・50)が出土した。

石器の成品と素材が、ひとつの上坑で出土した遺構はS K 40に限られる。



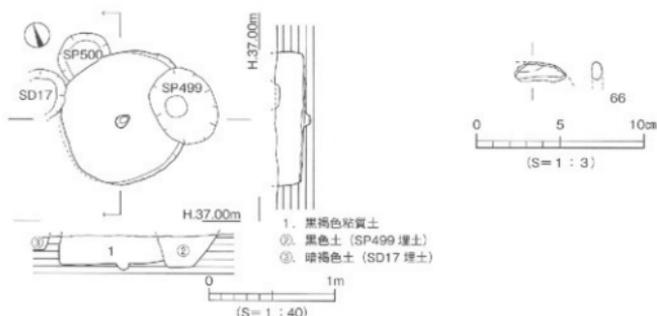
第19図 S K 40測量図・出土遺物実測図(1)



第20図 SK40出土遺物実測図(2)

## S K 41 (第21図)

J 10区に位置し、S P 499・S D 17 (時期不明) に切られ、S P 500 (時期不明) を切る。平面形態は円形で、規模は径1.19m、深さ0.23mを測る。断面形態は袋状となる。底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色の粘質土単層である。土坑中心部分には径10cmの小穴があり、埋土は遺構埋土と同じである。遺物は少なく、実測可能な遺物は1点 (66) で、石燈丁の破片となる。



第21図 S K 41測量図・出土遺物実測図

## S K 50 (第22図、図版12)

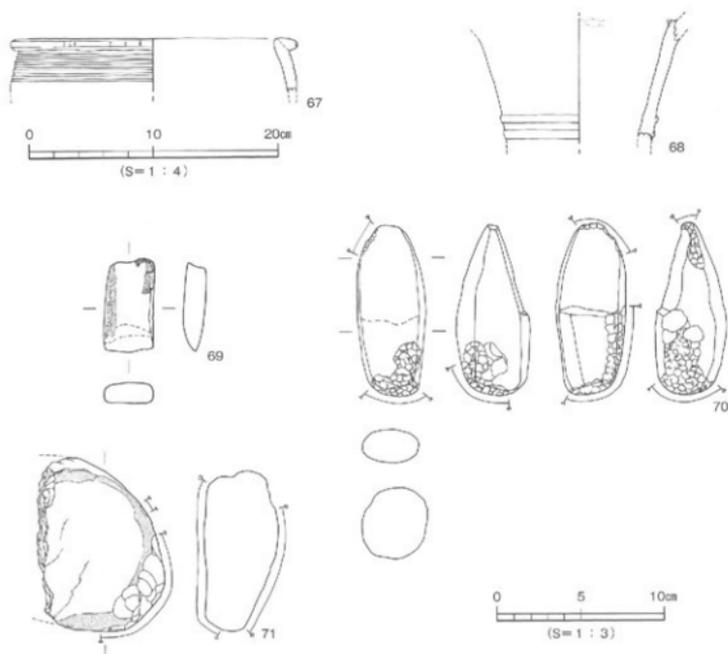
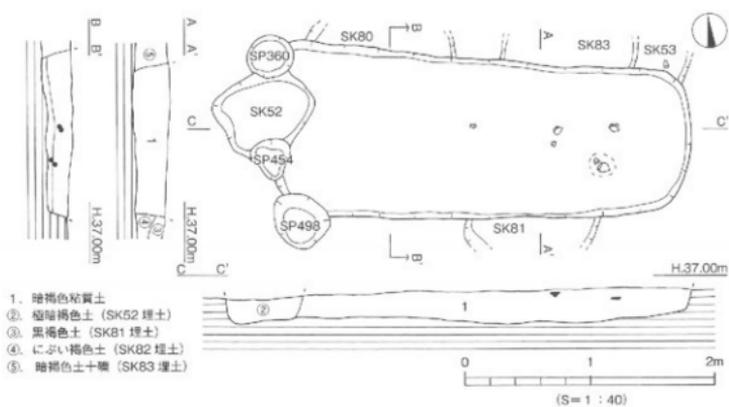
K・L～8・9区に位置し、S K 52・S P 360・454・498 (時期不明) に切られ、S K 53・80・81・83 (弥生時代前期末～中期初頭) を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸3.32m、短軸1.40m、深さ0.26mを測る。断面形態は逆台形状で、底面はほぼ平坦であった。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は67～71で、埋土上位から中位にかけて、甕形土器 (67)、壺形土器 (68)、加工斧の扁平片刃石斧 (69)、棒状叩き石 (70) が出土した。

## S K 53 (第23図、図版12)

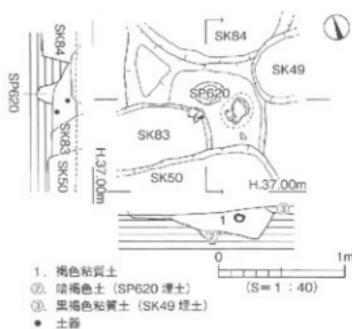
J・K 8区に位置し、S K 49 (時期不明)・50・83・84 (弥生時代前期末～中期初頭) に切られる。平面形態は長方形で、規模は長軸1.11m、短軸0.70m、深さ0.26mを測る。底面はテラス状になった浅い部分と、深い部分からなり、深い部分の壁体は斜めに立ち上がる。埋土は褐色の粘質土単層である。遺物は、72の壺形土器がほぼ完形で出土した。この土器は口縁部分を下にして検出された。

## S K 60 (第23図)

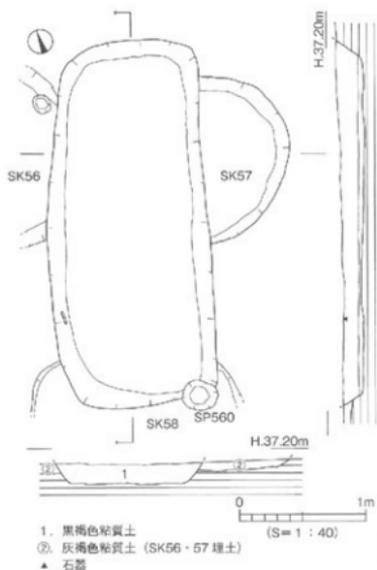
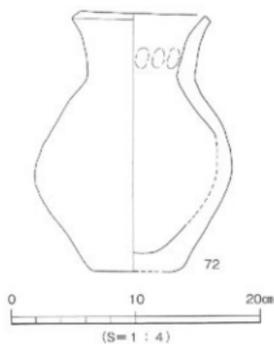
C 10・11区に位置し、S P 560 (時期不明) に切られ、S K 56・57・58 (弥生時代前期末～中期初頭) を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸2.99m、短軸1.28m、深さ0.16mを測る。断面形態は逆台形状で、底面はほぼ平坦であった。埋土は黒褐色の粘質土単層である。遺物は73と74で、土坑の東壁面付近の埋土上位から土器の底部1点 (73) と石器1点 (74) が出土した。



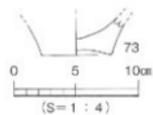
第22図 SK50測量図・出土遺物実測図



[SK53]



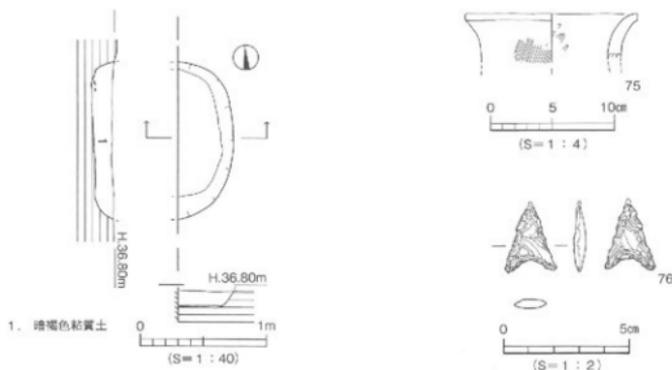
[SK60]



第23図 S K 53・60測量図・出土遺物実測図

S K 87 (第24図)

L 6・7区に位置し、遺構西部が調査区外に続く。平面形態は円形と推測され、検出現場は径1.29m、深さ0.16mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は75と76で、壁体直下の底面から壺形土器の口縁部片1点(75)、埋土中位から打製石鏃1点(76)が出土した。



第24図 S K 87測量図・出土遺物実測図

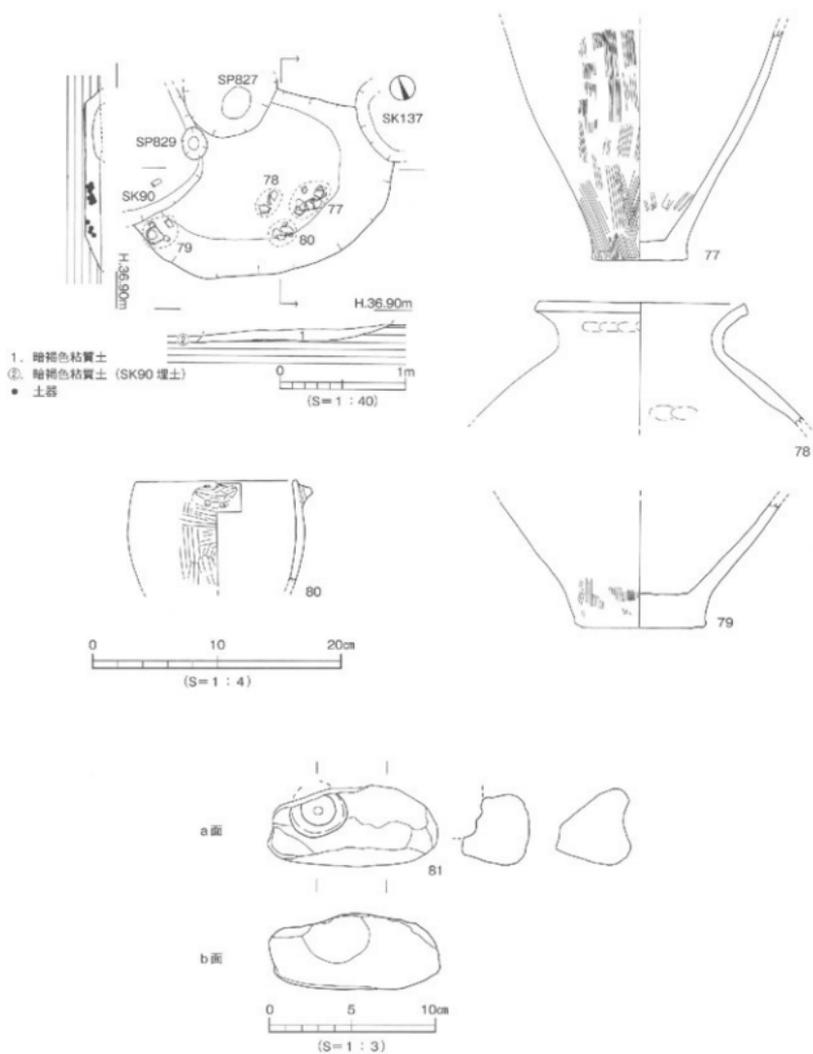
S K 89 (第25図)

L 6区に位置し、S K 90・137(弥生時代前期末～中期初頭)・S P 827・829(時期不明)に切られる。平面形態は楕円形で、規模は長軸1.52m、短軸1.49m、深さ0.1mを測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層。遺物は77～81で、南東側と南西側にそれぞれ密集し、底面から高さ5cm付近で出土した。南東側の土器(77・78・80)は各個体ごとに折り重なって出土した。南西側では土器(79)が、中央部分からは石器(81)が出土した。81は用途不明品で、石材は堆積岩である。破損しているが、a面には円形の窪みが、b面には緩かな窪みが観察できる。

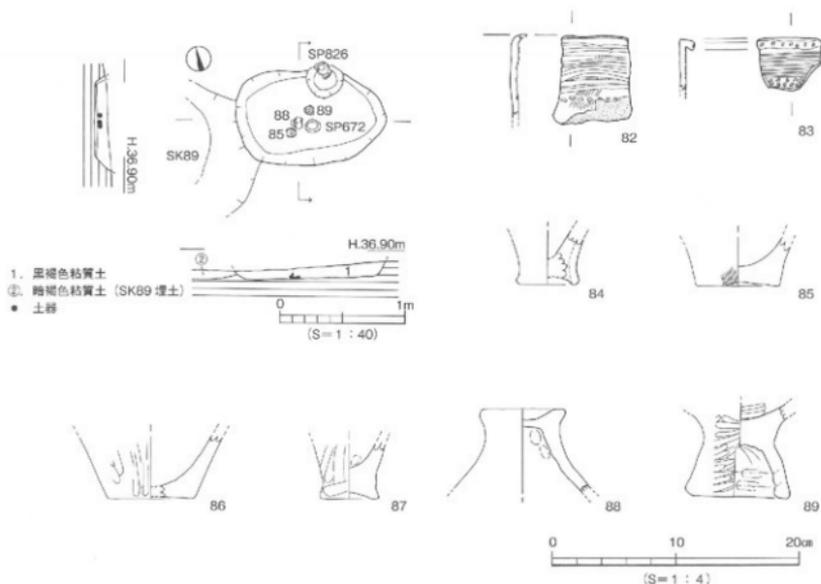
S K 137 (第26図、図版6)

K 6区に位置し、S P 826(弥生時代前期末～中期初頭)に切れ、S K 89(弥生時代前期末～中期初頭)・S P 672(時期不明)を切る。平面形態は楕円形で、規模は長軸1.16m、短軸0.79m、深さ0.08mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、底面は東から西へ緩やかな傾斜をなす。埋土は黒褐色の粘質土単層である。遺物は82～89で、底面中央部から底部2点(87・89)と蓋1点(88)が出土し、埋土中からは底部片が3点(84・85・86)出土している。

このうち、87の鉢の底部内面には赤色顔料が付着していた。分析の結果、ベンガラであることが判明した。その他の遺物や遺構からは、赤色顔料は検出されなかった。



第25図 SK89測量図・出土遺物実測図



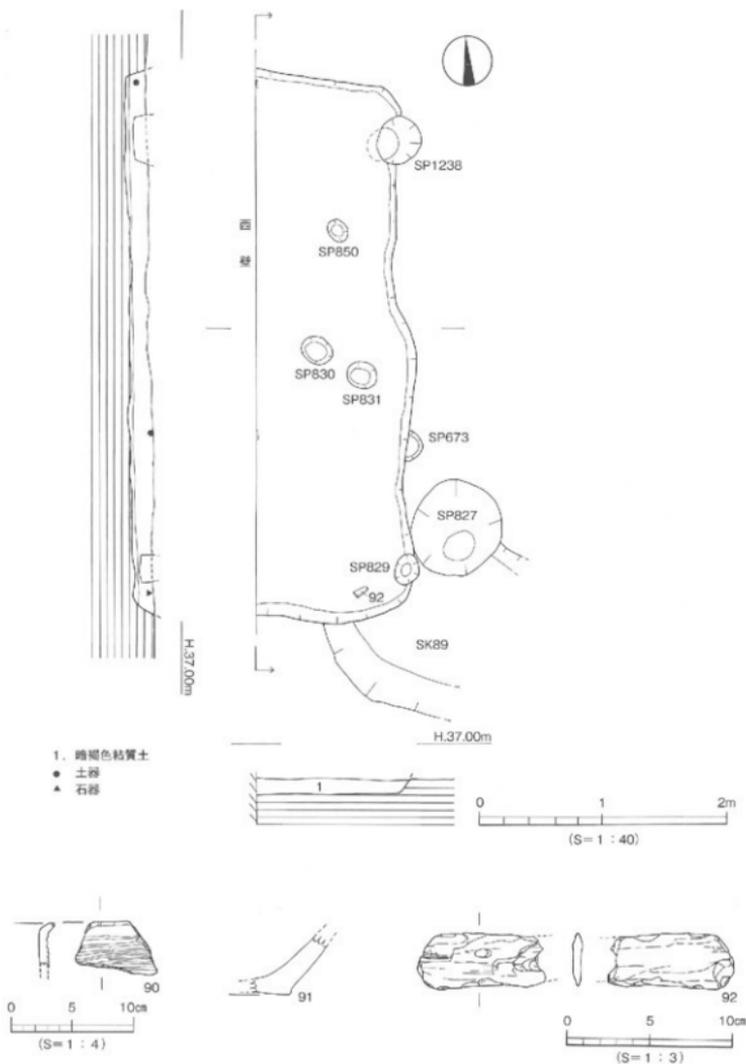
第26図 SK137測量図・出土遺物実測図

**SK90** (第27図)

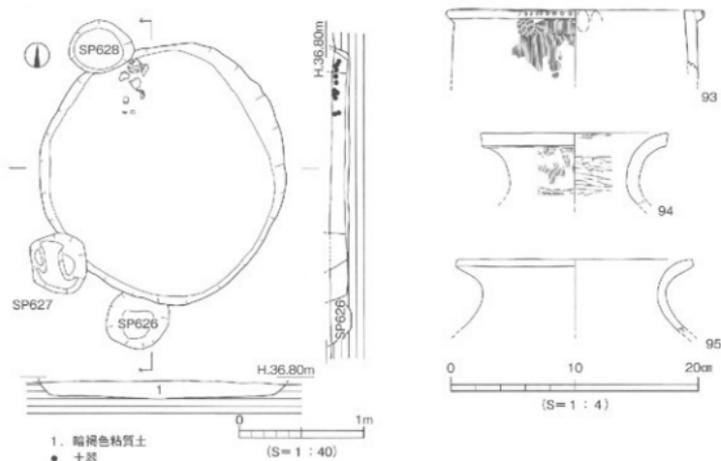
L5・6区に位置する。SP829・1238(時期不明)に切られ、SK89(弥生時代前期末～中期初頭)・SP673・830・831・850(時期不明)を切り、調査区に続く。平面形態は長方形で、規模は長軸4.42m、深さ0.1mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦であった。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は90～92で、南側上位から土器2点(90・91)と石庵丁の未製品(92)が出土した。

**SK93** (第28図)

K3区に位置し、SP627・628(時期不明)に切られ、SP626(時期不明)を切る。平面形態は円形で、規模は径2.00m、深さ0.16mを測る。断面形態は皿状で、底面は平坦であった。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は93～95で、北側の埋土上位から密集して壺形土器1点(93)と壺形土器2点(94・95)が出土した。



第27図 SK90測量図・出土遺物実測図



第28図 SK93測量図・出土遺物実測図

**SK98** (第29図)

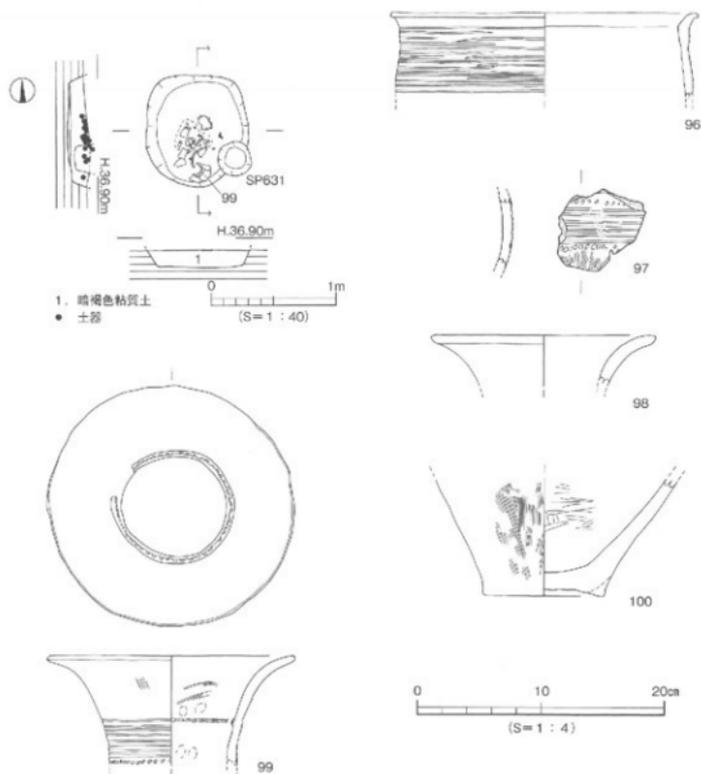
K4・5区に位置する。SP631(時期不明)に切られる。平面形態は楕円形で、規模は長軸0.90m、短軸0.81m、深さ0.14mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は埋土上位から、土器(96~100)と炭化物が密集して出土した。

**SK103** (第30図、図版5・12)

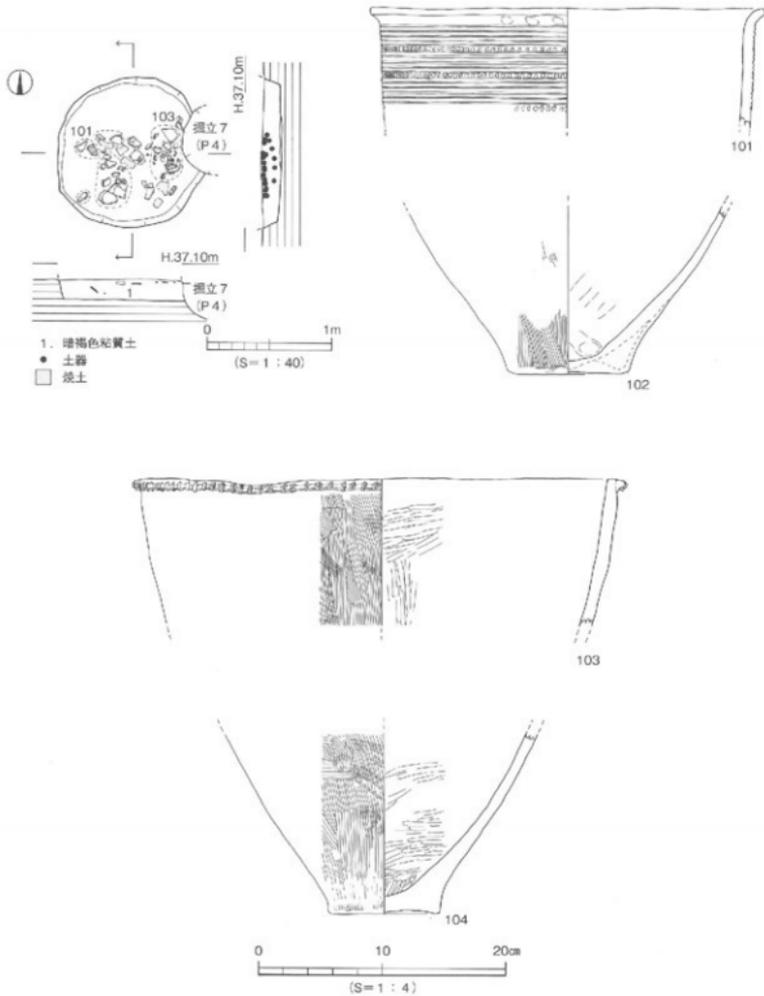
I7区に位置し、掘立柱建物7(上限:弥生時代中期後葉)の柱穴に切られる。平面形態は円形で、規模は径1.22m、深さ0.17mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は101~104で、土坑南半分に分布し、埋土上位から中位部分でバラバラな状態で出土した。他に、土器と共に若干の焼土塊が出土した。出土品には2個体分の甕形土器がある。

**SK106** (第31図、図版12)

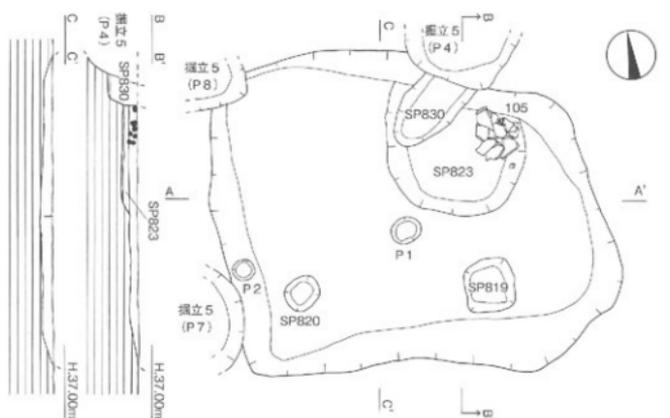
I、J4・5区に位置し、掘立柱建物5(古墳時代~古代)・SP819・820・830(時期不明)に切られ、SP823(時期不明)を切る。平面形態は不整形な長方形で、規模は長軸2.98m、短軸2.56m、深さ0.14mを測る。断面形態は皿状で、底面はほぼ平坦であった。埋土は黒褐色の粘質土単層である。P1・2は当遺構と同じ埋土であることから、SK106に伴うものと考えられる。遺物は105・106で、底面の北西部分から土圧で潰れた甕形土器(105)が出土した。105・106は同一個体の可能性がある。



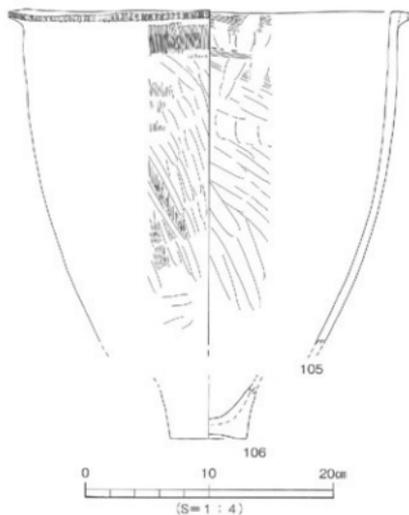
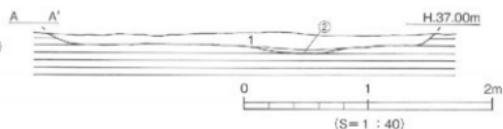
第29図 SK98測量図・出土遺物実測図



第30図 SK 103測量図・出土遺物実測図



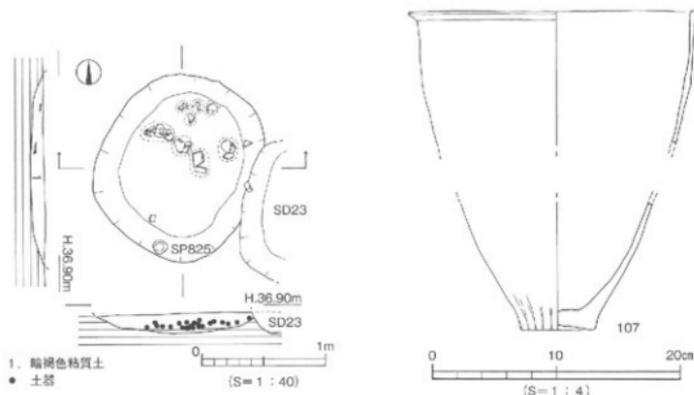
- 1. 黒褐色粘質土
- ②. 黒褐色土 (SP823 埋土)
- 土器



第31図 SK 106測量図・出土遺物実測図

SK110 (第32図)

J2区に位置し、SD23(弥生時代中期中葉)・SP825(時期不明)に切られる。平面形態は円形で、規模は径1.52m、深さ0.16mを測る。断面形態は皿状で、埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は北側の底面付近から出土し、甕形土器が1個体分(107)あった。



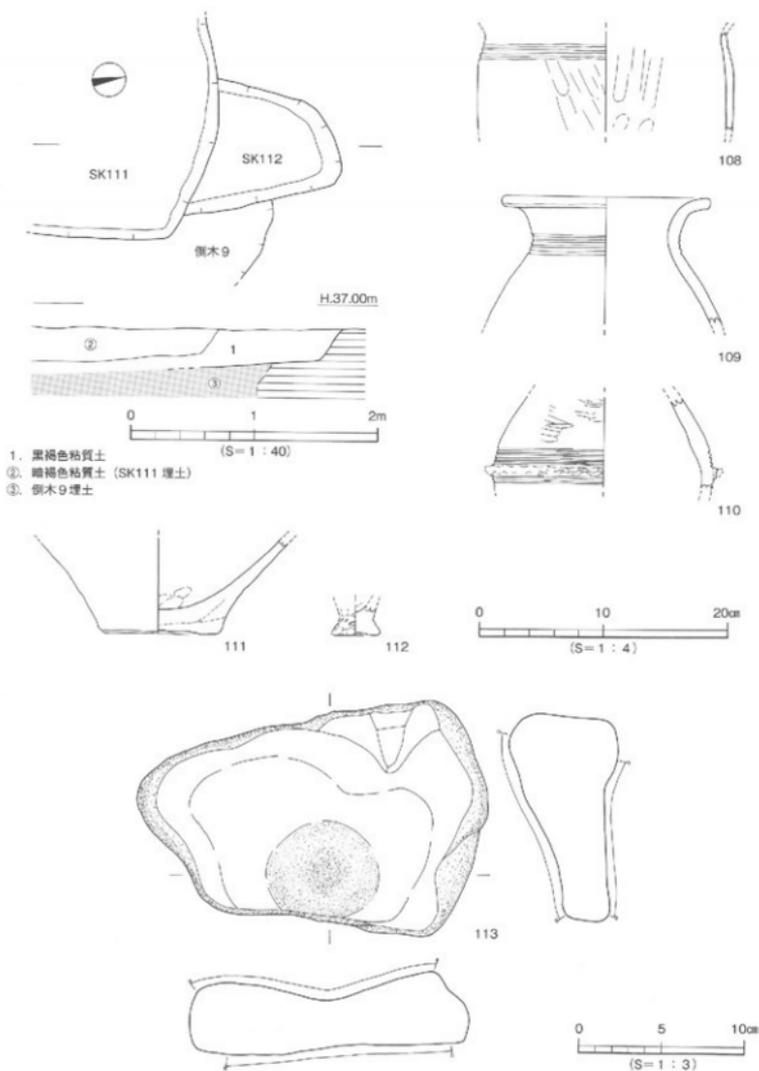
第32図 SK110測量図・出土遺物実測図

SK112 (第33図)

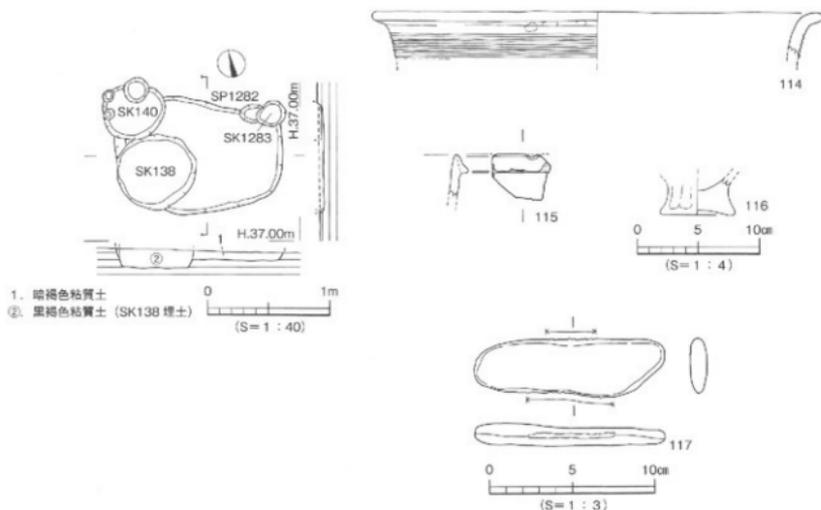
H2区に位置し、SK111(弥生時代中期中葉)に切られる。平面形態は不整形な長方形で、規模は長軸1.10m、短軸1.06m、深さ0.27mを測る。断面形態は逆台形状で、壁面はやや斜めにたちあがり、底面は南に向かって緩やかに下がる。埋土は黒褐色の粘質土単層であった。遺物は108~113で、南側の底面から、甕形土器片1点(108)、壺形土器片3点(109~111)、ミニチュア土器1点(112)、台石1点(113)が出土した。

SK113 (第34図)

H、I3・4区に位置し、SK138(弥生時代前期末~中期初頭)・140・SP1282・1283(時期不明)に切られる。平面形態は不整形な長方形で、規模は長軸2.80m、短軸1.77m、深さ0.08mを測る。断面形態は皿状で、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は114~117で、底面から甕形土器片2点(114・115)、底部片1点(116)、石器1点(117)が出土した。



第33図 SK112測量図・出土遺物実測図



第34図 SK 113測量図・出土遺物実測図

SK 119 (第35図)

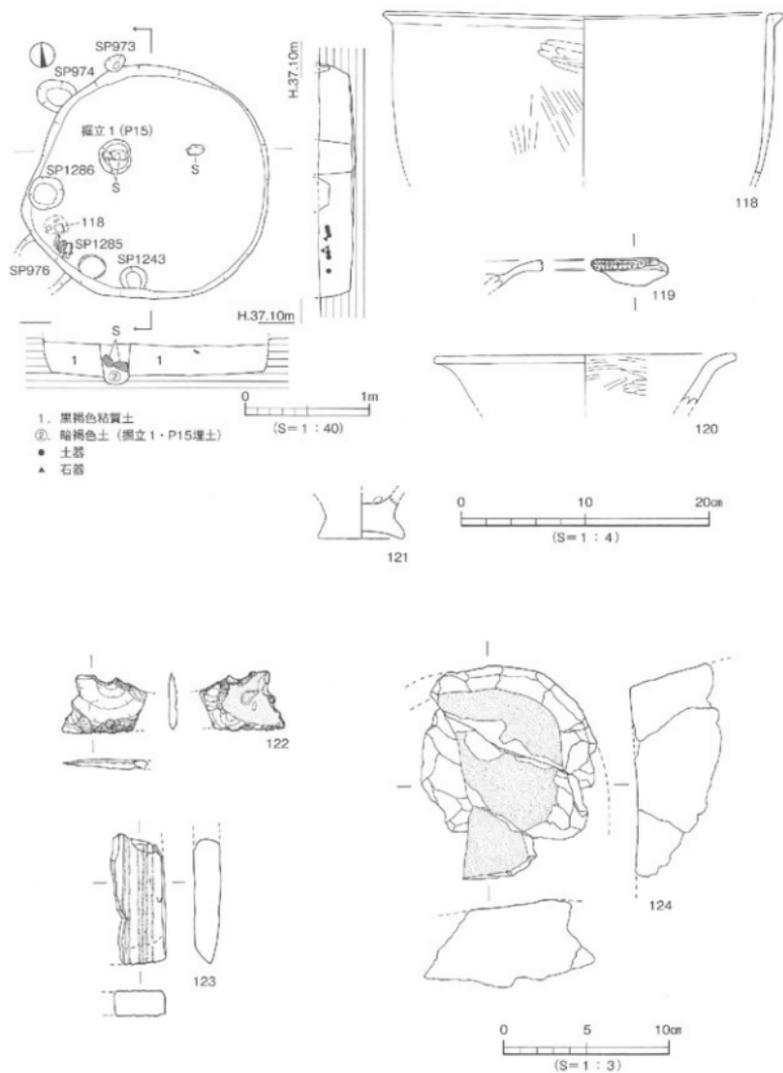
F 8 区に位置し、掘立柱建物 1 (時期不明) の柱穴や SP 973・1286 (時期不明) に切られ、SP 974・976・1243・1285 (時期不明) を切る。平面形態は円形で、規模は径1.96m、深さ0.25mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は黒褐色の粘質土単層である。遺物は、南西部の埋土上位から中位で118~124が密集して出土した。118は甕形土器、119は壺形土器である。石器 (122・123・124) が出土した。

SK 126 (第36図、図版12)

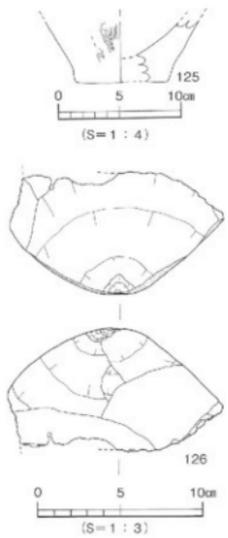
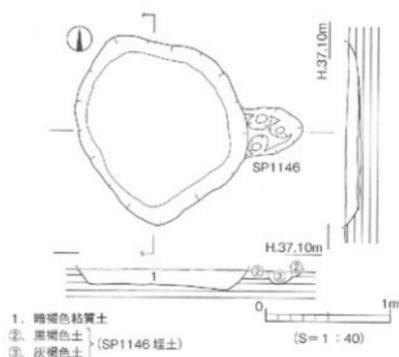
C 3 区に位置する。平面形態は不整形円形で、SP 1146 (時期不明) を切る。規模は径1.55m、深さ0.12mを測る。断面形態は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は、壺形土器の底部片 (125) と剃片刃器 1 点 (126) が出土した。

SK 130 (第36図)

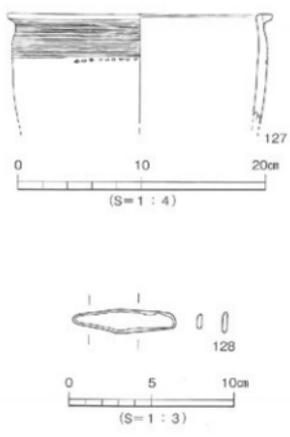
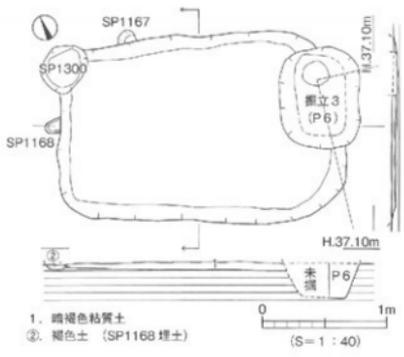
C 7 区に位置し、掘立柱建物 3 (時期不明) の柱穴や SP 1300 (時期不明) に切られ、SP 1167・1168 (時期不明) を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸2.35m、短軸1.55m、深さが0.04mを測る。断面形態は皿状で、底面は平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は甕形土器 (127) と石器 1 点 (128) が出土している。



第35図 SK119測量図・出土遺物実測図



[SK126]

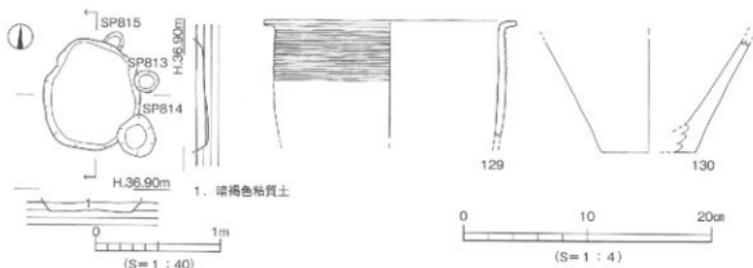


[SK130]

第36図 SK126・130測量図・出土遺物実測図

## SK135 (第37図)

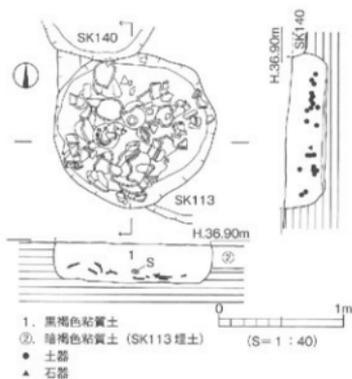
K7区に位置する。SP813・814 (時期不明) に切られ、SP815 (時期不明) を切る。平面形態は楕円形で、規模は径0.90m、深さ0.06mを測る。断面形態は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は、甕形土器の口縁部 (129) と底部 (130) が出土した。



第37図 SK135測量図・出土遺物実測図

## SK138 (第38～41図、図版5・13・14)

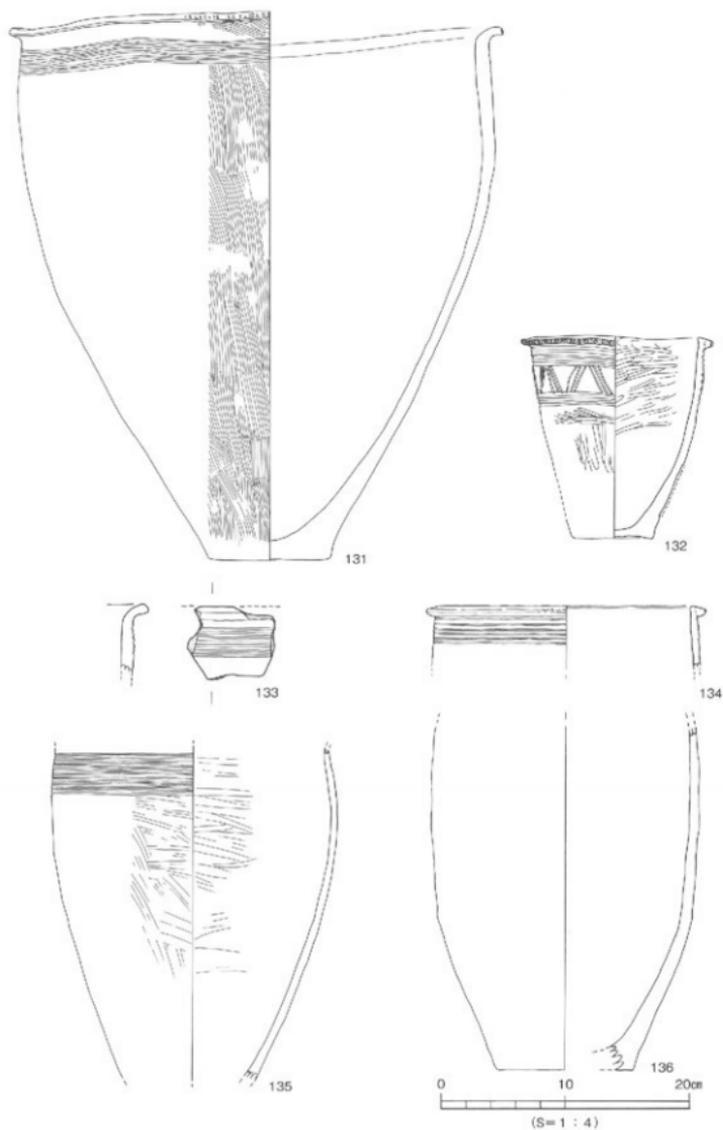
I3区に位置し、SK140 (時期不明) に切られ、SK113 (弥生時代前期末～中期初頭) を切る。平面形態は円形で、規模は径1.30m、深さ0.32mを測る。断面形態は袋状になり、壁体は内湾し、底面は平坦になる。埋土は黒褐色の粘質土単層であった。遺物の出土状況は、底面上から中位までであり、人頭大の石や拳大の礫も土器にまじって多く出土した。土器は全て破損した状態で出土し、このうち131・132は接合するとほぼ完形になった。遺物は131～149で、土器は甕形土器6点、壺形土器4点、釜形土器1点、底部5点、石器はスクレイパー1点、磨石1点、磨石・敲石1点が出土した。



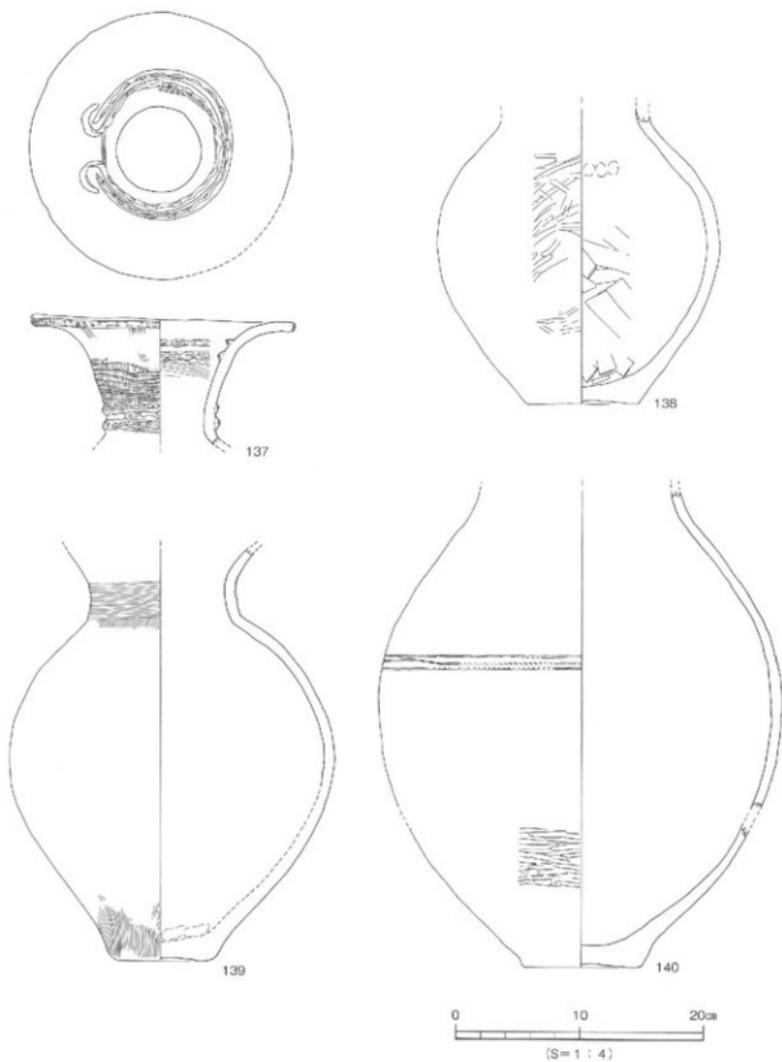
第38図 SK138測量図

## SK147 (第42図)

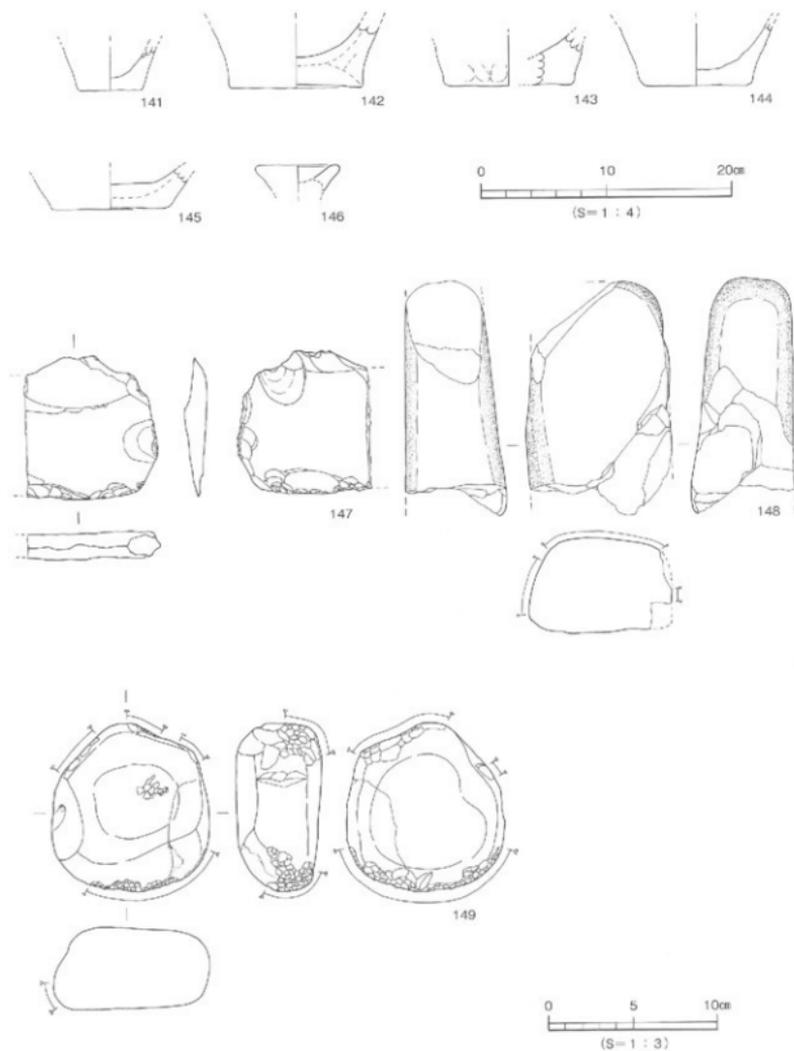
F2区に位置し、SK146 (古墳時代)・SP898・902・903 (時期不明) に切られる。遺構は調査区外へ延びるが、平面形態は方形又は、長方形であると推測される。規模は長軸2.26m、短軸1.60m、深さ0.24mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は起伏が激しい。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は150～154で、北壁沿いの埋土中位から甕形土器 (150) が出土した。



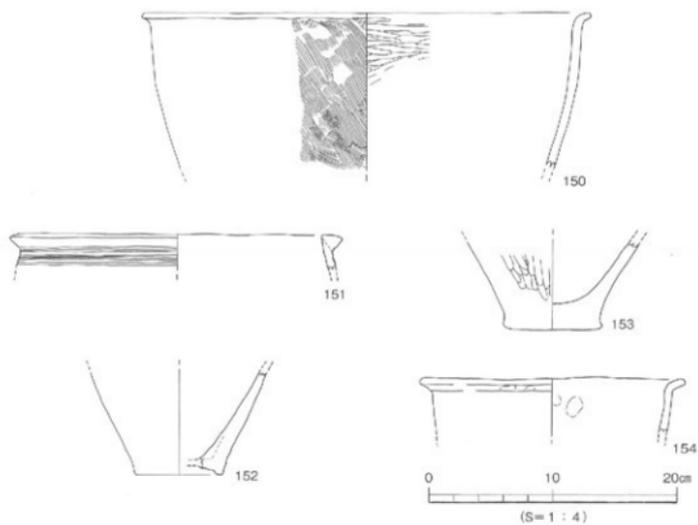
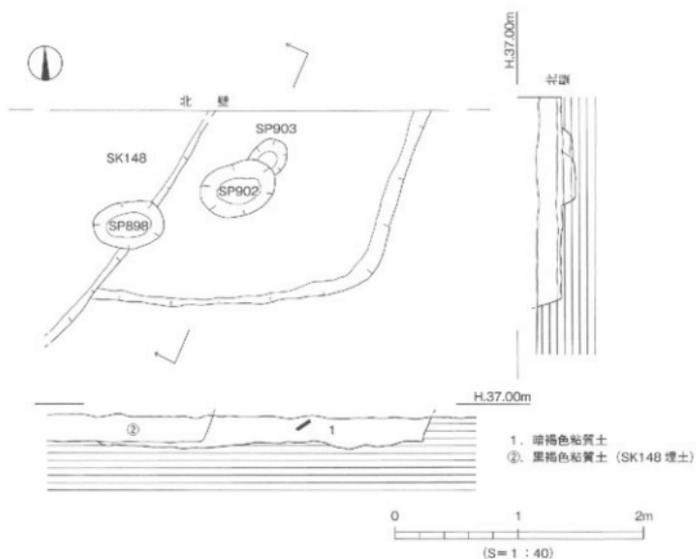
第39図 S K138出土遺物実測図(1)



第40図 S K 138出土遺物実測図(2)



第41図 SK138出土遺物実測図(3)



第42図 SK147測量図・出土遺物実測図

## 2) 土坑出土遺物 (第43・44図)

前述の土坑のほか、弥生時代前期末～中期初頭の遺物が出土した土坑は20基ある。

155は壺形土器の底部で、S K 4出土品。156・157はS K 37出土品。156は甕形土器の口縁部、157はミニチュア土器の底部である。158は壺形土器の頸部で、S K 48出土品。159は甕形土器の口縁部で、S K 63出土品。160～162はS K 65出土品。160は壺形土器の頸部、161は胴部、162は底部である。163～165はS K 70出土品。163は甕形土器の口縁部、164・165は底部である。166～168はS K 71出土品。166は壺形土器の底部、167は壺形土器の頸部、168は焼土塊である。169はミニチュア土器の底部で、S K 77出土品。170は大型の甕形土器の口縁部で、S K 97出土品。171は甕形土器の底部で、S K 99出土品。172は壺形土器の頸部で、S K 102出土品。173は鉢形土器の口縁部で、S K 104出土品。174は壺形土器で、S K 109出土品。175～177はS K 115出土品。175は壺形土器の頸部、176は甕形土器の口縁部、177は底部である。178は壺形土器の底部で、S K 116出土品。179～181はS K 123出土品。179は壺形土器の口頸部、180は底部、181は甕形土器転用のコシキである。182は甕形土器の底部で、S K 124出土品。183は壺形土器の底部で、S K 144出土品。184・185はS K 39出土品。184は剥片刃器、185は磨石・敲石である。

## 3) 溝

溝は、S D 5・8・21・25の4条を検出した。

## S D 5 (第45図)

C～F10、E11区に位置する直線溝である。断面形態は逆台形状で、底面は部分的に凸凹を持ちながら、全体的には東から西へ向かって低くなる。規模は長さ3.07m、幅0.7mを測る。埋土は2層で、上層が黒褐色の粘質土、下層は褐色・明褐色・橙色の粘質土が混在していた。遺物は186・187で、壺形土器の頸部1点(186)と、伐採斧の柄の部分の可能性のある石製品1点(187)が出土した。

## 4) 柱穴・小穴

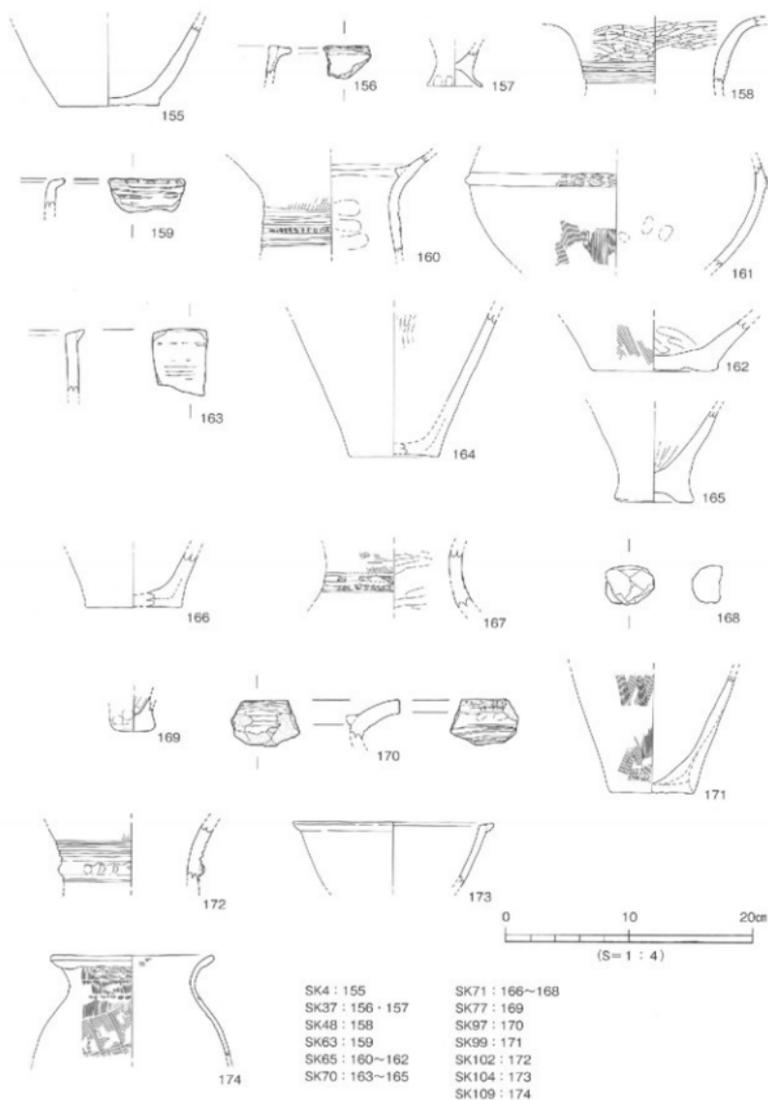
遺物の出土した柱穴・小穴は8基ある。

## S P 826 (第46図)

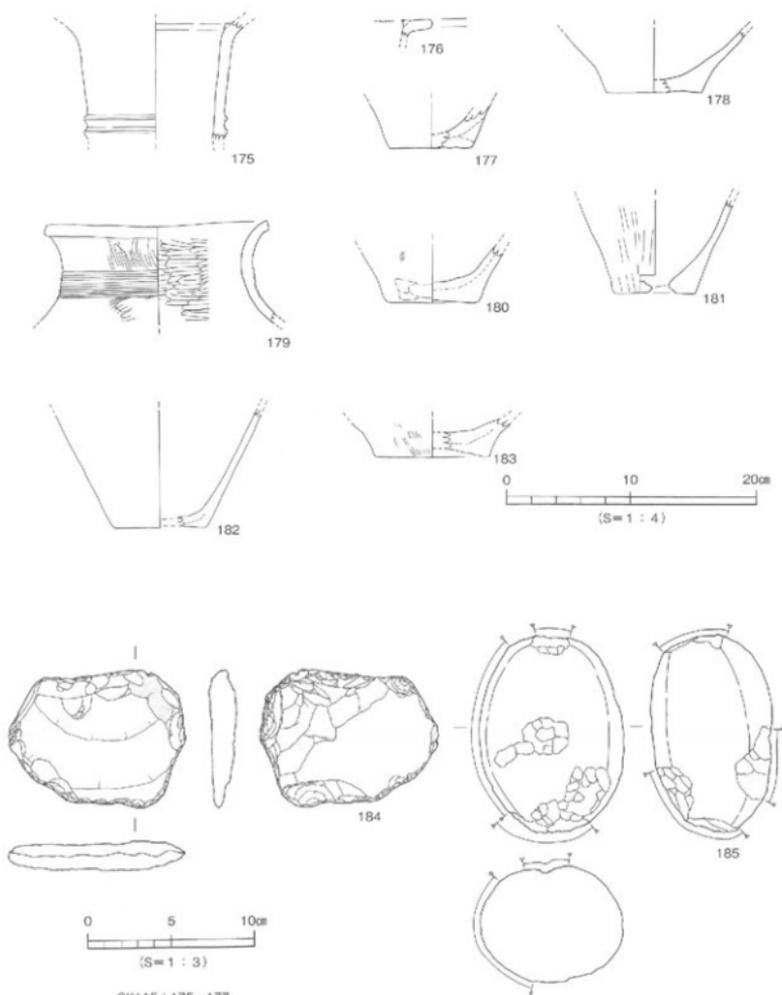
K 6区に位置する小穴で、S K 137(弥生時代前期末～中期初頭)を切る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は、壁沿いの底面から1個体になる甕形土器の口縁部(188)と底部(189)が重なって出土した。

## 柱穴・小穴出土遺物 (第46図、図版14)

190は壺形土器の口縁部で、S P 948出土品。191は壺形土器で、S P 1009出土品。192は壺形土器の胴部片で、S P 846出土品。193は壺形土器の胴部で、S P 1074出土品。194は鉢形土器で、S P 276出土品。195は鉢形土器の口縁部で、S P 298出土品。196は円形の用途不明土製品で、S P 1285出土品。

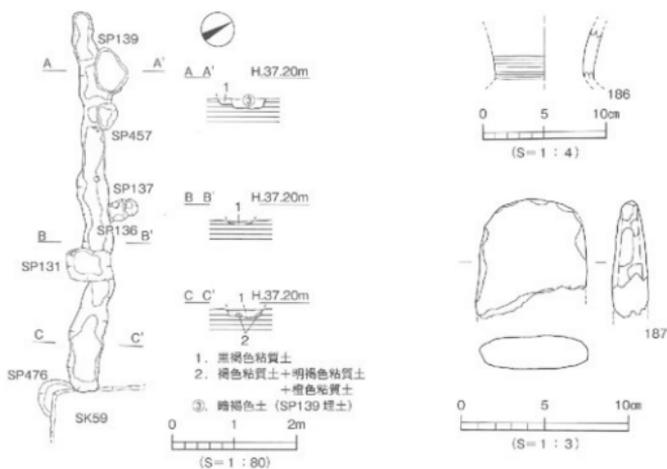


第43図 SK出土遺物実測図(1)

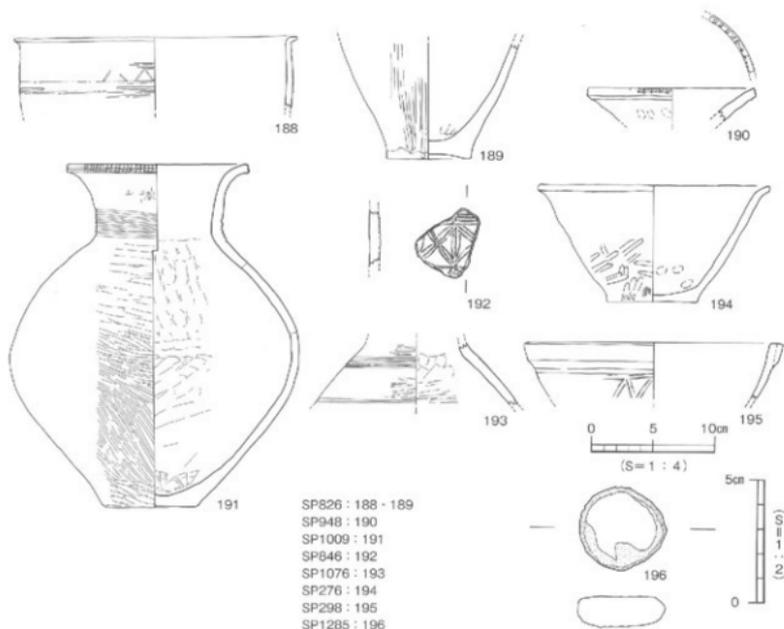


SK115: 175~177  
 SK116: 178  
 SK123: 179~181  
 SK124: 182  
 SK144: 183  
 SK39: 184・185

第44図 SK出土遺物実測図(2)



第45図 S D5測量図・出土遺物実測図



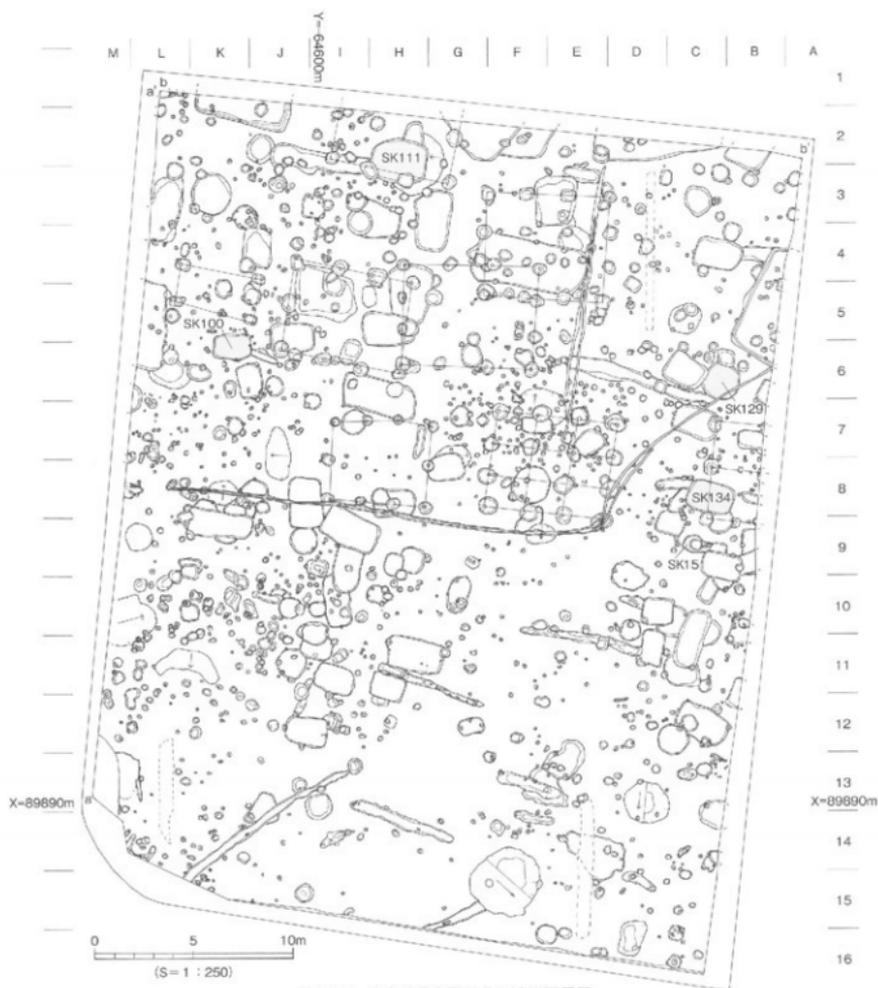
第46図 SP出土遺物実測図

(2) 弥生時代中期前葉 (第47図)

弥生時代中期前葉の遺構には土坑5基 (SK15・100・111・129・134) がある。

1) 土坑

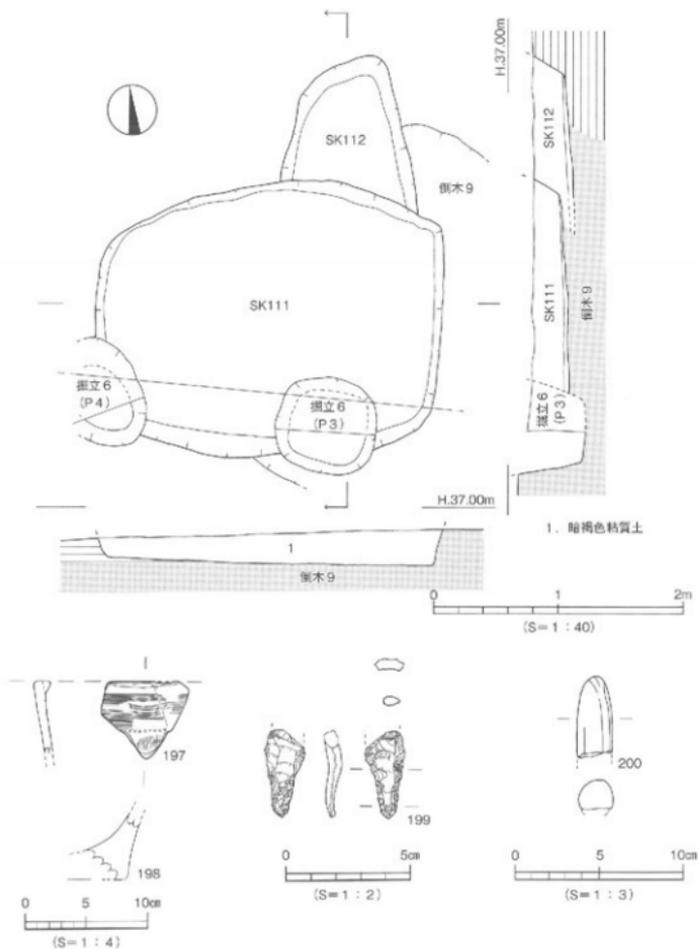
この時期の土坑は5基で、長方形が4基、円形が1基ある。



第47図 弥生時代中期前葉の遺構配置図

## SK111 (第48図)

H2・3区に位置する。掘立柱建物6(古墳時代～古代)に切られ、SK112(弥生時代前期末～中期初頭)を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸2.77m、短軸2.19m、深さ0.28mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は197～200で、底面から中位に菱形土器1点、底部片1点、石器2点が出土した。197は口縁部で、櫛描文を施す。



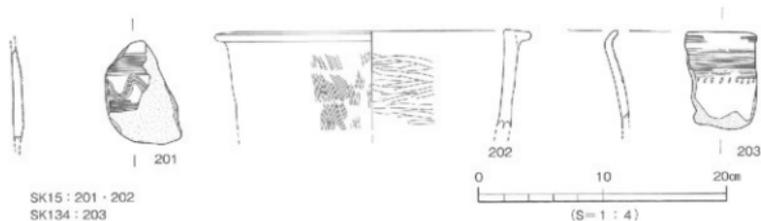
第48図 SK111測量図・出土遺物実測図

**SK15** (第49図)

C9区に位置し、SK64・66(時期不明)に切られる。平面形態は不整長方形で、規模は長軸1.32m、短軸0.94m、深さ0.09mを測る。断面形態はレンズ状であり、埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は201・202で、底面から埋土中位までに甕形土器2点が出土した。201は胴部片、202は口縁部である。

**SK134** (第49図)

C8区に位置し、掘立柱建物3(時期不明)に切られ、SK68(弥生時代前期末～中期初頭)とSD27(時期不明)を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸2.23m、短軸1.65m、深さ0.06mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は極暗褐色の粘質土単層である。遺物は甕形土器の口縁部が1点(203)出土した。



第49図 SK15・SK134出土遺物実測図

## (3) 弥生時代中期中葉 (第50図)

弥生時代中期中葉の遺構には、溝2条 (SD1・23)・土坑4基 (SK23・46・122・145)・柱穴1基がある。



第50図 弥生時代中期中葉の遺構配置図

## 1) 土 坑

この時期の土坑は4基で、長方形が2基、円形は2基である。

## SK122 (第51図、図版6・14)

E・F～4・5区に位置し、掘立柱建物2・4(古墳時代～古代)、SP807・846・907・912・913・1257・1312(時期不明)に切られ、SK123(弥生時代前期末～中期初頭)、SP843・905・997(時期不明)を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸6.04m、短軸2.36m、深さ0.26mを測る。調査地内検出の他の長方形土坑に比べると、規模は2～3倍大きい。断面形態は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は204～207で、204・205が埋土中位、207は南東隅埋土上位から出土した。207は碧玉製の管玉で、1/2の遺存である。

## SK23 (第52図)

J・K～13・14区に位置し、SD10(時期不明)に切られる。平面形態は不整楕円形で、規模は長軸1.60m、短軸1.50m、深さ0.07mを測る。断面形態は皿状である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は、壺形土器の口縁部が1点(208)出土した。

## 2) 溝

溝は2条を検出した。

## SD1 (第53図)

D15区に位置する直線溝である。断面形態は、逆台形状で、底面は南東から北西に向かって低くなる。規模は長さ1.80m、幅0.4m、深さ0.16mを測る。埋土は2層で、上層が暗褐色の粘質土、下層が褐色の粘質土である。遺物は210～212で、西南部の底面付近から壺形土器2点(210・211)、鉢形土器1点(212)、底部1点(213)が出土した。

## SD23 (第54図)

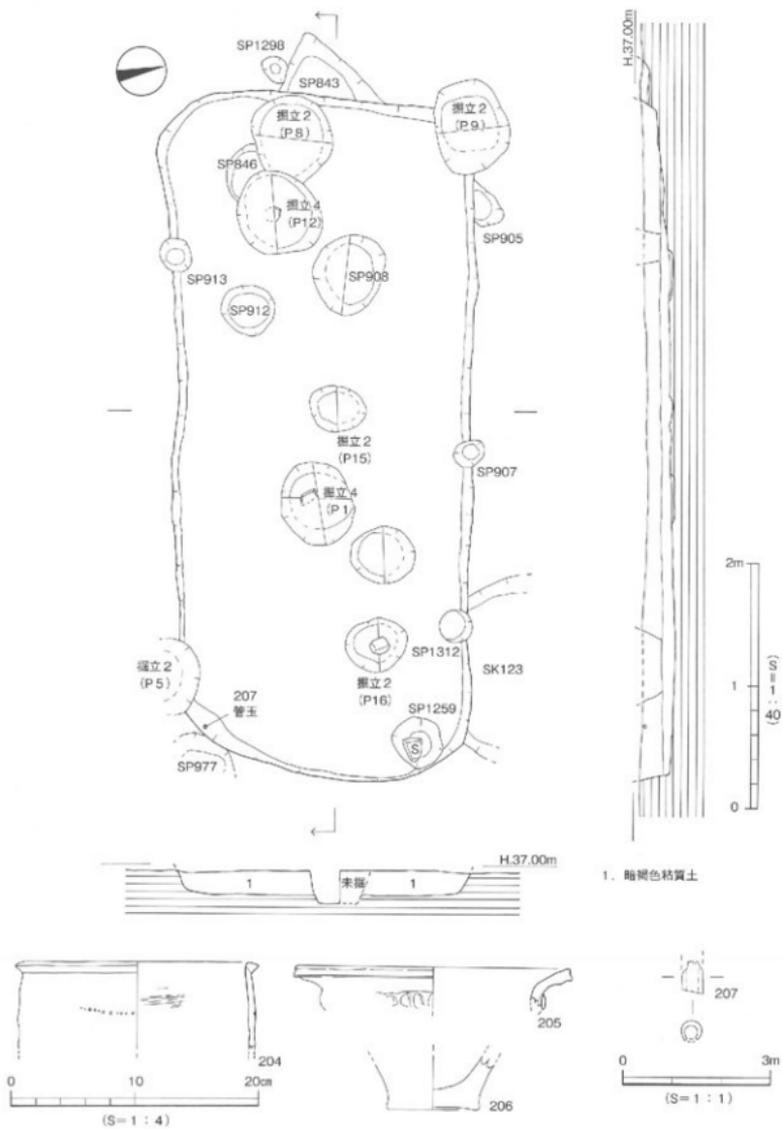
I・J2区に位置する直線溝である。掘立柱建物6・SP710・711・712・833(時期不明)に切られ、SK110・111(弥生時代前期末～中期初頭)を切る。規模は長さ4.40m、幅1.25m、深さ0.18mを測る。断面形態は皿状である。埋土は暗褐色の粘質土単層であった。遺物は、底面付近から壺形土器が2点(214・215)出土した。

## 3) 柱穴・小穴

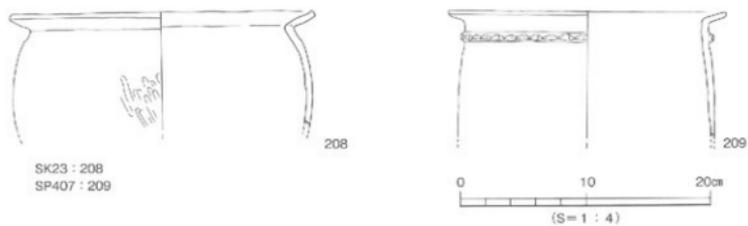
出土遺物から、この時期に確認できる柱穴・小穴はSP407の1基である。

## SP407出土遺物 (第52図)

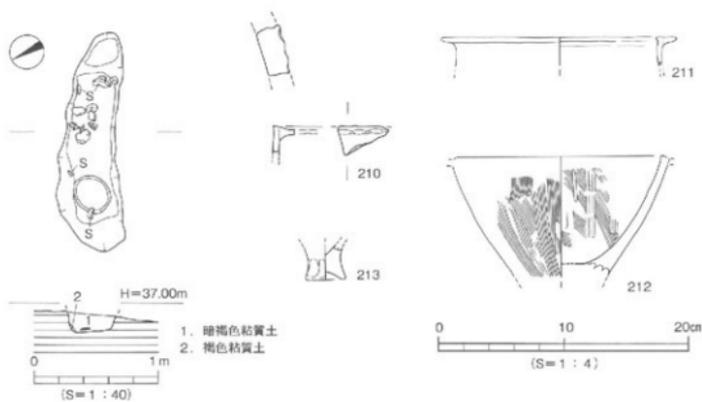
209は壺形土器の口縁部である。



第51図 SK122測量図・出土遺物実測図



第52図 SK23・SP407出土遺物実測図



第53図 SD1測量図・出土遺物実測図



第54図 SD23出土遺物実測図

(4) 弥生時代中期後葉～後期初頭 (第55図)

弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構には、掘立柱建物址1棟・土坑4基 (SK8・73・121・128)・柱穴5基がある。



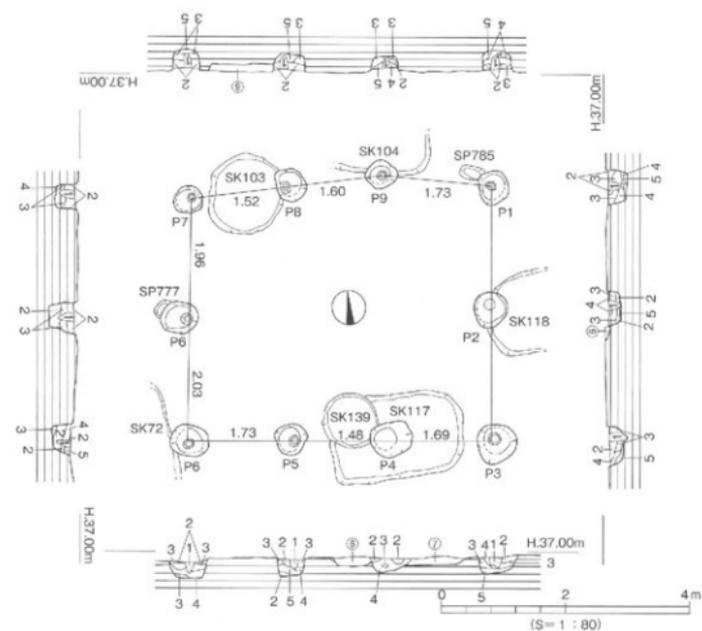
第55図 弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構配置図

1) 掘立柱建物址

掘立柱建物7 (第56・57区)

H・I～7・8区に位置し、SK72・103・104・117 (弥生時代前期末～中期初頭)・118 (時期不明)、SP777・785 (時期不明) を切っている。東西棟で、建物方位をN-3°-Eにとる。規模は桁行長3間 (4.90m)、梁行長2間 (3.99m)、底面積19.55㎡で、柱間寸法は桁間が1.73・1.48・1.69m、梁間が1.96・2.03mである。

柱穴の平面形態は円形で、径0.6m、深さ0.4mを測る。各柱穴には、径0.15mの柱の痕跡が残っており、いずれからも礎石・根石・栗石・礎板は検出されていない。掘り方裡土は、黒色土、黒褐色土、暗褐色土が交互にはいる。



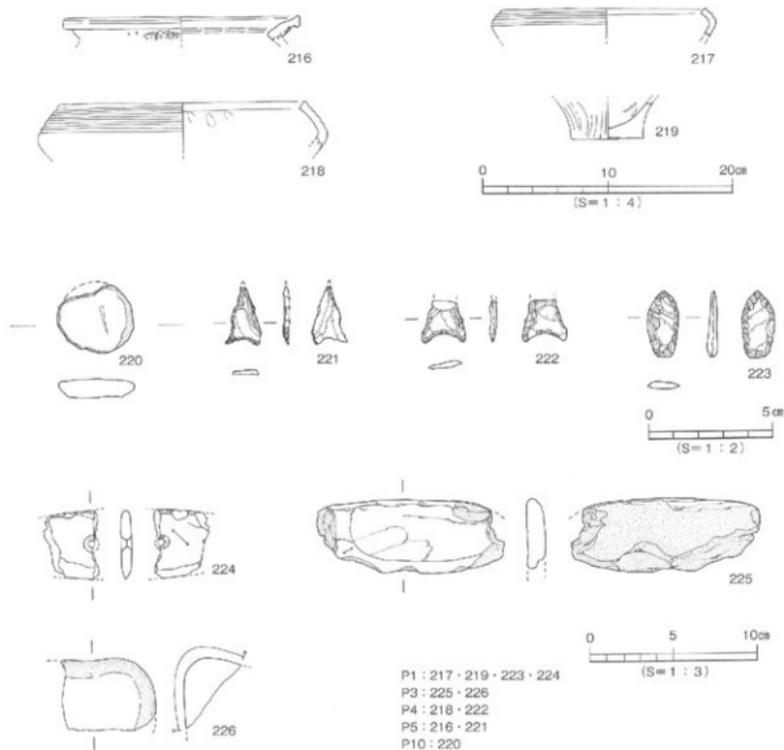
1. 暗褐色土 (柱直)
2. 黒褐色土 (φ0.5~1 cm大の地山粒混入)
3. 暗褐色土 (φ1 cm大の地山粒多量に混入)
4. 黒色土 (2より地山粒少ない)
5. 明褐色土+暗褐色土 (φ2~3 cm大の地山粒多量に混入)
- ⑥. 暗褐色粘質土 (SK139・SK118・SK103 埋土)
- ⑦. 極暗褐色粘質土 (SK117 埋土)

第56図 掘立柱7測量図

掘立柱建物7の柱穴埋土は、明褐色土が調査区内の掘立柱建物1や3と比べて少ない。

遺物は、各柱穴とも小破片が出土したが、柱穴掘り方か、柱痕跡からは判断できない。実測可能な遺物は216～226である。P1からは、217の高坏形土器口縁部、219の底部、223の打製石鏃、224の石庖丁が出土した。P3からは225の石庖丁未製品と226の磨石破片が、P4からは218の高坏形土器口縁部と打製石鏃(222)が、P5からは216の甕形土器口縁部と打製石鏃(221)が各柱穴で出土している。このうち216～219は、弥生時代中期後葉の土器である。

時期：掘立柱建物7が切っている土坑5基と柱穴2基は、弥生時代前期末～中期初頭の時期の遺構である。掘立柱建物址の柱穴から出土した土器は弥生時代中期後葉に限られることから、掘立柱建物7の上限を弥生時代中期後葉とする。



第57図 掘立7出土遺物実測図

## 2) 土 坑

この時期の土坑は4基であり、長方形が3基、円形が1基である。

## SK128 (第58図)

C6区に位置し、SP1160(時期不明)に切られ、SK129(弥生時代中期前葉)・145(弥生時代中期前葉～中葉)を切る。平面形態は不整形な方形で、規模は長軸2.10m、短軸1.60m、深さ0.13mを測る。断面形態は皿状で、西から東に0.1m程立ち上がる。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は227～230で、高環形土器、底部片、打製石鏃、石砲丁がそれぞれ1点出土した。

時期：出土した遺物から、弥生時代中期後葉とする。

## SK121 (第59図)

E7区に位置し、SP1043・1044・1045・1053・1055(時期不明)を切る。平面形態は不整形な楕円形で、規模は長軸1.45m、短軸1.25m、深さ0.09mを測る。断面形態は皿状、埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は、壺形土器の頸部(231)が出土した。

時期：出土した遺物から、弥生時代中期後葉～後期初頭とする。

## SK8 (第59図)

D10区に位置し、SK13(時期不明)に切られる。平面形態は不整形な長方形で、規模は長軸1.34m、短軸0.59m、深さ0.05mを測る。断面形態はレンズ状、埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は、高環形土器の坏部(232)が出土した。

時期：出土した遺物から、弥生時代後期初頭とする。

## SK73 (第55図)

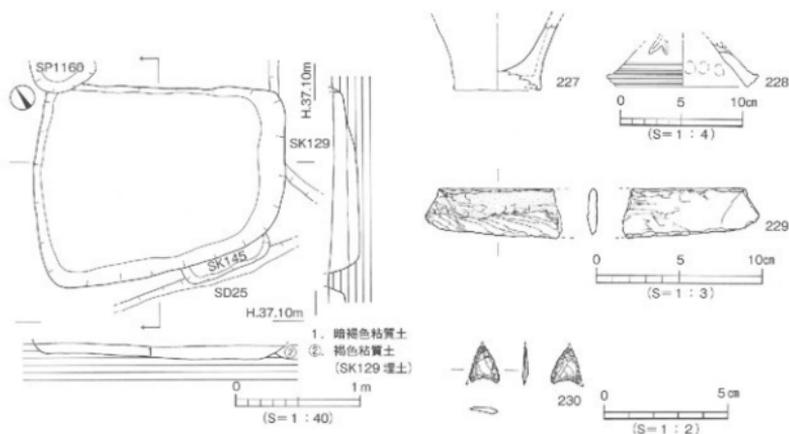
E～F13区に位置し、SK7(古墳時代)・SD15(古墳時代)に切られる。平面形態は不整形な楕円形で、規模は長軸2.40m、短軸1.59m、深さ0.05mを測る。断面形態は皿状、埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は出土していない。

時期：遺構の切り合い関係から、弥生時代中期後葉とする。

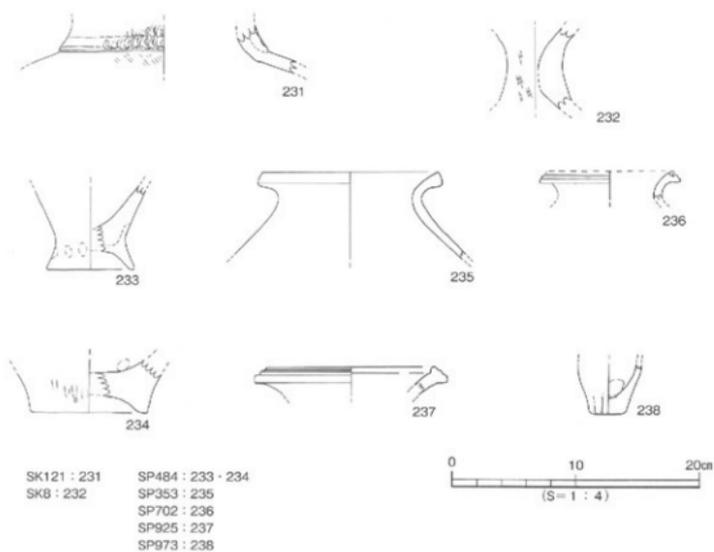
## 3) 柱穴・小穴(第59・82図)

この時期の遺物が出土した柱穴・小穴は5基ある。

233は壺形土器の底部、234は壺形土器の底部で、SP484出土品。なお、第82図330の石器は、SP484出土品で、砥石になる。235は壺形土器の口縁部で、SP353出土品。236は壺形土器の口縁部で、SP702出土品。237は壺形土器の口縁部で、SP925出土品。238はミニチュア土器の底部で、SP973出土品。



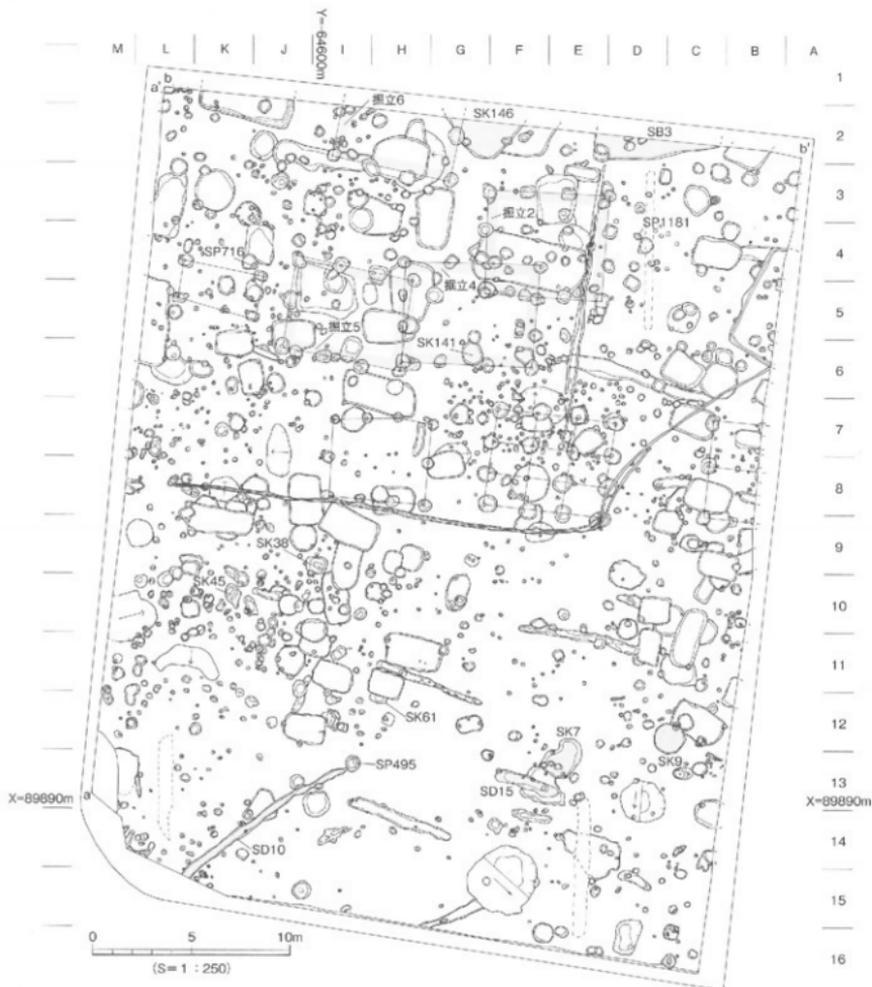
第58図 SK128測量図・出土遺物実測図



第59図 SK・SP出土遺物実測図

### 3. 古墳時代～古代の遺構と遺物 (第60図)

この時代の遺構には、竪穴式住居址1棟、掘立柱建物4棟、土坑7基、溝3条、柱穴3基がある。



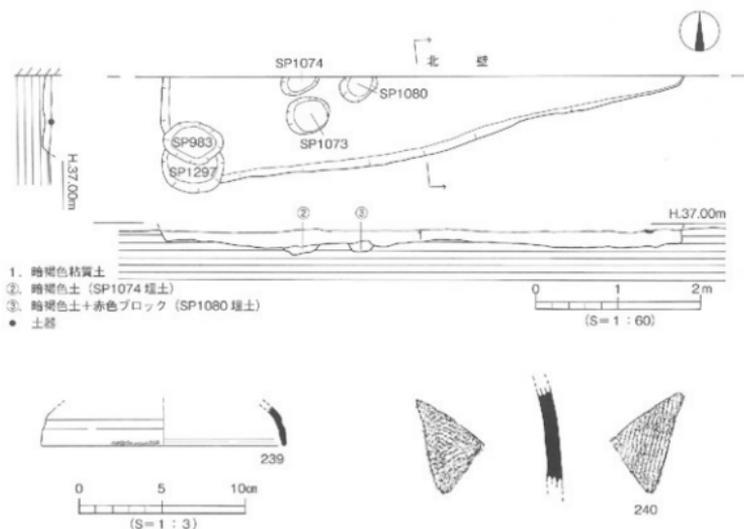
第60図 古墳時代～古代の遺構配置図

## (1) 竪穴式住居址

## SB3 (第61図)

C・D2区に位置し、SP983・1297(時期不明)に切られ、SP1073・1074・1080を切る。住居址の殆どが調査区外にある。IV層上面での検出で、II層がわずかに覆う。平面形態は方形もしくは長方形で、規模は南辺6.2m、壁高0.1mを測る。周壁溝と柱穴は確認できなかった。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は須恵器が2点出土した。239は坏蓋で、240は胴部である。

時期：出土した須恵器の特徴から、6世紀後半とする。



第61図 SB3測量図・出土遺物実測図

## (2) 掘立柱建物址

## 掘立柱建物2 (第62図、図版6・8)

E、F 4～6に位置する総柱の建物址である。掘立柱建物4 (古墳時代～古代)、S P 1296 (中世)に切られ、S K 122・124 (弥生時代)を切る。東西棟で、建物方位をN-2°-Eにとる。規模は桁行3間 (5.92m)、梁行3間 (5.29m)、床面積31.31㎡である。柱間寸法は、桁間が2.03・2.01・1.88m、梁間が1.88・1.59・1.82mとなる。

柱穴の平面形態は方形と円形とがある。規模は、方形が一辺0.5m、円形は径0.3～0.5m、深さは0.3～0.5mを測る。掘り方の断面形態は逆台形状である。根石はP 16のみで検出された。

出土遺物は、各柱穴に土器の小破片があり、実測可能な遺物は241～244の4点である。241はP 7出土で、須恵器の壺または甕の胴部片である。242はP 11出土の須恵器の坏身片で、時期は6世紀末～7世紀前半に比定される。243はP 7出土の甕形土器の口縁部で、弥生時代中期後半になる。244はP 6出土の壺形土器の口縁部である。

時期：柱穴出土の須恵器片から上限は6世紀末～7世紀前半となり、下限は掘立柱建物4が建てられる(時期は不特定)までとなる。

## 掘立柱建物4 (第63図)

F、G、H 4～6に位置する隅柱の建物址である。西側では掘立柱建物5の柱穴(P 1・2・3)を、東側では掘立柱建物2と切り合い、掘立柱建物2の柱穴(P 8)を切る。したがって、掘立柱建物4は掘立柱建物2・5に後出する建物になる。このほかに、掘立柱建物4はS K 115・116・122(弥生時代)・S P 787・846・924(時期不明)を切っている。建物は東西棟で、建物方位はN-3°-Eになる。規模は桁行3間 (6.65m)、梁行3間 (5.04m)、床面積33.51㎡である。柱間寸法は、桁間が1.94・2.35・2.36m、梁間が1.61・1.65・1.78mとなる。

柱穴の平面形態は円形が8基で、方形が4基ある。規模は径0.4～0.8m、深さは0.1～0.2mを測る。掘り方の断面形態は筒状であった。柱穴には、柱痕跡が残り、直径は0.1mであった。根石は柱穴P 1・8・9・12の底面で検出した。架石はない。埋土の堆積状況からは、掘り方埋土は、黒褐色土、暗褐色土、褐灰色土が交互にある。掘り方内を埋める工程とその単位が確認できた。

出土遺物は、各柱穴に土器の小破片があり、実測可能な遺物は245・246の2点である。245はP 10から出土した弥生時代の甕形土器である。246はP 12から出土した台石で、根石に転用されている。また、小片で図化は不可能だが、須恵器の胴部片(壺か甕)も出土している。

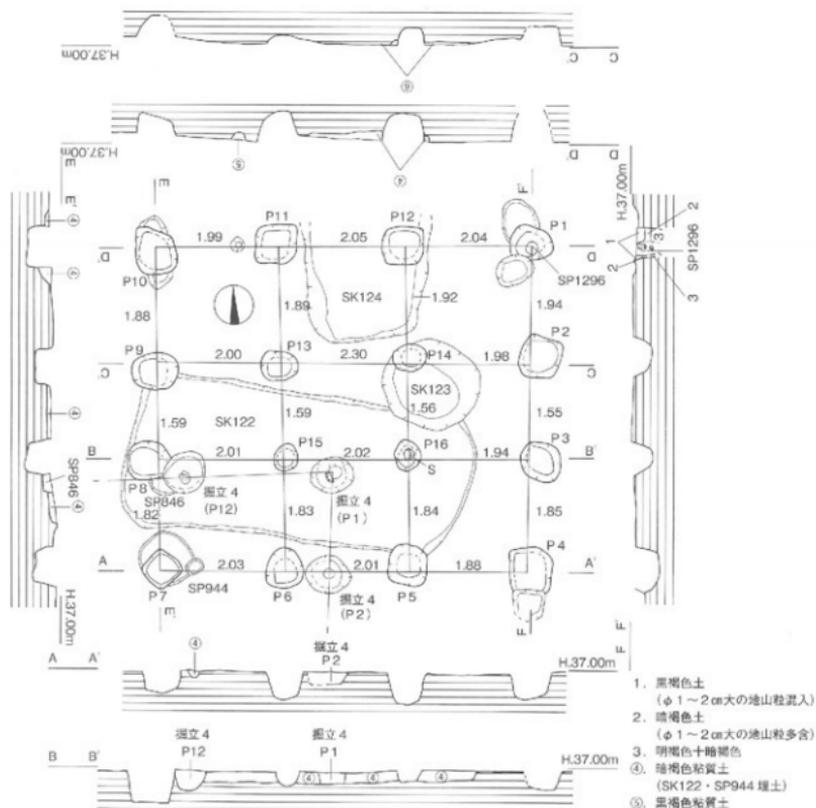
時期：掘立柱建物4の上限は掘立柱建物2・5の廃棄された後となり、6世紀末～7世紀前半になる。下限は不明。

## 掘立柱建物5 (第64図)

H・I・J 4・5・6区に位置する隅柱の建物址である。掘立柱建物4に切られ、S K 102・106・115・116 (弥生時代)を切る。建物は東西棟で、建物方位はN-9°-Eとなる。規模は桁行3間 (6.19m)、梁行2間 (4.69m)、床面積29.03㎡である。柱間寸法は、桁間が2.25・1.76・2.18m、梁間が2.49・2.20mであった。

柱穴の平面形態は方形や楕円形で、直径0.6m、深さ0.4～0.8mを測る。掘り方の断面形態は逆台形

遺構と遺物



1. 黒褐色土  
( $\phi$  1~2cm 大地山粒混入)
2. 暗褐色土  
( $\phi$  1~2cm 大地山粒多含)
3. 明褐色+暗褐色
- ④. 暗褐色粘質土  
(SK122・SP944 埋土)
- ⑤. 黒褐色粘質土



P7 : 241・243  
P6 : 244  
P11 : 242

241



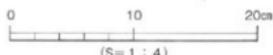
243



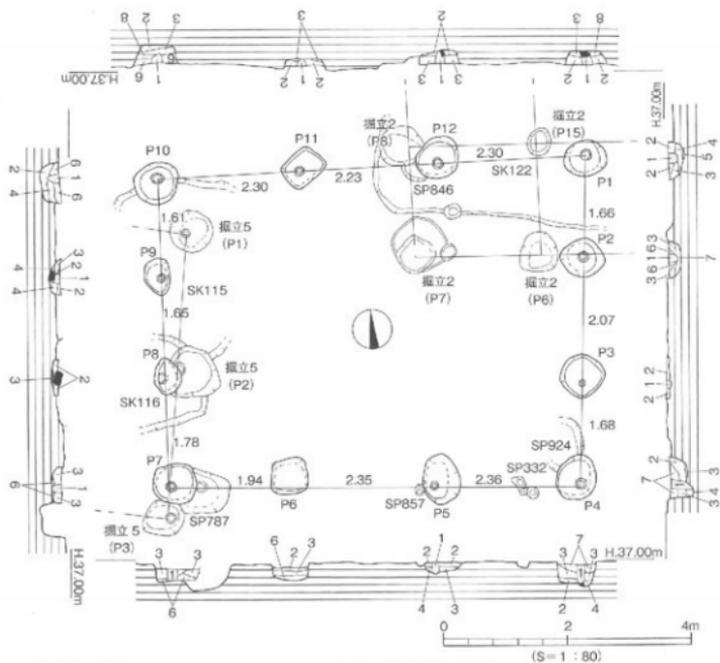
244



242



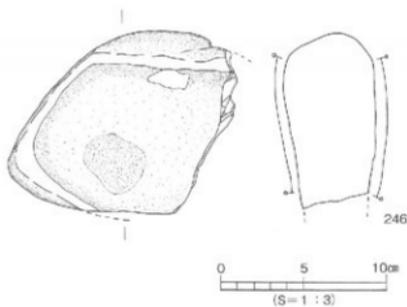
第62図 掘立2測量図・出土遺物実測図



1. 黒褐色土 (柱痕)
2. 黒褐色土 (φ0.5~1.0cm大の地山粒混入)
3. 暗褐色土 (φ1.0cm大の地山粒多含)
4. 褐色土+暗褐色土 (φ1.0cm大の地山粒多含)
5. 褐灰色土 (4より地立粒多含)
6. 黒褐色土 (4より地山粒多含)
7. 黒褐色土+褐色土 (φ1mm大の地山粒多含)
8. 褐灰色土



P10 : 245  
P12 : 246

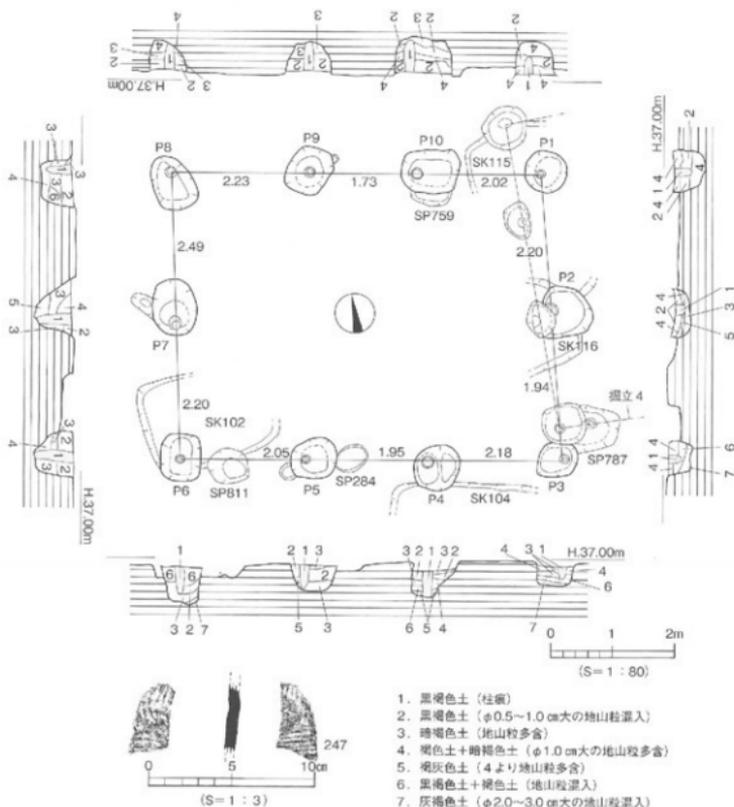


第63図 掘立4測量図・出土遺物実測図

状であるが、P4は一段浅くなる箇所をもつ。柱穴には、柱痕跡が残っており、直径は0.15mを測る。掘り方埋土は、黒褐色土、暗褐色土、灰褐色が交互にある。埋土の堆積状況からは、柱をすえて掘り方内を埋める工程とその単位が確認できた。礎石・根石・栗石・礎板は検出されていない。

出土遺物は、各柱穴に土器の小破片があり、実測可能な遺物は1点である。247は、P4から出土した須恵器の胴部片である。

時期：掘立柱建物址の上限は出土した須恵器片から6世紀以降になり、下限は掘立柱建物4が建てられるまで（6世紀末～7世紀前半）となる。



第64図 掘立柱5測量図・出土遺物実測図

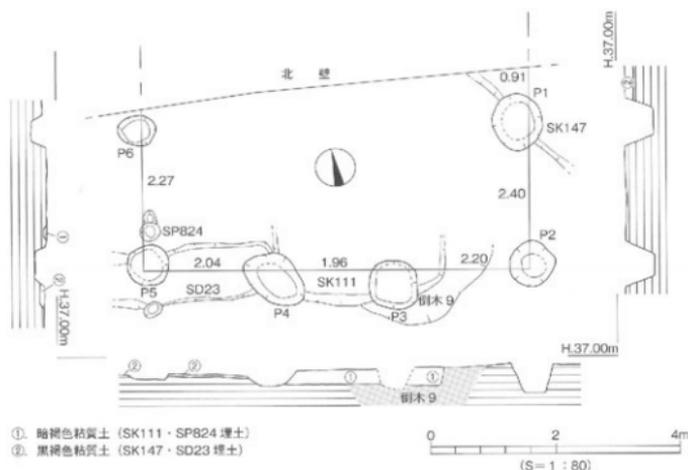
## 掘立柱建物6 (第65・83図)

I・G・H～2・3区に位置する掘立柱の建物址である。遺構は調査区外につづき、S D23・SK111 (弥生時代)・146 (古墳時代)・倒木痕 (時期不明) を切っている。建物は東西棟で、建物方位はN-9°-Eとなる。検出規模は、桁行1間以上 (2.63m以上)、梁行3間 (6.20m)、床面積は16.30㎡以上である。柱間寸法は、桁間が2.04・1.96・2.20m、梁間が2.27・0.36m以上となる。

柱穴の平面形態は方形・円形・楕円形で、直径0.6～0.8m、深さ0.1～0.5mである。掘り方の断面形態は逆台形であった。礎石・根石・栗石・礎板は検出されていない。

出土遺物は、各柱穴から土器と石器の小破片がある。第83図334は用途不明石器である。

時期：掘立柱建物6は、5世紀末～6世紀初頭のSK146を切ることから、上限は6世紀初頭以降である。下限は判断できる資料がない。



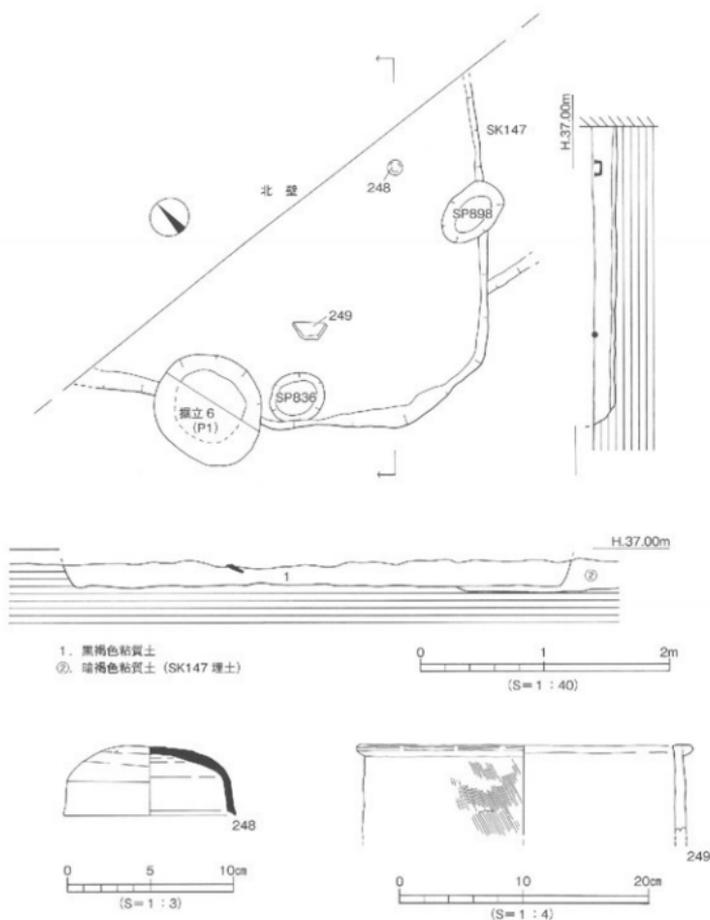
第65図 掘立柱6測量図

## (3) 土坑

この時期の上坑は7基 (SK7・9・38・45・61・141・146) で、長方形は3基、円形は4基である。SK146 (第66図)

F・G2区に位置し、調査区外につづく。掘立柱建物6 (古墳時代～古代)・SP898 (時期不明) に切られ、SP836 (時期不明)・SK147 (弥生時代) を切る。平面形態は、方形又は長方形と考えられる。規模は長軸3.34m、深さ0.2mを測る。断面形態は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色の粘質土単層である。遺物は248・249で、埋土上位から、須恵器の坏蓋が1点と弥生時代の甕形土器1点が出土した。

時期：出土した須恵器から、古墳時代後期、5世紀末～6世紀初頭とする。



第66図 S K 146測量図・出土遺物実測図

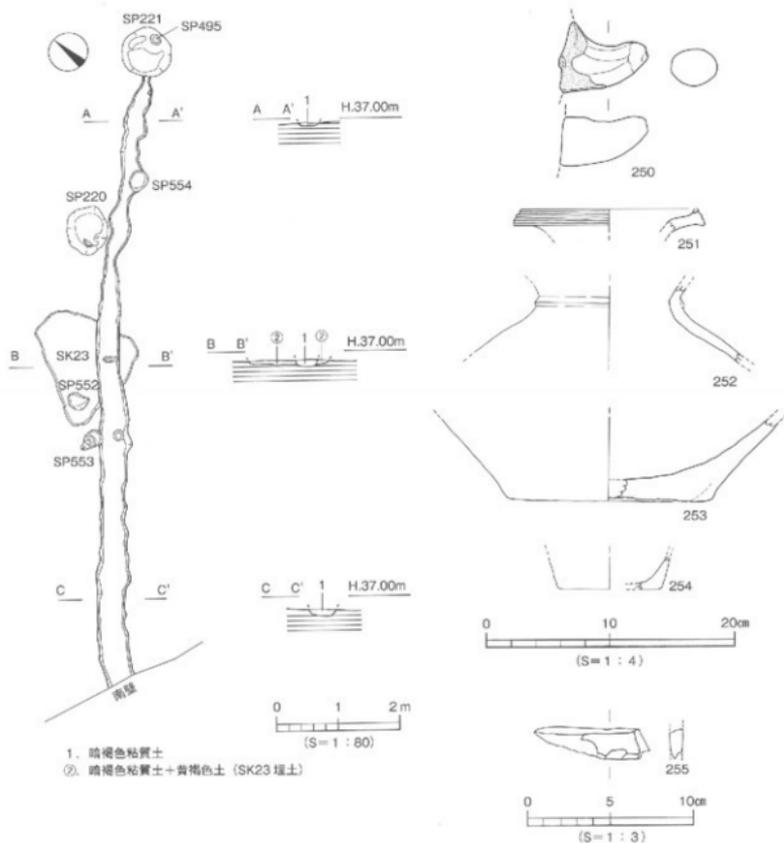
## (4) 溝

溝は3条検出した。SD4・10・15である。

## SD10 (第67図)

I13～L15区に位置する東西方向の直線溝である。SP353 (弥生時代)・221・495・554 (時期不明) に切れ、SK23 (弥生時代) を切る。規模は長さ9.86m、幅0.42m、深さ0.1mを測る。断面形態は皿状で、埋土は暗褐色の粘質土である。底面はほぼ平坦である。遺物は250～255で、底面から甗の把手 (250)、弥生土器 (251～254)、石器 (255) が出土した。

時期：出土した甗の把手から古墳時代中期、5世紀以降の遺構になる。

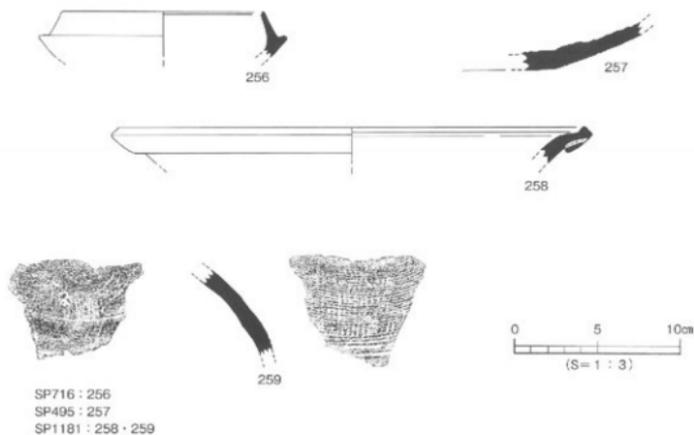


第67図 SD10測量図・出土遺物実測図

## (5) 柱 穴 (第68図)

この時期の遺物が出土した柱穴・小穴は3基である。

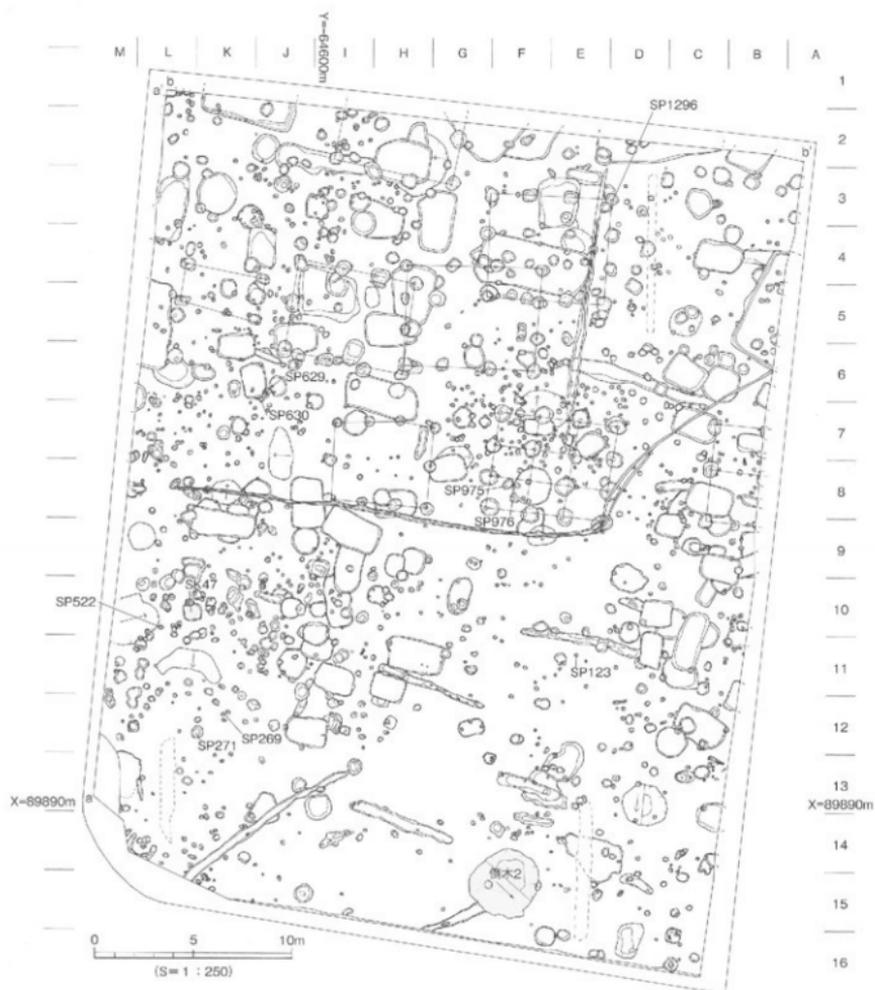
256は坏身で、S P 716出土物である（6世紀中葉）。257は甕、又は壺の胴部で、S P 495出土物（6世紀後半以降）。258・259はS P 1181の出土物である。258は甕の口縁部で、6世紀末以降。259は甕、又は壺の肩部片で、5世紀末～6世紀前半。



第68図 S P出土遺物実測図

#### 4. 中世の遺構と遺物 (第69図)

中世の遺構は、柱穴1基 (SP1296)、土坑1基 (SK47)、倒木1基 (倒木2) である。



第69図 中世の遺構配置図

## (1) 柱 穴

## SP1296 (第70・71図、図版8・15・16)

D3区に位置する小穴で、掘立柱建物2の柱穴(P1)を切る。湧水のために完掘ができなかった。したがって、深さと出土状況の一部は、記録できていない。平面形態は円形で、規模は径0.2mである。埋土は灰褐色の粘質土単層である。

出土物は同一埋土中から土器と石が交互に出土した。検出状況は、取り上げ順に上から1回目には長さ15cmの礫(260)、2・3回目には瓦質の碗と6cm大の河原石(261・262)、4回目には焼成をうけている15cm大の礫(263~269)、5回目には土師器の坏や瓦質の碗(270~274)が出土した。6回目には長さ10cm大の棒状の河原石(275~287)が多数見つかった。棒状の河原石は、長軸を横にして検出された。なお、未掘のため、6回目以下の遺物の有無は不明である。遺物の出土状況から、これらの遺物は人為的に埋められた可能性をもつ。調査区内では、同様な遺物の出土状況を示した小穴はなく、SP1296の付近には、同じ埋土をもつ掘立柱建物がない。したがって、小穴は単独で存在していたものとみられ、その性格は祭祀遺構を考えている。273は円盤高台の皿で、内面を削り出している。他に來住台地上で出土の円盤高台は、來住廃寺15次調査地で坏が2点出土している。

時期：出土した遺物から13世紀後半とする。

## (2) 土 坑

## SK47 (第69図)

K、L10区に位置し、SP513(時期不明)に切られる。平面形態は方形で、規模は長軸0.95m、短軸0.85m、深さ0.19mを測る。断面形態は舟底状である。埋土は黒褐色の粘質土単層である。遺物は中世土師器の小片が出土している。

時期：出土品から中世とするが、それ以上の時期特定はできない。

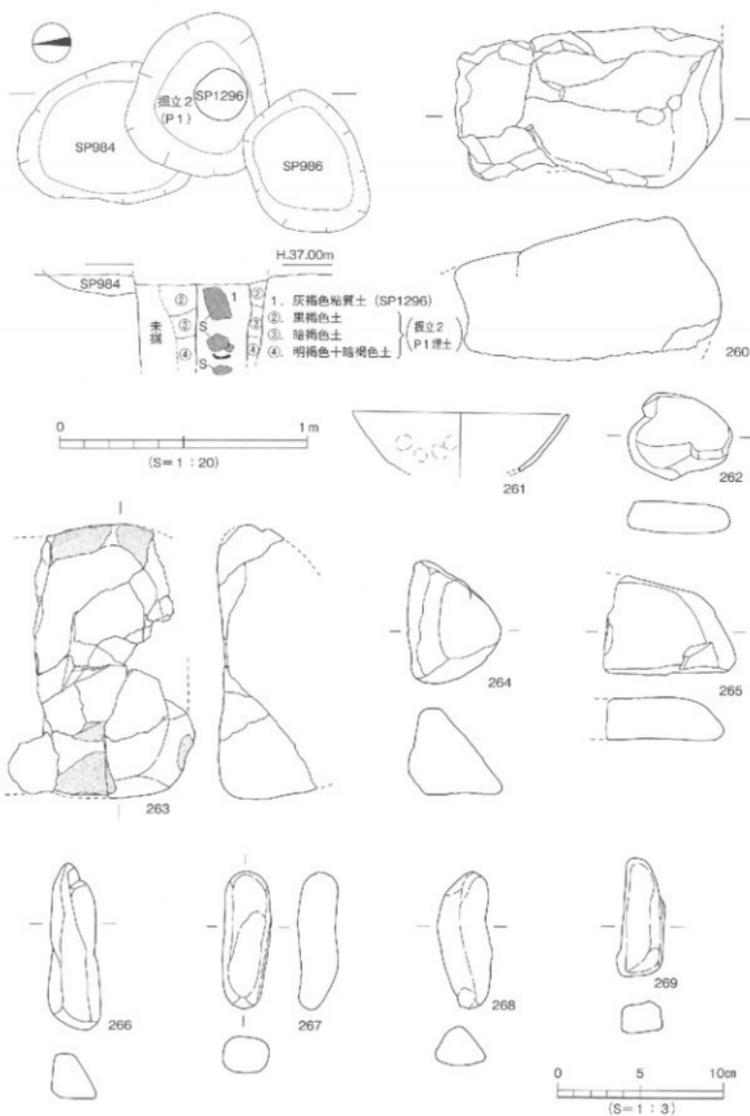
## (3) 倒 木

調査区内では、倒木痕は11基検出されたが、遺物を伴うものは倒木2の1基に限られる。

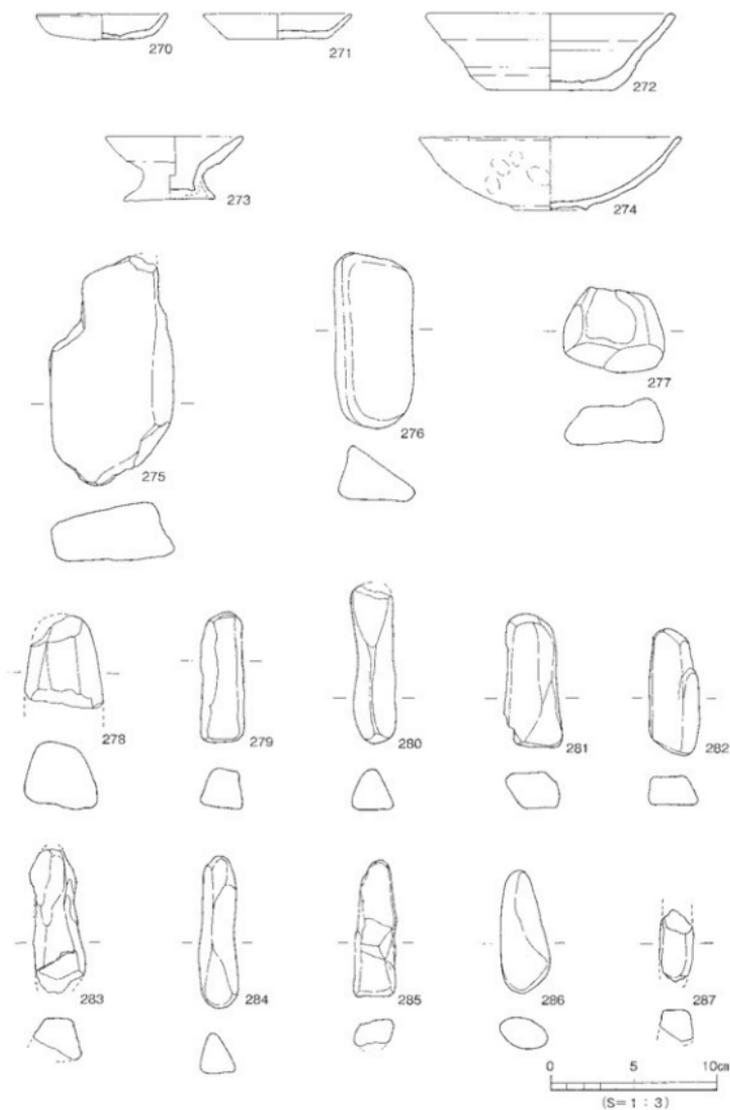
## 倒木2 (第72図)

F、G14・15区に位置する倒木痕で、SD3、SP533(時期不明)を切る。2~7層は「根の周辺の地山層が木が倒れる時に根に絡んだ状態で垂直に倒立した層(半球形)」にあたる。今回検出の倒木痕の場合は「地山層」だけでなく、「倒木以前に既存していた遺構」も含まれていた。遺構が検出された層は、1層と6層である。1層は「流入層」にあたり、この層からは288~292の土器が出土した。288~290は中世の土師皿、291は8世紀前半の須恵器の坏蓋、292は古墳時代の土師器の甕形土器口縁部である。

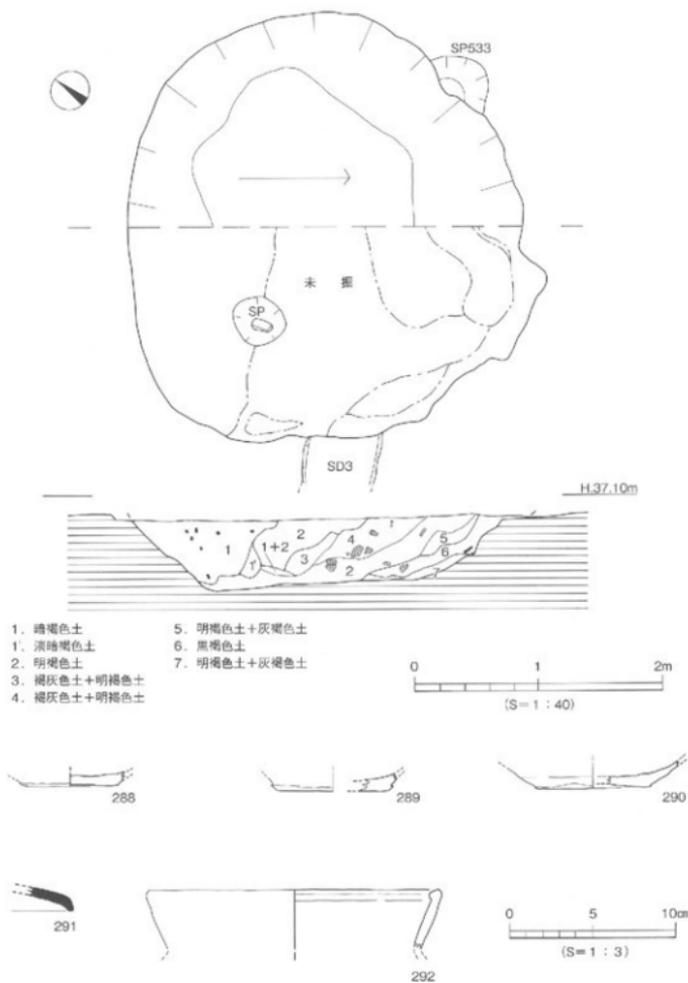
時期：出土遺物から、中世以降の倒木痕になる。



第70図 SP1296測量図・出土遺物実測図(1)



第71図 SP1296出土遺物実測図(2)



第72図 倒木2測量図・出土遺物実測図

## (4) 中世の遺物 (第73図)

293はSK39に混入していた遺物とみられ、土師質三足羽釜の口縁部になる。時期は13世紀後半とする。294はSK122に混入していた遺物とみられ、瓦質碗の口縁部になる。時期は13世紀後半とする。



第73図 SK出土遺物実測図

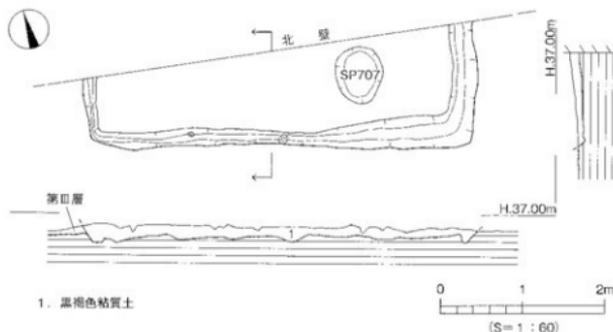


## (1) 竪穴式住居址

## SB1 (第75図)

J、K2区に位置し第Ⅲ層を切り、第Ⅱ層が覆い、SP707(時期不明)を切る。平面形態は方形で、規模は南辺4.60mで、壁高0.1~0.15mである。遺構の殆どが調査区外に位置し、南部の検出に限られた。遺構は大きく削平され、貼床と周壁溝が遺存しているにすぎず、カマド・柱穴は検出していない。埋土は黒褐色の粘質土である。出土遺物はない。

時期：遺物が検出層からもなく、時期の特定ができない。

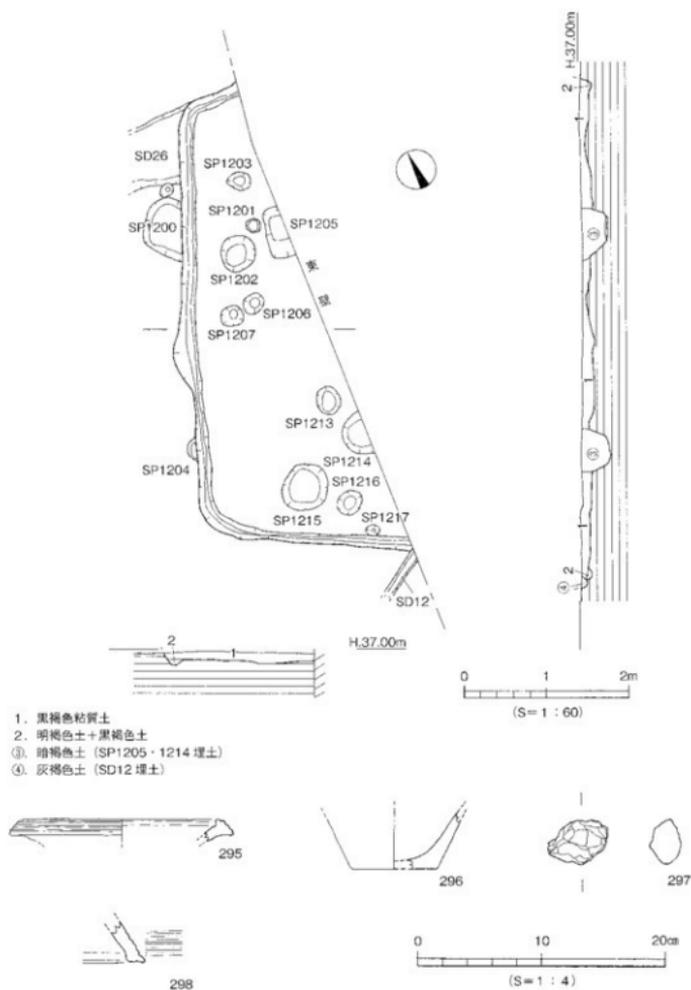


第75図 SB1測量図

## SB2 (第76図)

B4~6区に位置し、遺構の殆どが調査区外に位置し、西部の検出に限られた。SD12(現代)・SP1205・1214(時期不明)に切られ、SD26(弥生時代)、SP1200~1207、1213~1217(時期不明)を切る。平面形態は方形で、規模は西辺5.20mで、壁高0.14mである。遺構は削平され、貼床と周壁溝が残存し、カマド・柱穴は検出していない。埋土は黒褐色の粘質土である。出土物は295~298で、高坏形土器1点と壺形土器又は甕形土器の底部が1点と焼土塊が出土した。

時期：出土遺物は弥生時代中期後葉で、遺構の時期は、弥生時代中期後葉以降となる。



第76図 SB2測量図・出土遺物実測図

## (2) 掘立柱建物

## 掘立柱建物1 (第77・81図、図版7)

D7～G7・D8～G8区に位置する総柱建物址である。SD12(現代)に切られ、SK119・120・121(弥生時代)・143(時期不明)、SP869・885・1072・1249・1264・倒木痕(時期不明)を切る。東西棟で、建物方位はN-9°-Eとなる。規模は桁行3間(6.00m)、梁行3間(4.94m)、床面積29.64㎡である。柱間寸法は、桁間が2.02・2.00・1.98m、梁間が1.68・1.60・1.66mとなり、等間隔であった。

柱穴の平面形態は円形や楕円形で、径0.8m、深さ0.2～0.5mを測る。掘り方の断面形態は殆どが筒状ないし逆台形状であるが、段掘になっているもの(P3)もある。柱穴には、柱の痕跡が残っており、直径は0.1mであった。根石はP7で検出され、それ以外の柱穴にはない。また、礎石・栗石・礎板もない。掘り方埋土は、黒褐色土、地山の明褐色土、暗褐色土が交互に混じる。柱をすえて、掘り方内を埋める工程とその単位がはっきりと検出された。

なお、柱穴16基のうちP1とP12では柱穴の重複を確認している。

遺物は、各柱穴から土器の碎片と石器が出土した。実測可能な遺物は299～301・323でP5・P9・P10・P16に各1点ある。299はP9から出土した壺形土器の口縁部で、弥生時代中期初頭になる。300はP10から出土した複合口縁壺の口縁部分で、弥生時代後期になる。299・300とも柱穴の掘り方からか、柱の痕跡からの出土状況は判断できていない。301はP5の掘り方埋土から出土した石器で、破損した台石になる。第81図323はP16の掘り方埋土から出土した石器で、挟り入りの方柱状片刃石器になる。

時期：掘立柱建物1の上限は弥生時代中期末～後期となり、下限は掘立柱建物1を切るSD12の時期(現代)となる。

## 掘立柱建物3 (第78図)

B7・8～C7・8区に位置し、総柱建物址と考えられる。遺構は調査区の東側ににつき、SK68・130・132・134(弥生時代)、SP1185(時期不明)を切る。東西棟で、建物方位はN-6°-Eとなる。

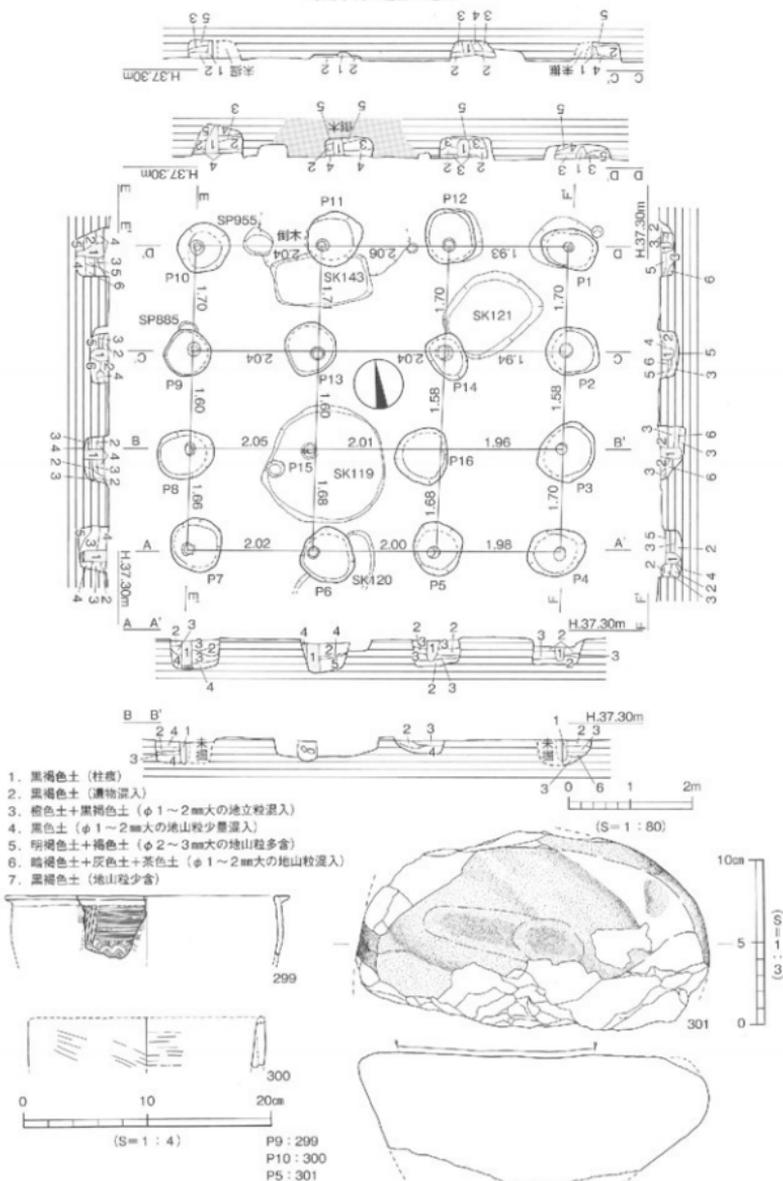
検出規模は、桁行1間以上(2.53m以上)、梁行2間(5.12m)、床面積12.95㎡以上である。柱間寸法は、桁間が2.53m、梁間が2.41・2.71mを測る。

柱穴の平面形態は方形で、規模は一辺0.9m、深さ0.5mを測る。断面形態は筒状ないし逆台形状である。柱穴には、柱の痕跡が残っており、直径は0.1mである。埋土は、黒褐色土と暗褐色土とが交互にあり、掘り方内を埋める工程とその単位が確認できた。

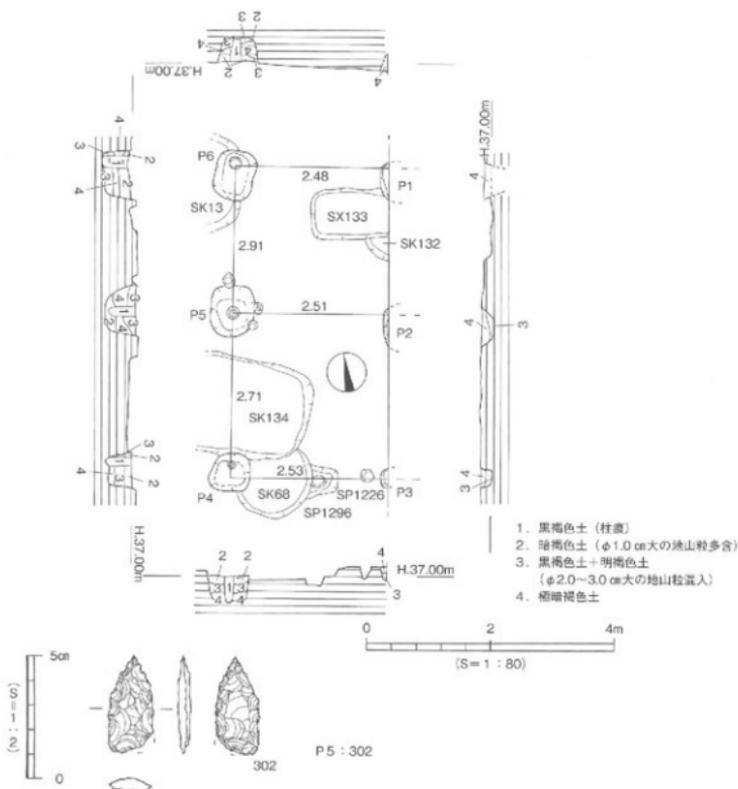
出土遺物は、各柱穴に土器の碎片が出土し、実測可能な遺物は1点である。302はP5から出土した打製石鏃である。

時期：切り合い関係から、掘立柱建物3の上限は弥生時代前期末～中期初頭となるが、掘立柱建物3を切っている遺構がない為、下限については判断できない。

時期不明の遺構と遺物



第77図 掘立1測量図・出土遺物実測図



第78図 掘立3測量図・出土遺物実測図

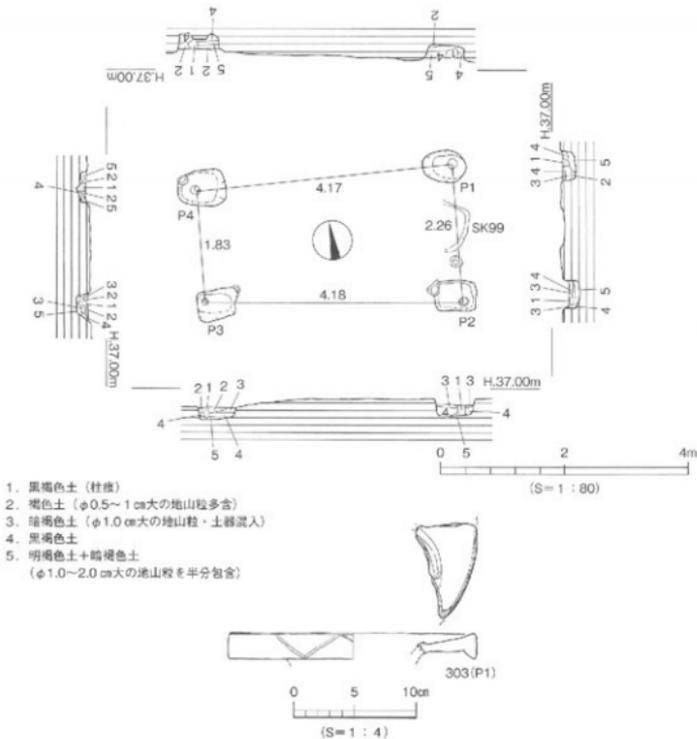
## 掘立柱建物8 (第79図)

J・K・L～4・5区に位置する掘立柱建物址である。東西棟で、建物方位はN-10°-Eとなる。規模は桁行1間(4.18m)、梁行1間(1.83m)、床面積は7.65㎡である。

柱穴の平面形態は方形と楕円形で、規模は長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.2mを測る。掘り方の断面形態は筒状である。柱穴には、柱の痕跡が残っており、直径は0.1mである。掘り方埋土は、黒褐色土、地山の明褐色土、暗褐色土、褐色土が交互にあり、掘り方内を埋める工程とその単位を確認することができた。礎石・根石・栗石・礎板は検出されていない。

出土遺物は、各柱穴からは土器の小片が出し、実測可能な遺物は1点であった。303はP1から出土した壺形土器の口縁部で、弥生時代中期中葉頃になる。

時期：出土遺物より、掘立柱建物8の上限は弥生時代中期中葉になるが、掘立柱建物8を切っている遺構がない為、下限については判断できない。



第79図 掘立8測量図・出土遺物実測図

### (3) 土坑出土遺物 (第80図)

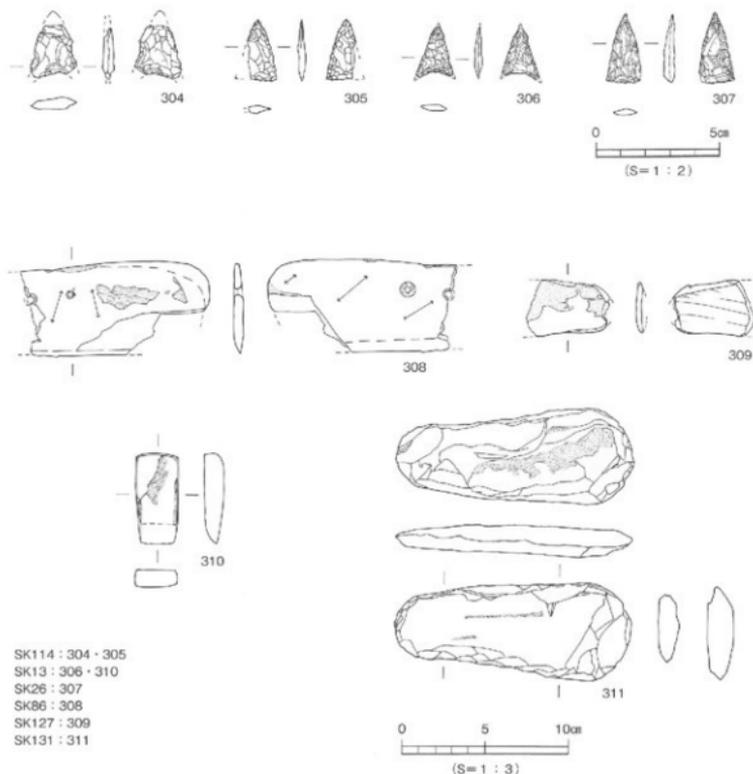
時期不明な土坑のうち、遺物の出土した土坑は22基ある。

304・305は打製石鏃で、S K114出土品。306・310はS K13出土品。306は打製石鏃、310は扁平片刃石斧である。307は打製石鏃で、S K26出土品。308は石庵丁で、S K86出土品。309は石庵丁で、S K127出土品。311は石庵丁の素材で、S K131出土品。

### (4) 柱穴・小穴出土遺物 (第81~83図、図版14・15)

時期を特定できない柱穴・小穴のうち、遺物の出土した遺構は22基ある。

312は打製石鏃で、S P522出土品である。313は打製石鏃で、S P976出土品。314は打製石鏃で、S P629出土品。315は石鏃の未製品で、S P271出土品。316は石鏃もしくはスクレイパーで、S P976出土品。

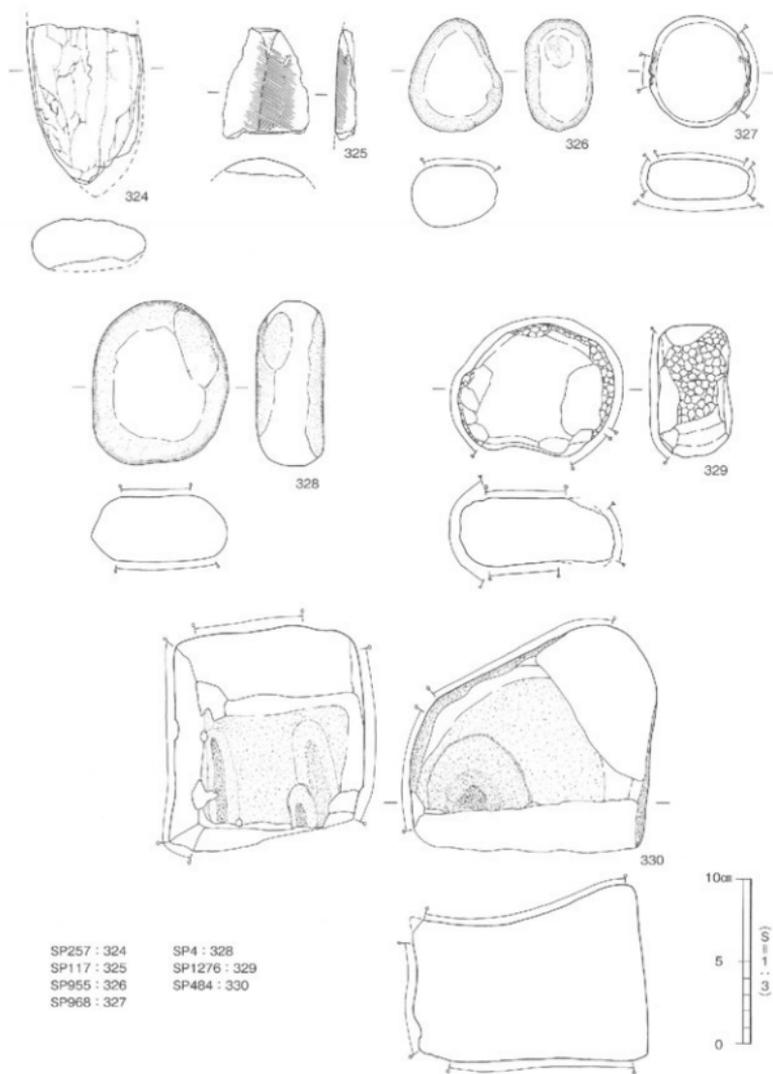


第80図 SK出土遺物実測図

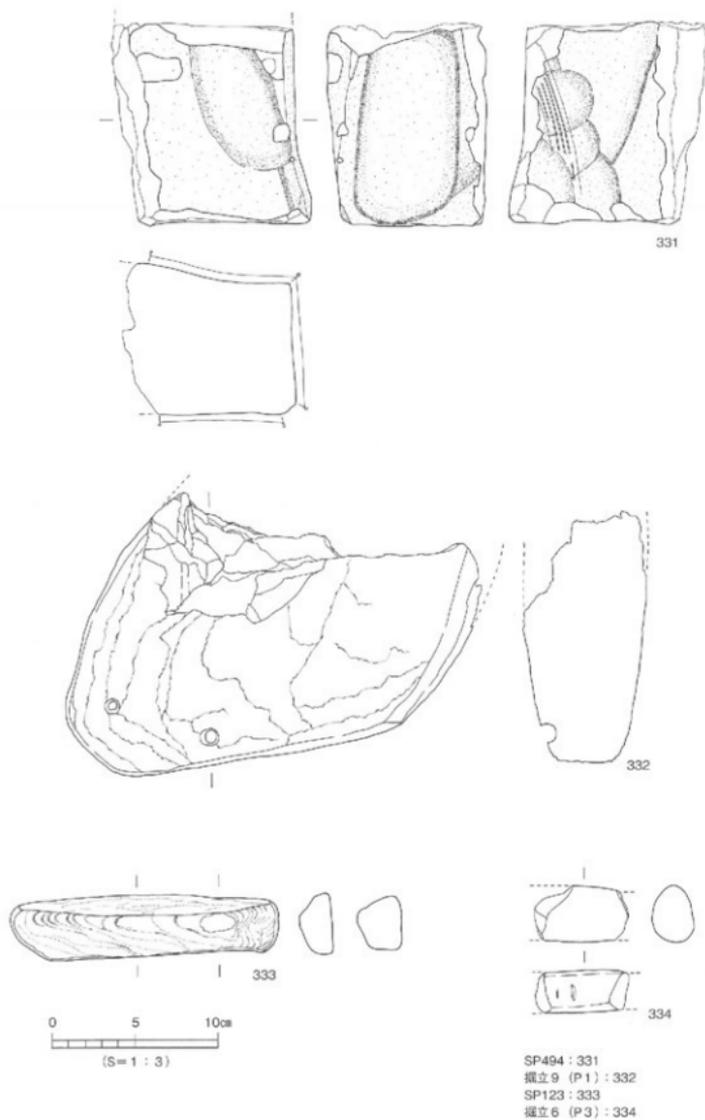
317はスクレイパーで、S P 269出土品。318は石庖丁で、S P 630出土品。319・320はS P 975出土品。319は扁平片刃石斧、320は粗製剥片石器である。321は扁平片刃石斧で、S P 624出土品。322は伐採斧（柱状片刃石斧）で、S P 15出土品。324は伐採斧（太型蛤刃石斧）で、S P 257出土品。325は伐採斧（太型蛤刃石斧）でS P 117出土品。326は磨石で、S P 955出土品。327は磨石・擦石で、S P 968出土品。328は磨石で、S P 4出土品。329は擦石で、S P 1276出土品。331は砥石で、S P 494出土品。332は掘立柱建物の根石に転用された結晶片岩の不明石製品で穿孔が2つある、掘立9（P 1）出土品。333は不明石製品で、S P 123出土品。



第81図 SP出土遺物実測図(1)



第82図 SP出土遺物実測図(2)



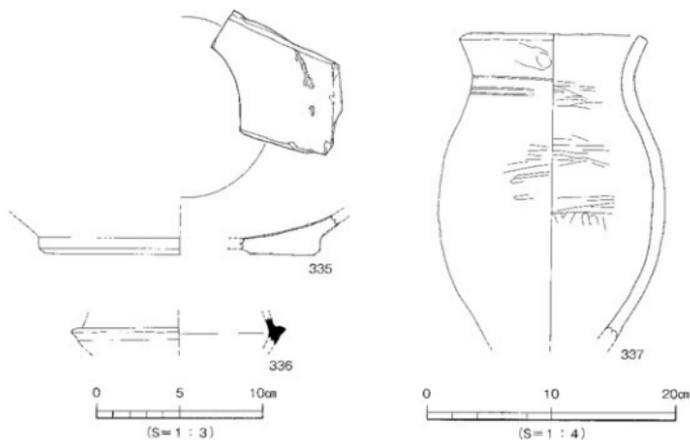
第83図 SP出土遺物実測図(3)

## 6. 表採遺物 (第84・85図、図版15)

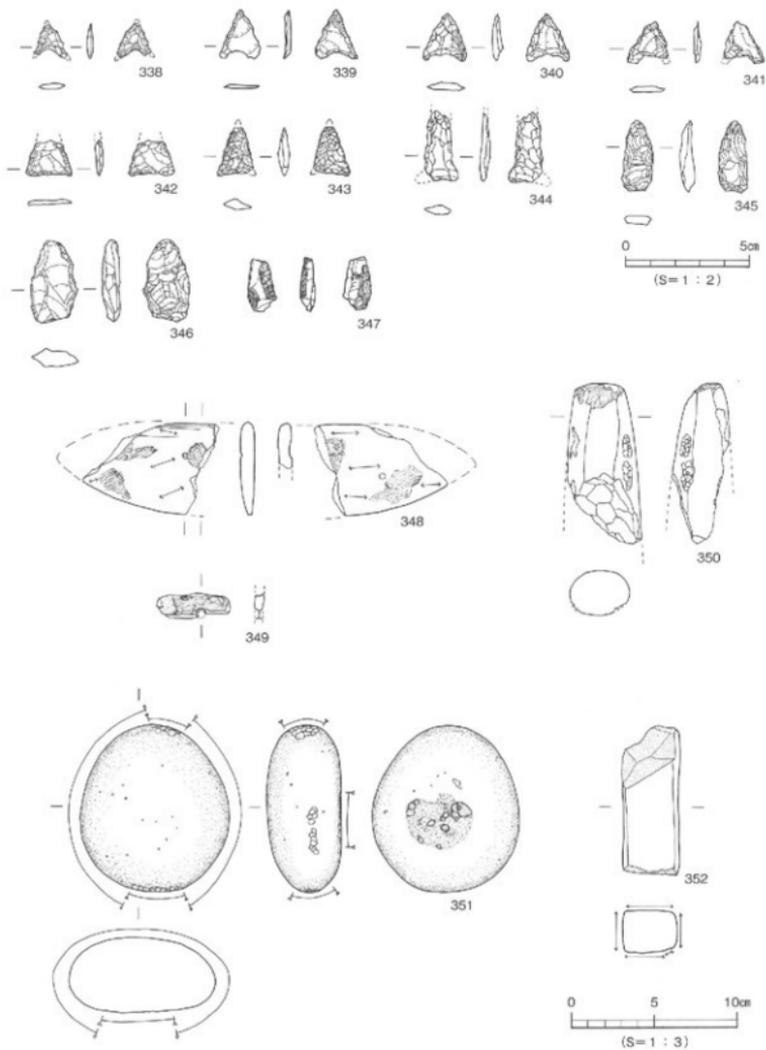
335～337は土器、338～352は石器である。

335は陶磁器の皿の底部である。内外面には施釉がある。336は須恵器の坏身で、6世紀末～7世紀前半。337は弥生土器の甕形土器で、弥生時代前期末～中期初頭。

338～346は打製石鏃、347は黒曜石の使用痕のある剥片。348・349は石庖丁で348は未製品、350は伐採斧(太型蛤刃石斧)、351は擦石・磨石になる。352は砥石。携帯用の手持ち砥石と考えられる。



第84図 表採遺物実測図(1)



第85図 表探遺物実測図(2)

## 第4章 小 結

久米高畑遺跡26次調査地では、弥生時代の集落遺構と、古代の官衙関連遺構の確認を主目的として調査を開始した。その結果、調査では縄文時代の墓、弥生時代前期末～中期初頭の土坑群と溝、中期中葉の土坑群と溝、中期後葉の掘立柱建物址、土坑群と溝、古墳時代の竪穴式住居址、古墳時代～古代の掘立柱建物群、中世の祭祀遺構を検出した。

また、古代の官衙関連遺構については、その可能性のある掘立柱建物址を確認するにいたった。

**縄文時代** 晩期前半の遺構が1基（SK21）ある。SK21からは、大型と小型の深鉢、浅鉢、台石が出土し、出土状況からは人為的に土器を置いていたことを確認した。したがって、遺構の性格は墓の可能性が高く、深鉢内に遺体を埋納していたと考えられる。ただし、伴出した土器の性格は明らかにすることができなかった。また、当該期の一括資料の出土は、松山平野では類例が少ないため、貴重な資料を得ることになった。

ところで、来住台地上の遺跡からは、近年、同時期とされる遺構が見つかっている。本調査地の15m南にある久米高畑遺跡35次調査地では、SK21と同規模の円形土坑1基が、南方130mの久米高畑遺跡36次調査地では直径3.6mの円形竪穴式住居址が1基検出されている。さらには、晩期後半の長方形土坑1基が26次調査地から東130mで確認されている。このように、本調査地周辺では130m四方の範囲で縄文時代晩期の遺構が検出されており、当平野でも数少ない縄文時代晩期の遺跡地帯になってきている。したがって、今後の調査でも、遺構や遺物が検出される可能性は高い。

**弥生時代** 土坑90基、掘立柱建物址1棟、溝7条、柱穴14基を検出した。

土坑は、平面形態で2種類に分類でき、長方形は45基、円形は45基ある。そのうち、弥生時代前期末から中期初頭の時期に比定できる土坑には、長方形37基、円形40基の計77基がある。これらは数基ごとに重複し、比較的短い期間で、幾度も作り直しがなされている。土坑からの遺物は少なく、かつ小片である場合が多い。ただし、下記にあげる遺構からは、多くの遺物が出土している。円形土坑のSK31・89・98・103・110・138は、断面形態が筒状や袋状となり、貯蔵穴の形態をもつ。遺物の出土状況から、廃棄したと考えられた。一方、SK17・40・137では、土坑内に遺物を置いた様子うかがえた。長方形土坑は、遺物の出土は少ないが、SK24・29・106では、遺物が据え置かれたままの状態でも出土している。

今回、弥生時代前期末～中期初頭の住居址と掘立柱建物址は全く検出されなかったが、土坑が数多く確認されており、同時期の住居址が周辺に存在していると思われる。

中期前葉になると5基の土坑（長方形3基、円形2基）、中期中葉には4基の土坑（長方形2基、円形2基）、中期中葉～後葉では3基の土坑（長方形）、中期後葉～後期では3基の土坑（長方形3基、円形1基）が構築されている。土坑の数は、中期前葉以降激減する。その一方で、規模は前期末～中期初頭の土坑（長方形）に比べると2～4倍の大きさを持つ土坑（SK122）も出現してくる。

掘立柱建物7は、弥生時代中期後半を上限とする。当平野の弥生時代中期後半の掘立柱建物址は、

床面積が20㎡代の建物がみられる。掘立柱建物7は一般的な面積を持つ建物といてよい。

また、調査地南側の久米高畑遺跡35次調査地では、中期後半の円形竪穴式住居址が2棟確認されており、竪穴式住居址2～3棟と掘立柱建物址1棟が集落の1単位を構成する可能性をもつ。

古墳時代～古代 竪穴式住居址1棟と掘立柱建物址4棟、溝3条、土坑6基、柱穴3基を検出した。

掘立柱建物2は総柱建物で、掘立柱建物4・5・6は隅柱建物となり、両者は床面積が30㎡前後の同規模建物になる。詳細な時期は出土遺物だけでは特定できなかったが、掘立柱建物2の上限は6世紀末～7世紀前半、下限は掘立柱建物4の構築までになる。掘立柱建物4は上限を6世紀末以降（掘立柱2・5の廃棄後）、掘立柱建物5は掘立柱建物4よりも古く、掘立柱建物6は上限を6世紀初頭以降にする。したがって、これらの掘立柱建物址は古墳時代～古代の遺構になると考えている。

掘立柱建物2付近では、時期が特定できない掘立柱建物址3棟を検出している。すべて東西棟の掘立柱建物址で、掘立柱建物1は総柱建物、掘立柱建物3・8は隅柱建物になる。また、掘立柱建物1・3は掘立柱2・4・5・6と同規模の建物になる。

建物は方位で、3つのグループに分けられ、①ほぼ真北のもの（掘立柱2・4）、②北から東に6°振るもの（掘立柱3）、③北から東に9°振るもの（掘立柱5・6）になる。また、グループ内での遺構の切り合い関係が存在する（掘立柱2と掘立柱4）。

建物は方位や規模等で分類できるが、調査地の北・東・西側の調査が行われていない現段階では、遺構配置からの時期推定と性格づけは保留しておく。

さて、本調査地は、7世紀代の道路と推定される場所から北に位置する。久米高畑遺跡32次調査地で検出された「正合院」以前の掘立柱建物址は道路の北側に位置し、ほぼ真北の総柱建物址であった。掘立柱建物2は方位と規模がこれらの遺構に類似する。したがって、掘立柱建物2は官衙関連遺構の可能性が高い。本調査地の北及び東側の調査がなされ、遺構の検出が進めば、今回の掘立柱建物もその性格が明確になるだろう。

中世 注目される小穴としてSP1269があげられる。

遺物の出土状況からは、人為的に土器や石を置いていたことが確認でき、祭祀的性格の強い遺構であることが明確になった。

以上、調査結果についてのまとめを行った。今後は既往の調査成果との比較や検討を重ね、来住台地上における縄文時代～中世の歴史的役割と集落構造を解明してゆきたい。

#### 【参考文献】

- 佐藤 真ほか 『紫雲出～香川県三豊郡詫間町紫雲出弥生式遺跡の研究』 1964  
 小田富土雄 『九州』 『弥生土器Ⅰ』 ニュー・サイエンス社 1983  
 金岡忠・佐原真編 『弥生土器Ⅰ』 『弥生文化の研究3』 1986  
 金岡忠・佐原真編 『遺具と技術Ⅰ』 『弥生文化の研究5』 1985  
 中野良一 『愛媛県における古代末から中世の土器様相』 『中近世土器の基礎研究Ⅳ』 1988  
 平井 謙 『考古学ライブラリー64 弥生時代の石器』 ニュー・サイエンス社 1991  
 山原忠三 『四国の掘立柱建物』 『弥生時代の掘立柱建物』 縄文文化財研究会 1991  
 縄文文化財研究会 『弥生時代の掘立柱建物－資料（西日本・九州・四国）編－』 1991

- 梅木謙一 「松山平野の弥生後期土器-纏年試案-」『松山大学構内遺跡-第2次調査-』松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991
- 栗田正芳・河野史知「久米高畑遺跡21次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報 IV 平成3年度』朝松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1992
- 梅木謙一 「西瀬戸内地方の弥生時代前期土器-松山平野を中心として-」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会 1994
- 梅木謙一・武正良造・加鳥次郎 「斎院岡山遺跡」『斎院の遺跡』松山市教育委員会・朝松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994
- 橋本雄一 「榎木痕跡について」『北久米沼落寺遺跡〜3次調査地〜』松山市教育委員会・朝松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994
- 梅木謙一 「西瀬戸内地方における弥生中期の土器様相」『古文化談義 第34集』九州古文化研究会 1995
- 宮本良二郎 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版 1996
- 橋本雄一 「久米高畑遺跡24次〜25次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報 VII 平成7年度』松山市教育委員会・朝松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1996
- 橋本雄一 「久米高畑遺跡26次〜32次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報 IX 平成8年度』松山市教育委員会・朝松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1997
- 橋本雄一 「久米高畑遺跡26次〜32次調査地の成果〜」『松山市埋蔵文化財調査年報 IX 平成8年度』松山市教育委員会・朝松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1997
- 橋本雄一 「久米高畑遺跡33次〜40次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報 X 平成9年度』松山市教育委員会・朝松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1998
- 山田康弘 「交流と幕制（後晩期を中心に）」『第9回 中四国縄文研究会 本州西部地域における文化交流の諸問題』1998
- 橋本雄一 「久米高畑33・35〜36次遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報 X 平成8年度』松山市教育委員会・朝松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1998
- 河野史知 「久米高畑35次遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報 X 平成8年度』松山市教育委員会・朝松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1998
- 中村健二 「墓と墓地構造 西日本」『季刊考古学 第69号 特集 縄文時代の東西南北』1999
- 加鳥次郎 「乃万の遺跡 2次調査地」松山市教育委員会・朝松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1999

表1 縄文時代の出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	深鉢	底径 54 残高 459	胴部は、直線的に立ち上がり、口縁部との接合部で「く」の字に曲がる。口縁部は、強く外反する。	㊦上具原(板ナデ) (一部ナデ) ㊧ナデ	ナデ	黄褐色 灰白色	石・炭 (1-3) 金 ○	篠付君 SK21	9
2	深鉢	口径 (247) 残高 203	波状の口縁部。口縁部に浮文が付く。胴部は丸みをおびながら立ち上がり、口縁部は強く外反する。	上具原(板ナデ)	㊦上具原 (板ナデ) ㊧ナデ	暗褐色 暗褐色	石・炭 (1-3) 金 ○	SK21	9
3	浅鉢	残高 7.4	外面に赤土色塗料が施布される。胴部は直線的に立ち上がる。口縁部は緩張している。	ミガキ	ミガキ (ナデ)	明褐色 黒褐色	石・炭 (1-2) ○	赤色顔料 SK21	9
6	瓮上 境	残高 3.2	焼土の塊。	-	-	橙 (5YR6/6)	石・炭 (1-2) △	SK21	

表2 縄文時代の出土遺物観察表 石製品

番号	器種	石材	形 状	法 量				備 考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
4	台石	不明	四角面の内、三側面が欠損。阿面と1側面に複数の線刻による凹部と擦痕による平坦面がある。	(20.2)	(24.6)	9.9	7450.0	SK21	9
5	用途不明	不明	阿面ともに自然面。若干凸凹がある扁平な塊である。中央部に凹部がある。側面は縁りが入る。	6.1	5.3	1.2	48.0	完存 SK21	9

表3 弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
7	罍	口径 (338) 残高 123	断面三角形の貼付口縁の罍。口縁部直下にヘラ抜き沈線文を10条施す。胴部は、張りを持つ。	マメツ	マメツ・ハクリ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・炭 (1-4) △	SK10	
8	罍	口径 (25.3) 残高 180	直口口縁部のやや下位に突帯を貼り付ける。突帯は、垂下気味。胴部は直線的に立ちあがる。無文。	㊦ナデ (深口ハクリ-鉢)cm ㊧ミガキ	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・炭 (1-4) △	篠付君 SK17	
9	罍	口径 (23.0) 残高 49	断面三角形の貼付口縁を持つ。口縁部直下にヘラ抜き沈線文を9条、下位に刺突文を施す。	㊦ナデ ㊧ハケ (6-7本/cm)	マメツ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・炭 (1-4) △	SK22	
10	罍	口径 (26.9) 残高 132	口縁部は水平、突帯で外反する。外面胴部に2条の刺突帯と3条の沈線文。内面に2条の穴部口縁部に刺突帯の残りが2。	㊦マメツ ㊧ハケ	マメツ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・炭 (1-3) ○	外面に赤 色顔料 SK24	10
11	罍	残高 60	胴部上半部分。5条以上のヘラ抜き沈線文と木葉文を施す。	マメツ	マメツ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・炭 (1-4) △	SK24	10
12	罍	底径 (7.4) 残高 6.2	やや上げ底の底部。直線的に立ち上がる胴部。	マメツ (ハケ痕) ㊧マメツ	マメツ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・炭 (1-5) △	黒塵 SK24	
13	罍	底径 (8.0) 残高 24.5	器壁が厚い。肩が強く張る胴部。底部は、やや上げ底。	マメツ	マメツ	褐色 灰白色	石・炭 (1-6) △	黒塵 SK24	10
14	罍	口径 (30.7) 残高 4.4	ゆるやかに外反する口縁部。口縁部外面下半には沈線文が4以上、内面には貼付突帯が施される。	ココナデ	ココナデ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・炭 (1-3) 砂 ○	SK25	
15	罍	残高 57	上下不明。3-4条のヘラ抜き沈線文を施し、3条1組の工具による山形文を施す。	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色 褐色	石・炭 (1) ○	SK28	
16	美	底径 (6.2) 残高 7.8	平底。直線に立ち上がる。	ハケ→ミガキ (タテ→ヨコ) ㊧ナデ	ミガキ (ヨコ) →ナデ	黒褐色 灰黄褐色	石・炭 (1-5) ○	SK28	
17	罍	口径 (19.1) 残高 43	ゆるやかに外反する口縁部。口縁内面に貼り付け突帯を持つ。突帯には刷目を持つ。	マメツ	マメツ ハクリ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・炭 (1-4) 砂・金 △	SK28	
18	罍	底径 (5.5) 残高 2.6	罍の底部。平底。	ハケ (ナメ→ タテ) →ナデ ㊧ナデ	ナデ	明褐色 明褐色	石・炭 (1-2) ○	内面に赤 色顔料 SK28	
19	土製品	底径 4.4	側面を交互に打ちかいている。転用品。	ハケ→ナデ	ナデ	褐色	石・炭 (1-2) ○	SK28	

## 遺物観察表

弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・本文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土成	備考	図版	
				外 面	内 面					
20	甕	底径 残高	6.2 5.8	上げ底でややぐびれる底部。	ハケ ④ナデ	マメツ (粗灰灰)	橙色 にふい橙色	石・長 (1~3) 金 ○	黒底 SK29	
21	甕	底径 残高	7.2 8.1	直線的に立ち上がる。平底。	ミガキ (マメツ) ④ナデ	ナデ ④マメツ	橙色 にふい橙色	石・長 (1~3) 金 ○	黒底 SK29	
22	甕	底径 残高	12.0 7.7	平底。	ミガキ ④ナデ	ナデ (一部ハクリ)	にふい黄褐色 にふい黄褐色	石・長 (1~4) 砂・金 ○	SK29	
23	甕	底径 残高	11.3 5.9	平底。	ハクリ・マメツ	ハクリ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1~4) 砂 △	SK29	
26	甕	口径 残高	(30.9) 4.1	口縁部は水平に折り曲げられている。やや内傾ぎみの胴部。	①コロナデ ④ハケミガキ	ヘラミガキ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1~3) ○	黒底 SK30	
27	甕	口径 残高	(20.6) 5.6	口縁部に断面三角形の貼り付け口縁を持つ。底下に12条の沈線文と刺突文を施す。	①ナデ ④ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~4) 金 △	SK30	
28	甕	口径 残高	(18.1) 2.3	やや内傾する口縁部。口縁部のやや下位に断面三角形の突帯を貼り付ける。突帯上に工具で刻目を施す。	①コロナデ ④ハケ→ナデ	コロナデ	にふい藍色 にふい藍色	石・長 (1~2) ○	SK30	
29	甕	底径 残高	(6.0) 5.6	平底。	④ハケ ④ナデ	ナデ	にふい藍色 赤 ○	石・長 (1~5) ○	黒底 SK30	
30	土製 鉢	底径	7.3	甕の軟用品。	ナデ	ナデ	橙色	石・長 (1~2) 金 ○	SK30	
31	甕	残高	6.5	断面三角形の貼り付け口縁を持つ。口縁部直下に10条と5条以上のヘラ掻き沈線文とその間に刺突文を施す。	マメツ	マメツ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1~3) ○	SK31	
32	甕	口径 残高	(18.0) 7.5	筒状の胴部にゆるやかに外反する口縁部を持つ。口縁部に刻目を施す。	マメツ	マメツ	形赤褐色 赤褐色	石・長 (1~3) △	SK31	
33	甕	残高	5.0	胴部上半分。6~6条以上の沈線文とその間に2条1組の山形文を施す。	ミガキ→ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~2) 金 ○	SK31	
34	甕	残高	8.8	甕の底部。立ち上がりは直線的。	ナデ	ナデ	褐色 灰黄褐色	石・長 (1~5) 砂 △	2次焼成 SK31	
35	甕	底径 残高	6.6 7.1	甕の底部の軟用品。焼成後穿孔。底部は、上げ底。	マメツ	マメツ	褐色 浅黄褐色	石・長 (1~4) ○	備付着 SK31	
42	甕	口径 残高	(24.0) 4.8	口縁部にやや方形の貼り付け突帯を施す。	①コロナデ ④ハケ→ナデ	ナデ	にふい藍色 にふい黄褐色	石・長 (1~2) ○	SK32	
43	甕	残高	5.9	胴部片。貼り付け突帯に粗灰押圧と刺突文を施す。突帯上下にヘラ掻き沈線文を施す。	ナデ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~3) ○	SK32	
44	甕	底径 残高	6.2 6.1	甕の底部。平底。直線的に立ち上がる。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~5) △	SK32	
45	甕	口径 残高	(19.2) 4.8	底部は強く外傾する。口縁部は強く折り曲げられ、水平を呈す。	マメツ	ナデ	灰黄褐色 暗灰黄褐色	石・長 (1~5) 金 △	SK35	
47	甕	残高	2.1	上下不明の胴部片。4条以上の沈線文と刺突文を施す。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~2) △	SK40	
48	甕	残高	4.6	甕の底部。	マメツ	ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長 (1~3) △	SK40	
49	土製 鉢	口径 厚さ	4.1 1.0	土器片を転用した品。平面形は円形で断面は長方形に仕上げられている。円孔は穿孔されていない。	ナデ	-	黒色	石・長 (1~3) ○	SK40	11
50	土製 器	底径 厚さ	3.4 0.8	土器片を転用した品。平面形は円形。断面はやや丸みを帯びている。胴部も丸い。底穿孔。	ナデ	-	黒色	石・長 (1~3) ○	SK40	11

弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	寸量 (cm)	形態・施文	装		色調 (外面 内面)	胎土 成	備考	図版
				外面	内面				
67	甕	口径 残高 22.9 4.5	断面三角形の胎付口縁を持つ。口唇部には刻目を施す。口縁直下に6条の沈線文を施す。	①マメツ ②マメツ	マメツ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1~4) 金 △	SK50	
68	甕	残高 10.3	長径で口縁部が上外方に曲く、胴部下段に突帯を2条施す。口唇部内面に貼り付け突帯を持つ。	マメツ	マメツ	灰白・黄褐色 灰色	石・長 (1~5) 金 △	SK50	
72	甕	口径 器高 底径 9.8 21.1 6.2	器壁が厚い。やや外傾する頸部を持つ。胴部中央が張り、平底。	①ナデ マメツ	マメツ (指頭痕)	灰白・黄褐色 灰白・黄褐色	石・長 (1~3) 金 ○	SK53	12
73	甕	底径 残高 (5.5) 3.0	やや上げ底。	ナデ	マメツ	赤褐色 灰褐色	石・長 (1~3) ○	SK60	
75	甕	口径 残高 (13.7) 4.0	筒状の頸部に外反する口唇部を持つ。	①ココナデ ②ハケ (6本/cm)	ナデ	灰白・黄褐色 灰白・黄褐色	石・長 (1~3) 砂 ○	SK57	
77	甕	底径 残高 7.6 18.7	平底。	ハケ (6本/cm) ③ナデ	ナデ (工具痕)	褐色 褐色	石・長 (1~3) ○	SK59	
78	甕	口径 残高 (16.4) 10.0	短い頸部を持つ。口唇部は、ゆるやかに外反する。胴部上半が張るものと考える。	①・②ナデ (指頭痕) ③ミガキ→ナデ	マメツ (指頭痕)	褐色 褐色	石・長 (1~4) 砂・赤 ○	78と同一 SK59	
79	甕	底径 残高 10.7 10.4	器壁の厚い平底。	マメツ ④ナデ ⑤ナデ	マメツ	明褐色 明褐色	石・長 (1~4) 砂 ○	78と同一 SK59	
80	鉢	口径 残高 (12.9) 8.5	胴部中央が張り、口縁はやや内湾する。口唇端直下に把手状の突起を持つ。胎成前穿孔の2つの孔あり。	ミガキ	①ココナデ ナデ	灰黄褐色 灰白・褐色	石・長 (1~3) 赤 ○	SK59	
82	甕	残高 7.2	折り曲げによる口唇部を持つ。9条の沈線文の直下に刺突文を施す。	ハケ	マメツ	灰白・黄褐色 灰白・黄褐色	石・長 (1~5) 砂 △	SK137	
83	甕	残高 4.3	方形の胎り付け突帯を持ち、突帯直上に刺突を施す。7条の沈線文の直下に2列の刺突文を施す。	①ナデ 施文	マメツ	灰褐色 灰褐色・褐色	石・長 (1~4) ○	SK137	
84	甕	底径 残高 (4.6) 4.4	上げ底。直線的に立ち上がる。	ナデ	ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長 (1~9) △	黒腫 SK137	
85	甕	底径 残高 (6.7) 4.0	平底。直線的に立ち上がる。	ハケ (8~9本/cm) ③ナデ	ナデ	褐色 灰褐色	石・長 (1~3) 砂・金 ○	SK137	
86	甕	底径 残高 (7.0) 5.1	甕の底形。平底。直線的に立ち上がる。	ナデ→ミガキ ③ナデ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~5) 赤 ○	SK137	
87	鉢	底径 残高 4.7 4.5	鉢の底形。上げ底。直線的に立ち上がる。	ナデ上げ ④ココナデ ⑤ナデ	ナデ (指頭痕)	黒色・褐色	石・長 (1~3) ○	内面に赤 色顔料 SK137	
88	甕	天井径 残高 16.8 7.0	大きく凹む。天井部は長く、器壁は厚い。ゆるやかに開く体部を持つ。	ハクリ	ナデ (指頭痕)	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1~5) 金 ○	SK137	
89	台付 鉢	底径 残高 8.5 7.6	やや内湾する高筒。器壁が厚い。	ミガキ	④ミガキ ⑤強い指ナデ (指頭痕)	灰褐色 暗褐色	石・長 (1~5) 金・赤 ○	黒腫 SK137	
90	甕	残高 4.4	折り曲げによる口唇部。口唇部直下に7条以上の沈線文を施す。	ナデ	ナデ (指頭痕)	褐色 褐色	石・長 (1~2) ○	SK90	
91	甕	残高 4.9	平底。直線的に立ち上がる。	ミガキ ③ナデ	ナデ	灰白・黄褐色 灰白・黄褐色	石・長 (1~3) ○	SK90	
93	甕	口径 残高 (20.8) 5.6	断面三角形の胎付口縁を持つ。口唇部には刻目を施す。	①ココナデ ②ハケ	ナデ	黒褐色 灰白・黄褐色	石・長 (1~3) 砂・金 ○	SK93	
94	甕	口径 残高 (15.0) 5.7	口唇部はゆるやかに外反する。	①ナデ ②ハケ→ナデ ③ココミガキ	①・②ミガキ ③ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~3) 砂・金 ○	SK93	
95	甕	口径 残高 (18.8) 5.9	口唇部はゆるやかに外反する。	マメツ	マメツ	淡赤褐色 灰白・黄褐色	石・長 (1~3) 砂・赤 △	SK93	

## 遺物観察表

弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
96	甕	口径 残高 (248) 69	折り曲げによる口縁部を持つ。口縁直下に16条以上のヘラ掻き沈線文を施す。	マメツ	マメツ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・灰 (1~4) △	SK98	
97	甕	残高 5.7	胴部片、上下不明。上下に1列の刺突文が施す。胴に7条のヘラ掻き沈線文を施す。	ハケ	ナデ	灰白色 にぶい白色	石・灰 (1~4) △	SK98	
98	甕	口径 残高 (18.2) 4.1	ゆるやかに外反する口縁部。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石・灰 (1~2) △	SK98	
99	甕	口径 残高 19.6 9.8	長蓋で上方に外反する口縁部。胴部内面に刺突文を持つ。肩付突帯あり。外面に8条のヘラ掻き沈線文と刺突文がある。	マメツ	マメツ (ハケ) ⑧ナデ	棕色 棕色	石・灰 (1~4) △	SK98	
100	甕	口径 残高 9.8 9.6	やや上り底。直線的に立ち上がる。	ハケ ⑧ナデ	ミガキ ⑧ナデ	にぶい黄褐色 にぶい赤褐色	石・灰 (1~4) 金 ○	SK98	
101	甕	口径 残高 (32.0) 9.8	折り曲げによる口縁部。口縁直下に5条1組のヘラ掻き沈線文とその間に刺突文を施す。	マメツ	マメツ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・灰 (1~5) 赤 ○	102と 同一か SK103	
102	甕	口径 残高 9.0 14.8	器壁が厚い。平底。やや内湾しながら立ち上がる。	⑧ハケ ⑧ナデ	ミガキ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・灰 (1~3) ○	101と 同一か SK103	
103	甕	口径 残高 40.0 12.0	断面が方形の貼り付け口縁を持つ。貼り付け突帯上に工具による刻目。胴部は内窪する。	⑧ナデ ⑧ハケ	⑧マメツ ⑧ミガキ	棕色 棕色	石・灰 (1~3) ○	104と 同一か SK103	
104	甕	口径 残高 (10.0) 13.8	わずかに上げ底。	⑧ハケ→ナデ ⑧ハケ ⑧ナデ	⑧ナデ ⑧ナデ (ミガキ?) (指頭痕)	棕色 棕色	石・灰 (1~3) 金 ○	103と 同一か SK103	12
105	甕	口径 残高 32.5 27.0	断面三角形の貼り付け突帯を持つ口縁。突帯に工具による刻目あり。直口口縁を呈する。	⑧ナデ ⑧ハケ→ナデ ⑧ナデ	⑧ハケ (指頭痕) ⑧ナデ	淡赤褐色 棕色	石・灰 (1~4) 砂 ○	106と 同一か SK106	12
106	甕	口径 残高 (6.2) 4.5	器壁が厚い。上げ底。	マメツ ⑧ナデ	マメツ	棕色 にぶい棕色	石・灰 (1~3) 金 ○	105と 同一か SK106	
107	甕	口径 残高 (24.1) 6.0	断面三角形の貼り付け口縁を持つ。直口口縁を呈する。器壁が厚い。やや上り底。	マメツ (一部ハケ ク)	マメツ	黄褐色 棕色	石・灰 (1~5) △	黒塚 SK110	
108	甕	残高 8.0	胴部。口縁直下に4条のヘラ掻き沈線文を施す。胴部にやや張りを持つ。	ナデ	ミガキ	にぶい棕色 灰褐色	石・灰 (1~3) ○	SK112	
109	甕	口径 残高 (16.7) 10.3	胴部中央又は下部に最大径が来る。胴部はやや厚く、筒状を呈する。口縁部は、強く外反。外面に4条の沈線文。	マメツ	マメツ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・灰 (1~3) 砂・赤 ○	SK112	
110	甕	残高 7.3	貼り付け突帯に指頭押圧を施す。その後、突帯の上下に3~4条のヘラ掻き沈線文を施す。	ミガキ	ココナデ	にぶい棕色 にぶい白色	石・灰 (1~2) 砂 ○	SK112	
111	甕	口径 残高 9.7 7.8	やや上り底。	マメツ (一部ナデ)	ナデ (指頭痕)	灰黄色 灰黄色	石・灰 (1~2) 砂 (4) ○	SK112	
112	ミニ チュア	口径 残高 3.9 2.4	くびれのやや上り底の底部	指押え (指頭痕・ツメ痕) ⑧ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・灰 (1~2) 砂 ○	黒塚 SK112	
114	甕	口径 残高 (26.4) 3.8	折り曲げによる口縁を持つ。口縁直下に6条以上の沈線文を施す。	⑧マメツ ココナデ (指頭痕)	マメツ	浅黄色 浅黄褐色	石・灰 (1~4) 金 △	SK113	
115	甕	残高 3.7	直口口縁を持つ。口縁部下に粘土紐を貼付する。粘土紐は垂下する。	ナデ	マメツ	にぶい棕色 にぶい白色	石・灰 (1~3) 砂・赤 ○	SK113	
116	鉢	口径 残高 6.0 3.0	やや上り底の底部。	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色 淡棕色	石・灰 (1~4) ○	黒塚 SK113	
118	甕	口径 残高 (32.4) 13.3	断面三角形の貼り付け口縁を持つ。無文。	⑧ココナデ ⑧ミガキ (マメツ)	マメツ (一部ミガキ?)	明赤褐色 赤褐色	石・灰 (1~4) △	黒塚 SK119	
119	甕	残高 2.2	ゆるやかに外反する口縁部。口縁部には1条の沈線と刻目を施す。口縁内面に1条の突帯を施す。	マメツ	マメツ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・灰 (1~3) △	SK119	

## 遺物観察表

弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	装 飾		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
120	鉢	口径 残高 24.4 4.1	胴部は、外傾し、口縁はゆるやかに外反する。	①ココナデ ナデ	ミガキ	にぶい藍色 にぶい藍色	石・長 (1~5) ○	SK119	
121	鉢	底径 残高 7.0 3.7	底平。くびれて上げ底。	ナデ	ナデ (指頭痕)	黄褐色 にぶい藍色	石・長 (1~4) 金 ○	黒灰 SK119	
125	壺	底径 残高 7.3 5.9	壺の底平。平底。	ハケ ①ココナデ ②マメツ	マメツ	淡赤褐色 淡黄褐色	石・長 (1~3) 砂・金 ○	SK126	
127	壺	口径 残高 21.4 7.1	断面三角形の張り付け口縁を持つ。口縁直下に10条のヘラ掻き沈線文と刺突文を施す。胴部に張りを持つ。	ナデ	ナデ	褐色 にぶい藍色	石・長 (1~4) 砂・赤 ○	SK130	
129	壺	口径 残高 20.4 9.5	折り曲げによる口縁を持つ。口唇部には指頭押圧による刻目。口縁直下に12条のヘラ掻き沈線文。	ナデ	ナデ	褐色 にぶい藍色	石・長 (1~3) △	SK135	
130	壺	底径 残高 7.5 9.2	壺の底平。直線的に立ち上がる。平底か?	ナデ ①ココナデ ②ナデ	ナデ	灰褐色 にぶい藍色	石・長 (1~2) 砂 (4) ○	SK135	
131	壺	口径 底径 残高 39.4 44.7 9.8	折り曲げによる口縁を持つ。口縁下に6条のヘラ掻き沈線文を施す。底平は平底。	①ナデ ②ハケ ③ナデ	ナデ	にぶい藍色 にぶい藍色	石・長 (1~3) ○	黒灰 SK138	13
132	壺	口径 底径 残高 15.4 16.6 6.4	断面三角形の張り付け口縁を持つ。胴部に張りを持つ。口唇部に張りを持つ。外側に2条のヘラ掻き沈線文と刺突文を施す。	①ココナデ ②ナデ ③ナデ ④ナデ ⑤ナデ	①ナデ ②ミガキ ③ナデ	にぶい藍色 にぶい藍色	石・長 (1~3) 金 ○	黒灰 SK138	13
133	壺	残高 60	折り曲げによる口縁を持つ。口縁直下に6条のヘラ掻き沈線文を施す。	マメツ	マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長 (1~3) ○	SK138	
134	壺	口径 残高 22.5 5.2	断面三角形の張り付け口縁を持つ。口縁直下に6条以上の沈線文を持つ。	ナデ (マメツ)	マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長 (1~3) △	SK138	
135	壺	残高 27.4	胴部に張りを持つ。口縁直下に12条のヘラ掻き沈線文を施す。	①ミガキ ②マメツ	①ミガキ ②マメツ	にぶい赤褐色 赤褐色	石・長 (1~5) 金 ○	黒灰 SK138	13
136	壺	底径 残高 11.0 28.0	胴部は外傾し、中位から直線的に立ち上がる。	ナデ (一部マメツ)	ナデ (一部マメツ)	褐色 黄褐色	石・長 (1~4) 砂・赤 ○	黒灰 SK138	
137	壺	口径 残高 21.1 10.7	平底で口縁に張りを持つ。口唇部と胴部間に2条の刺突文を施す。外側に2条の平行沈線文と刺突文を施す。	①施文 ②ハケ→ナデ	③マメツ ④ハケ→ナデ	にぶい藍色 にぶい藍色	石・長 (1~5) ○	赤色顔料 SK138	13
138	壺	底径 残高 9.0 24.1	やや胴部が張る胴部。底平は、やや上げ底。	①ミガキ ②ナデ	③ナデ ④ハケ→ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~4) 金 ○	黒灰 SK138	14
139	壺	底径 残高 8.0 33.9	短家で胴部は外反する。胴部は中位で張る。底平はやや上げ底。胴部外側に8条のヘラ掻き沈線文。	③マメツ ④マメツ ⑤ナデ	⑥ナデ ⑦マメツ ⑧マメツ (指頭痕)	黄褐色 灰褐色	石・長 (1~5) 砂・金 △	黒灰 赤色顔料? SK138	14
140	壺	残高 135	やや胴部が張る胴部。胴部に3条のヘラ掻き沈線文を施す。	マメツ (一部ミガキ)	マメツ	淡黄褐色 明灰褐色	石・長 (1~1) △	黒灰 SK138	
141	壺	底径 残高 5.2 3.6	小片、平底か?	マメツ	ナデ	にぶい藍色 灰褐色	石・長 (1~3) △	SK138	
142	壺	底径 残高 10.6 5.3	平底。器壁が厚い。	マメツ	マメツ	褐色	石・長 (1~5) 金 △	SK138	
143	壺	底径 残高 10.2 4.2	小片。平底か? 器壁が厚い。	ナデ (指頭痕)	ナデ	にぶい赤褐色 灰褐色	石・長 (1~4) 砂 ○	SK138	
144	壺	底径 残高 8.4 5.2	平底。	マメツ ②ナデ	マメツ	淡黄褐色 灰白色	石・長 (1~4) ○	SK138	
145	壺	底径 残高 9.7 3.3	平底。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1~5) ○	SK138	
146	壺	天井径 残高 65.1 2.1	大きく凹む天井部。塗くびれる。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~2) △	SK138	

弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表 土製品

(6)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 成	備考	図版
				外面	内面				
150	甕	口径 残高 (35.8) 12.6	折り曲げによる口縁部。	①ロコナデ ②ハケ (8-9本/cm) (工具痕)	①ロコナデ ②ミガキ→ロコナデ	褐色 褐色	石・長 (1-2) 砂・金 ○	SK147	
151	甕	口径 残高 (26.8) 2.9	断面が三角形の突帯を口縁部に 貼り付ける。口縁下に2条の沈 線文。	ナデ	ナデ	にぶい藍色 灰褐色	石・長 (1-3) △	SK147	
152	甕	底径 残高 (7.1) 8.5	上げ底。	マメツ (ミガキ?)	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1-4) ○	SK147	
153	甕	底径 残高 7.9 7.3	厚手の平底。	ミガキ ①ロコナデ ②ナデ	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1-3) 砂 ○	黒産 SK147	
154	鉢	口径 残高 (21.4) 4.6	折り曲げによる口縁部。	①ロコナデ (指痕痕)	①ロコナデ ②ナデ (指痕痕)	淡灰黄色 淡灰黄色	石・長 (1-2) 砂 (3)・金 ○	SK147	
155	甕	底径 残高 (8.0) 6.7	平底。	マメツ	マメツ	にぶい藍色 浅黄褐色	石・長 (1-3) △	SK4	
156	甕	残高 2.6	口縁部に断面三角形の突帯を 貼り付ける。	①ミガキ (ナデ) ②マメツ	①ロコナデ ②ミガキ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1) ○	黒産 SK37	
157	ミニ チュア	底径 残高 4.4 3.0	上げ底。	ナデ	ナデ	暗赤灰色 赤黒色	書 ○	SK37	
158	甕	残高 5.4	強く外反する口縁部。頸部に5 条以上の沈線文を施す。	ミガキ	①ミガキ ②ナデ	にぶい藍色 にぶい藍色	石・長 (1-3) 砂 ○	SK48	
159	甕	残高 2.5	折り曲げる口縁。口縁下に3条 以上の沈線文。	マメツ	ナデ	にぶい藍色 褐色	石・長 (1-2) ○	SK63	
160	甕	残高 8.1	口縁の内面に断面三角形の突帯 を貼り付ける。頸部の外面に6条 の沈線文と間に刺突文を施す。	ナデ	①ロコナデ ②ナデ	明褐色 明褐色	石・長 (1-4) 砂 △	SK65	
161	甕	残高 8.6	胴部最大径上に突帯を巡らし、 爪形文を施す。	①ナデ ②ハケ (10本/cm)	ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長 (1-4) ○	SK65	
162	甕	底径 残高 10.0 4.3	平底。	①ナデ (一部ハケ6本/cm) ②ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 褐色	石・長 (1-4) ○	黒産 SK65	
163	甕	残高 5.2	口縁部に断面三角形の突帯を 貼り付ける。口縁下に沈線文あり。	①ナデ ②マメツ	ナデ	浅黄褐色 褐色	石・長 (1-4) 金 △	SK70	
164	甕	底径 残高 (7.2) 11.7	平底。	マメツ	ミガキ (ナデ)	にぶい藍色 にぶい藍色	石・長 (1) ○	黒産 SK70	
165	甕	底径 残高 6.3 7.4	上げ底。	マメツ (一部ナデ) ①ナデ (一部マメツ)	ナデ	明赤褐色 灰褐色	石・長 (1-5) △	SK70	
166	甕	底径 残高 (7.7) 4.5	平底。	ナデ ロコナデ	ナデ	にぶい藍色 にぶい黄褐色	石・長 (1-3) ○	SK71	
167	甕	残高 4.7	胴部と頸部の境目に沈線文と刺 突文を交互に施す。	ナデ ハケ (5-6本/cm)	ミガキ ナデ	にぶい藍色 にぶい藍色	石・長 (1-2) 金 ○	SK71	
168	焼土	直径 3.9	焼土の塊。	-	-	褐色	石・長 △	SK71	
169	ミニ チュア	底径 残高 3.2 3.0	平底の底部。	ナデ ②マメツ	ナデ (一部板状 の工具痕あり)	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1-2) 金 △	SK77	
170	甕	残高 3.2	強く外反する口縁部。口縁部に 割目と1条の沈線文。内面には断 面三角形の突帯を貼り付ける。	ナデ	①ミガキ ナデ	にぶい藍色 にぶい藍色	石・長 (1-4) ○	SK97	
171	甕	底径 残高 (6.6) 9.6	平底。胴部は直線的に立ち上 がる。	①ハケ (8-10本/cm) ②ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1-4) ○	黒産 SK99	

## 道物観察表

弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表 土製品

(7)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
172	壺	残高 5.0	頸部の外面に沈線文を施し、胴部との境に突帯を貼り付け、押圧する。	ナデ	ナデ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1-2) △	SK102	
173	鉢	口径 残高 (16.2) 5.2	直線的に立ち上がった口縁。口縁端に断面三角形の突帯を貼り付ける。	ナデ	ナデ	明褐色 明褐色	石・長 (1-3) ○	SK104	
174	壺	口径 残高 (12.9) 8.2	口縁端がやや肥大する。頸部に刺突文が高る。	①ナデ ②ハケ (11-12本/cm)	マメツ	橙色 黄褐色	石・長 (1-4) ○	黒塚 SK109	
175	壺	残高 9.1	口縁の内面に断面三角形の突帯を貼り付ける。頸部の外面には2条の断面三角形の突帯。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1-5) 砂・金 △	SK115	
176	甕	口径 残高 (21.2) 7.9	口縁端に断面三角形の突帯を貼り付ける。	①ココナデ ②ハケ (6-7本/cm)	③ココナデ ④ミガキ	灰褐色 褐色	石・長 (1-3) 砂・赤 ○	SK115	
177	甕	底径 残高 (6.6) 3.6	平底。	マメツ	マメツ	褐色 明赤灰色	石・長 (1-2) 砂・金 △	SK115	
178	壺	底径 残高 (7.6) 5.2	平底。	マメツ	ナデ	褐色 浅黄褐色	石・長 (1-4) △	黒塚 SK116	
179	壺	口径 残高 (17.6) 8.4	筒状で短い頸部にゆるやかに外反する口縁部を持つ。頸部外面に5条のヘラ描き沈線文を施す。	①ココナデ ②ハケ→ナデ ③ハケ→ミガキ	④ココナデ ⑤ミガキ	にぶい褐色 明赤褐色	石・長 (1-3) 砂・金 ○	SK123	
180	甕	底径 残高 (7.6) 4.8	甕の底部。平底。	ナデ (マメツ) (指頭板→ハケ) ⑤ナデ (マメツ)	ナデ	にぶい褐色 黒褐色	石・長 (1-3) 砂 (4)・金	SK123	
181	甕	底径 残高 (6.4) 7.7	甕の底部の転用品。焼成後穿孔。	ミガキ ⑥ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1-2) ○	SK123	
182	甕	底径 残高 (7.4) 9.5	平底。	マメツ	マメツ	黄褐色 灰褐色	石・長 (1-3) ○	SK124	
183	壺	底径 残高 (9.2) 3.0	上げ底。	⑦ハケ ⑧マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長 (1-2) 金 ○	SK144	
186	甕	残高 4.2	頸部。4条以上のヘラ描き沈線文を施す。	ナデ	ナデ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1-3) ○	SD6	
188	甕	口径 残高 (22.8) 6.0	切り上げ口縁部。多重沈線の間に山形文を施す。	マメツ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1-4) △	SP826	
189	甕	底径 残高 6.8 9.5	やや上げ底の底部。	粗いミガキ (マメツ) ⑨ナデ	ミガキか? ⑩ナデ	褐色 褐色	石・長 (1-6) 金 ○	黒塚 SP826	
190	甕	口径 残高 (13.3) 2.7	口縁部は直線的に立ち上がる。口縁端部に刻目を残す。	ココナデ	ココナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	長 (2) 砂・金 ○	SP948	
191	壺	口径 器高 底径 (14.5) 28.1 7.6	実形品。胴部に6条の沈線。口縁端部に1条の沈線後、裏目を残す。口縁部外反。胴部最大径は中心。底径平底。	ミガキ・ナデ ⑪ナデ	ナデ (マメツ・ハクリ)	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長 (1-3) 金 ○	SP1009	14
192	甕	残高 5.7	右軸の本業文を施す。貝殻文。	施文	ナデ	にぶい黄褐色 灰黄色	石・長 (1-2) ○	SP846	
193	甕	残高 5.1	胴部と頸部に沈線文を施す。	ミガキ (ハクリ)	ナデ ミガキ (指頭板)	褐色 褐色	石・長 (1-4) ○	黒塚 SP1074	
194	鉢	口径 器高 底径 (18.6) 9.6 7.2	平底。口縁端をやや折り曲げる。	⑫・⑬マメツ ⑭ハケ→ミガキ ⑮ナデ	ナデ (指頭板)	褐色 褐色	石・長 (1-3) ○	SP276	
195	鉢	口径 残高 (20.8) 4.5	口縁端に帯状に粘土を貼り付ける。その底下に山形文を施す。	マメツ	ナデ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1-2) △	外栗系 SP298	
196	土製品	直径 厚さ 3.5 1.3	壺、又は甕の転用品。側面に面取りは施さない。	マメツ	マメツ	赤褐色	石・長 (1-4) △	SP1285	

## 遺物観察表

表4 弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表 石製品

(1)

番号	器種	石材	形状	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
24	柱状片刃石斧	結晶片岩	欠損の為、長りの有無は不明。基面は、平歪。断面は隅丸。	(5.5)	1.9	(0.8)	15.3	SK29	
25	不明石製品	結晶片岩	微前面が山形になる。傾面に斜磨が施されている。	(5.1)	1.4	0.4	3.1	SK29	
36	石鏃	サヌカイト	打痕呈。平基無茎式。	(2.5)	1.8	0.4	1.9	残存4/5 先端欠損SK31	
37	磨石	不明	楕円。全面に擦痕あり。	4.0	2.5	2.2	25.2	SK31	
38	磨石	不明	楕状。先端を線状に加工。下半分に敲打痕を残す。焼成痕あり。	14.7	5.4	4.1	365.0	完存 SK31	10
39	磨石	不明	凹面を除き、全面に擦痕がみられる。焼成痕あり。	10.6	(9.0)	3.0	395.0	SK31	
40	砥石	不明	a・b面も砥石面として利用。両面に磨状痕あり。a面に敲打痕。鉄錆付着。焼成痕。	8.3	5.7	5.0	330.0	SK31	10
41	台石	不明	欠損品。擦痕あり。焼成痕あり。	7.4	5.0	5.0	172.0	SK31	
46	大型片刃石斧	結晶片岩	茎部のみ。平面形は長方形。両縁縁に打ちが入る。	(9.3)	7.3	3.8	485.0	残存1/2 SK35	10
51	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	2.0	1.6	0.4	0.8	ほぼ完存 基部欠損SK36	11
52	スクレイパー	サヌカイト	2個縁に刃部を有す。1つは外湾、もう1つは直線状。2つとも両面調整。	8.0	6.2	1.3	61.1	完存 SK40	11
53	スクレイパー	不明	刃部は若干外湾する。片面調整。	7.4	5.2	1.5	51.3	完存? SK40	11
54	スクレイパー	不明	刃部は直線状で両面調整。一方の面は自然面である。	11.9	6.9	2.2	121.9	完存? SK40	11
55	スクレイパー	サヌカイト	刃部は外湾し、両面調整。一方の面は自然面である。	5.4	3.9	1.2	18.7	完存? SK40	11
56	用途不明品	不明	両面には自然面が残る。扁平な円形の鏃。	9.0	8.5	1.7	188.0	ほぼ完存 SK40	11
57	用途不明品	不明	両面とも磨減が激しい。やや膨らみを帯びた円形の鏃。	6.4	7.1	2.4	86.8	残存2/3 SK40	11
58	削片	サヌカイト	自然面なし。	3.5	3.1	0.4	4.2	SK40	11
59	削片	サヌカイト	自然面なし。	3.6	3.4	0.5	5.3	SK40	11
60	削片	サヌカイト	自然面あり。	4.5	4.3	0.8	12.2	SK40	11
61	削片	サヌカイト	自然面あり。	3.5	2.2	0.8	4.6	SK40	11
62	削片	サヌカイト	自然面なし。	3.4	2.3	0.3	2.9	SK40	11
63	削片	サヌカイト	自然面なし。	3.8	3.1	0.8	5.8	SK40	11
64	削片	サヌカイト	自然面なし。	5.3	4.5	1.1	19.4	SK40	11
65	削片	サヌカイト	自然面なし。	5.0	2.3	0.6	7.4	SK40	11
66	石庵丁	結晶片岩	成品の背部分。	(3.1)	(1.1)	(0.6)	3.4	破片 SK41	
69	扁平片刃石斧	結晶片岩	平面形は平歪長方形。全面に自然面が残る。基部は平歪。基部は鋭角。基部は門形。微彫面に磨け。面に打痕。	5.7	3.0	1.4	42.5	完存 SK50	12
70	砥石	不明	棒状。上半分は光潤り。下半分は磨状を残す。中に段を帯びた全面を帯びた段。先端と下半分に敲打痕を残す。	10.5	4.2	4.3	218.9	完存 SK50	12

遺物観察表

弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表 石製品

(2)

番号	器種	石材	形状	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
71	磨石・敲石	花崗岩	平面には両面とも擦痕あり。側面には敲打痕あり。	10.5	(7.7)	4.5	515.0	残存1/2 SK50	
74	不明	結晶片岩	棒状。扁平面を持つ。両面とも自然面。石母素材の可能性あり。	10.1	2.4	1.4	43.5	ほぼ完存 SK60	
76	石鏃	サヌカイト	打製品。凹蓋無蓋式。	2.7	2.0	0.4	1.6	ほぼ完存 SK87	
81	不明石製品	不明	砂岩質の礫に凹形の凹みがある。反対の面は、全体がゆるやかに凹んでいる。	10.2	5.0	4.0	233.1	ほぼ完存 SK89	
92	石忍丁	結晶片岩	未製品。打面段階。打製調整・研磨は終わらない。	(7.7)	3.5	0.6	28.3	残存2/3 SK90	
113	凹石・台石	不明	凹部は片面のみに形成される。もう片面は平面。凹部は棒状が残る。	21.1	14.4	6.6	2500.0	完存 SK112	
117	不明	結晶片岩	扁平。両面とも自然面が残る。両側面の中央部に打ちかけた痕跡あり。石母素材の可能性あり。	11.5	3.6	1.0	87.0	完存 SK113	
122	スクレイパー	サヌカイト	大きく欠損する。片面に自然面を残す。刃部は直線状。両面調整。	(5.2)	3.6	0.6	10.1	SK119	
123	扁平片刃石斧	結晶片岩	基部と先端部が欠損。平面部は長方形。基部は四五、基部は四五。断面形状は長方形。筋は円錐。	(8.0)	(3.3)	1.6	77.4	残存1/4 SK119	
124	砥石?	不明	平坦な面を一面持つ。擦痕あり。焼成を受けている。	(13.0)	(10.6)	5.2	733.0	SK119	
126	粗製剥片	不明	河原の円礫を打ち割がしている。両面とも割産面からなり、扇形。	13.0	7.4	1.2	91.0	ほぼ完存 SK126	12
128	不明	結晶片岩	棒状で扁平な石器素材。先端状になる。両面とも自然面。	6.2	1.5	0.3	5.6	完存 SK130	
147	スクレイパー	不明	欠損品。刃部は直線状である。両面調整。	8.7	(7.9)	1.7	142.7	SK138	
148	磨石	不明	欠損品。凹面ともに擦痕あり。	(14.2)	(8.7)	5.8	1000.0	SK138	
149	磨石・敲石	不明	平坦面の両面に擦痕あり。側面には敲打痕がある。	10.3	9.5	5.0	777.5	完存 SK138	
184	スクレイパー	不明	片面に若干自然面を残す。平面部は扇形。両面調整。	10.6	8.4	1.7	183.8	完存 SK39	
185	磨石・敲石	不明	棒状。面の一部分に擦痕がある。敲打痕は両面にみられる。	12.1	7.3	7.1	1045.8	SK39	
187	伐採斧?	不明	欠損品。刃部分。横断面形状は、扁平。	(7.1)	(6.7)	(2.1)	129.5	残存1/2 SD5	

表5 弥生時代中期前葉の出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形状・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
197	甕	残高 5.7	唇部が張り、口縁がやや内傾する。口縁部は断面が三角形。直下に1.3cm×4.5cmの横溝きによる沈線文と刺突文。	①ナデ ②ハケ	ナデ	にぶい棕色 浅黄棕色	石・長 (1-5) △	SK111	
198	壺	残高 5.4	壺の底部。器壁が厚い。	マメツ	マメツ	にぶい赤棕色 灰褐色	石・長 (1-3) △	SK111	
201	甕	残高 8.3	胴部片。8条の刺突沈線文の間に波状文 (刺突文) が施文されている。	ナデ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1-2) △	SK15	
202	甕	口径 (21.2) 残高 7.9	口縁縁部に断面三角形の突起を隔り付けている。	①ヨコナデ ②ハケ (6-7本/cm)	①ヨコナデ ②ヘツミガキ	灰褐色 陶灰色	石・長 (1-3) 砂 ○	SK15	
203	甕	残高 7.9	口縁部は「く」の字に曲がる。胴部は内湾している。口縁部と胴部に刺突沈線文を施し、直下に刺突文あり。	ナデ	ナデ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1-3) ○	SK134	

表6 弥生時代中期前葉の出土遺物観察表 石製品

番号	器種	石材	形状	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
199	石鏃	チャート	頭部と銚部の境が不明瞭で、露に近くなるにつれて、しだいに細くなる。	(35)	1.6	0.6	3.1	重高一再大附SK111	
200	不明	結晶片岩	棒状の石鏃素材。片端と側面が欠損する。	(48)	2.1	1.7	35.4	SK111	

表7 弥生時代中期中葉の出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
204	甕	口径残高 (19.6) 7.1	断面三角形の縁り付け口縁を持つ。肩部に張りを持ち、口縁は内転する。外壁は刺繍している。刺突文あり。	ハクリ	ナデ (マメツ)	にぶい赤褐色 赤褐色	石・長 (1~4) △	SK122	
205	甕	口径残高 (22.1) 3.3	「く」の字に広く沿曲する口縁部。頸部には粘土を貼り付け、指頭押圧を施す。	ココナデ	ココナデ	橙色 褐色	石・長 (1) 金 ○	SK122	
206	甕	底径残高 (7.4) 4.4	平底。	①ナデ・ココナデ ②ナデ	マメツ	にぶい藍色 にぶい藍色	石・長 (1~3) 金 ○	SK122	
208	甕	口径残高 (23.9) 9.5	口縁は強く外反し、胴部は肩上がりもの。	①ナデ ②ミガキ	マメツ	にぶい藍色 にぶい藍色	石・長 (1~3) ○	漆付着SK23	
209	甕	口径残高 (22.3) 10.2	口縁部を折り曲げる。内・外面に、強い屈曲を有す。頸部下に突帯を貼り付け、端を押圧する。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~2) チャート ○	SP407	
210	甕	残高 2.3	断面が三角形の突帯を貼り付け、口縁端を押圧する。	マメツ	マメツ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1~4) △	SD1	
211	甕	口径残高 (18.8) 2.3	口縁端が上方で平らになる。	マメツ	ココナデ (マメツ)	にぶい藍色 にぶい藍色	石・長 (1~4) 砂 △	SD1	
212	鉢	口径残高 (16.2) 9.7	やや丸みのある胴部。底部は欠損。口縁端は刺繍している。	①ココナデ ②ハケ	①ココナデ ②ハケ・ミガキ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1~3) 金 ○	黒塵SD1	
213	ミニチュア	底径残高 3.2 2.8	くびれのある上げ底の底部。手塗土器。	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰青色 灰青色	石・長 (1~2) △	SD1	
214	甕	残高 7.3	ゆるやかに折れ曲がる口縁部。頸部に刻目のある突帯を持つ。	①ココナデ ②ココナデ	マメツ	黄褐色 淡黄色	石・長 (1~3) 金 ○	SD23	
215	甕	口径残高 (16.6) 2.7	狭く「く」の字に折れ曲がる口縁部。頸部に突帯を貼り付け、指頭押圧による刻目を持つ。	ココナデ	ココナデ	にぶい藍色 にぶい藍色	石・長 (1) 金 ○	SD23	

表8 弥生時代中期中葉の出土遺物観察表 装身具

番号	器種	石材	形状	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
207	碧玉	碧玉	破損している。孔径約2.5mmを有る。	(0.6)	0.4	0.1	0.1	残存1/2 SK122	14

表9 弥生時代中期後葉～後期初頭の出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
216	甕	口径残高 (18.8) 2.0	口縁端部はつまみ上げ状になる。頸部に刺突を施し、その上に刻み目1条隆起を施す。	ココナデ	ココナデ	明赤褐色 にぶい藍色	石・長 (1~3) 金 ○	掘立7 P5	
217	高坏	口径残高 (16.2) 2.4	口縁部に3条の凹線文を施す。	マメツ	ココナデ	明赤褐色 黄褐色	石・長 (1) 金 △	掘立7 P1	
218	高坏	口径残高 (19.7) 4.1	口縁部に5条の凹線文を施す。	ナデ	①ココナデ ナデ	明藍色 にぶい藍色	石・長 (1~4) 赤 ○	黒塵掘立7 P4	
219	甕	底径残高 5.8 3.1	平底。	ミガキ ①ナデ	ナデ (工具痕)	にぶい褐色 にぶい藍色	石・長 (1) 金 ○	黒塵掘立7 P1	

遺物観察表

弥生時代中期後葉～後期初頭の出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面				
220	土製品	直径 3.1	密か葉の板用品。側面に凹は持たない。	ナデ	ナデ	明赤褐色	砂・赤 ○	埋立7 P10	
227	甕	底径 (6.9) 残高 5.4	甕の底部。	ナデ	ナデ	褐色 にぶい褐色	石・長 (1~3) 砂・金 ○	SK128	
228	高坏	脚部径 (10.6) 残高 3.4	脚部下端に143条の凹線文を施す。矢羽根通しを有す。	マメツ	マメツ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1~3) 金 △	埋立 SK128	
231	甕	残高 4.0	胴部と頸部の屈曲部に粘土帯を貼り付け、押圧時に爪の跡がつく。	ミダキ	ヨコナデ	にぶい褐色 褐色	石・長 (1~2) 金 ○	SK121	
232	高坏	残高 6.6	脚部。充頬技法。シボリ痕あり。	ハケ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~3) △	後期初頭 SK5	
233	甕	底径 (7.0) 残高 6.7	上げ底。	ナデ (指頭底)	ナデ	褐色 にぶい赤褐色	石・長 (1~3) 金・赤 ○	中期後葉 SP484	
234	甕	底径 (9.2) 残高 4.3	上げ底。	ミダキ ◎ナデ	ナデ (指頭底)	明赤褐色 にぶい褐色	石・長 (1~3) ○	後期初頭 SP484	
235	甕	口径 (14.0) 残高 7.1	やや肥火した口径縁を有す。	マメツ	マメツ	明赤褐色 明赤褐色	石・長 (1) △	SP363	
236	甕	口径 (10.3) 残高 2.2	口径部に凹線文を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長 (1) 金 ○	後明初頭 SP702	
237	甕	口径 (13.2) 残高 2.2	口径部は強く外反する。口径縁部は肥厚し、2条の凹線文を有す。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1) △	中期後葉 SP925	
238	ミニチュア	底径 2.8 残高 4.1	平底。胴部は内湾する。	ナデ	ナデ	黄褐色 褐色	密 ○	埋立 SP973	

表10 弥生時代中期後葉～後期初頭の出土遺物観察表 石製品

番号	器種	石材	形 状	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
221	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	(24)	1.5	0.2	0.8	埋立7 P5	
222	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	(17)	1.7	0.3	0.8	埋立7 P4	
223	石鏃	サヌカイト	打製品。凸基無茎式。	2.7	1.3	0.4	1.6	埋立7 P1	
224	石砲丁	結晶片岩	成凸。破損品。刃部は割刃刃。	(3.3)	(4.2)	0.7	16.0	埋立7 P1	
225	石砲丁	結晶片岩	未製品。刃部段部。一部に鋭い稜が施されている。素材は扁平円錐。一方が自然面。	(11.4)	4.5	1.0	86.2	埋立7 P3	
226	礫石	不明	平坦な面と柱面ともに擦痕を持つ。	(5.7)	(4.4)	-	94.2	埋立7 P3	
229	石砲丁	結晶片岩	未製品。研ぎ段部。打製により割離調整を行い、一部鋭い稜を施す。	(8.2)	3.1	0.6	25.5	SK128	
230	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	(1.5)	1.2	0.2	0.3	SK128	

表11 古墳時代～古代の出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面				
239	坏蓋	口径 (14.5) 残高 2.3	口径部は先細り。縁を持つ。	面取ナデ	面取ナデ	灰色 灰色	密 ○	須恵 自然釉 SB3	

遺物観察表

古墳時代～古代の出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・植文	罫		色調 (外面/内面)	胎土成	備考	図版
				外面	内面				
240	壺	残高 6.3	壺の胴部片。	平行タタキ	青海波文	灰白色 灰白色	青 ○	須恵 SB3	
241	壺	残高 5.0	壺の胴部。	縄文のタタキ →キメ	同心円文のタ タキ	灰色 灰色	青 ○	須恵 自然釉 形立2P7	
242	坏身	残高 1.8	受け部の小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	青 ○	須恵 形立2 P11	
243	壺	口径 (17.5) 残高 3.2	「く」の字形に強く折れる口縁部。 口縁部は上下に拡大し、4条の凹線 文。頸部に肩目のある突帯を有す。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい藍色 にぶい藍色	石・長 (1~2) 金 ○	形立2 P7	
244	壺	残高 1.8	口縁内面に突帯を有する。口縁 部に斜格子文。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~2) △	形立2 P6	
245	甕	残高 3.2	上下不明。沈線文と刺突文が植 されている。	マメツ	マメツ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1~2) 砂 △	形立4 P10	
247	壺	残高 4.2	壺又は壺の胴部。	縄文のタタキ	同心円文のタ タキ	灰色 灰色	青 ○	遺25 P4	
248	坏身	口径 残高 10.3 4.2	頸部口の蓋。完形品。	①回転ヘラ削り ②回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	黄、石・長 (4) △	須恵 SK146	
249	甕	口径 (27.0) 残高 7.2	断面三角形の突帯を口縁部に貼 り付ける。	①ナデ ②ハケ (7~14本/cm)	ナデ	にぶい藍色 にぶい藍色	石・長 (1~4) 砂・赤	赤生 SK16	
250	甕	残高 7.1	把手。先端部は上方に折り曲げ られる。肩部は丸い。	マメツ	マメツ	褐色	黄 △	土庫 SD10	
251	壺	口径 (14.2) 残高 2.0	口縁部に3条の凹線を植す。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい藍色 にぶい藍色	石・長 (1) ○	SD10	
252	壺	残高 6.2	口頸部の外面に1条の突帯を植 す。	①ヨコナデ ②ナデ(マメツ)	①ヨコナデ ②ナデ(マメツ)	にぶい藍色 褐色・黒色	石・長 (1~3) ○	SD10	
253	壺	底径 (16.4) 残高 6.8	平底。	マメツ	ナデ	褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~8) 赤 △	SD10	
254	壺	底径 (8.4) 残高 2.6	平底。	マメツ	ナデ	にぶい褐色 灰白・黒色	石・長 (1~4) △	SD10	
256	坏身	口径 (12.0) 残高 2.8	受け部は短く、口縁部は直線的 に立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	青 ○	須恵 SP716	
257	甕	残高 2.8	底部。小片。	平行タタキ	青海波文	灰色 灰白色	青 ○	須恵 自然釉 SP495	
258	壺	口径 (27.8) 残高 2.2	口縁部。ゆるやかに外反して、 内面に凹みを付す。外面に胎土 帯を貼り付ける。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	青 砂 ○	SP1181	
259	甕	残高 4.9	胴部上半。	平行タタキ→キ メ 回転ナデ	回転ナデ→同心 円文タタキ 回転ナデ	暗灰色 灰色	青 ○	SP1181	

表12 古墳時代～古代の出土遺物観察表 石製品

番号	器種	石材	形状	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
246	台石	不明	扁平な礎。一面に凹みがある。	(13.9)	(11.2)	5.4	1220.0	形立4 P12	
255	石甕丁	碓氷片岩	破損品。	(6.9)	(1.9)	(0.8)	142	SD10	

遺物観察表

表13 中世の出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 成	備考	図版
				外 面	内 面				
261	甕	口径 残高 (13.0) 3.5	瓦質。和泉型。口径は内湾して立ち上がる。	㊦ナデ ㊧指頭痕	ナデ→ヨコミガキ	灰色 灰色	密 ○	SP1296	
270	皿	口径 器高 底径 7.8 1.6 5.2	土師質。口径は外方に開き、肩部は丸くおさめる。	ヨコナデ ㊨回転糸切り (板止痕)	ヨコナデ	にぶい黄褐色 灰白色	密 ○	黒瀬 SP1296	16
271	皿	口径 器高 底径 (9.0) 1.5 (6.0)	土師質。口径は外方に開き、肩部は丸くおさめる。	ヨコナデ ㊨回転糸切り	ヨコナデ	浅黄褐色 浅黄褐色	密 ○	SP1296	15 16
272	坏	口径 器高 底径 (15.0) 4.6 7.8	土師質。口径は外方に大きく開く。	ヨコナデ ㊨回転糸切り	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 △	SP1296	15 16
273	皿	口径 器高 底径 8.2 3.9 5.5	土師質。円盤高台が行く皿。外方に大きく開く。	ヨコナデ ㊨回転糸切り	ヨコナデ (マメツ)	灰白色 灰白色	密 ○	SP1296	15 16
274	甕	口径 器高 底径 (15.5) 4.4 (4.2)	瓦質。和泉型の可塑性が高い。体部は丸味を帯び、口縁部は丸くおさめる。高台の断面、三角形。	ナデ (指頭痕) ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	SP1296	16
288	皿	底径 残高 (5.8) 0.8	土師質。底部。	ヨコナデ ㊨回転ヘラ切り	ナデ	褐色 淡黄色	密 △	黒木2	
289	皿	底径 残高 (6.8) 1.1	土師質。底部。	ヨコナデ ㊨回転ヘラ切り	ナデ	褐色 淡黄色	密 △	黒木2	
290	皿	底径 残高 (6.9) 1.6	土師質。底部。	ヨコナデ ㊨回転ヘラ切り	ヨコナデ ナデ	にぶい褐色 淡黄褐色	長 ○ (1-2)	黒木2	
291	耳蓋	残高 1.5	須恵型。口縁端部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	須恵 黒木2	
292	甕	口径 残高 (17.4) 3.6	土師質。口縁部、やや内湾きみに立ち上がり、肩部は内湾にツまみを持つ。	ヨコナデ	ヨコナデ (マメツ)	褐色 褐色	石・長 ○ (1-3)	黒木2	
293	羽蓋	口径 残高 (22.0) 2.9	土師質。三足羽蓋の口縁部。口縁部は内湾し、尖帯を返らせる。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	長 △ (1-3)	漆付着 SK39	
294	甕	口径 残高 (15.4) 4.5	瓦質。和泉型。ゆるやかに内湾して立ち上がる。	㊦ヨコナデ ナデ	ナデ	浅黄褐色 浅黄褐色	密 ○	SK122	

表14 中世の出土遺物観察表 石製品

(1)

番号	器種	石材	形 状	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
280	礮	不明	河原石。	(16.2)	(9.8)	8.2	1840.0	SP1296	16
282	礮	不明	扁平な河原石。	6.3	5.3	1.8	84.8	SP1296	16
283	礮	不明	河原石。焼成を受け、破損している。	16.6	(11.3)	(6.0)	730.0	SP1296	16
284	礮	不明	平面、断面形とも三角形な河原石。	7.4	5.6	5.3	269.8	SP1296	16
285	礮	不明	扁平な河原石。破損している。	(8.0)	(6.0)	2.6	171.6	SP1296	16
286	礮	不明	棒状の河原石。	10.2	3.2	2.7	109.2	SP1296	16
287	礮	不明	棒状の河原石。	8.4	3.0	2.3	86.4	SP1296	16
288	礮	不明	棒状の河原石。	8.3	3.1	2.4	68.1	SP1296	16
289	礮	不明	棒状の河原石。	7.2	2.8	1.9	60.1	SP1296	16
275	礮	不明	扁平な河原石。	14.0	7.4	3.4	455.0	SP1296	16
276	礮	不明	棒状の河原石。	10.7	4.7	3.4	233.2	SP1296	16
277	礮	不明	扁平な河原石。	6.0	5.2	2.7	115.3	SP1296	16
278	礮	不明	棒状の河原石。破損している。	(5.6)	4.7	4.4	132.1	SP1296	16
279	礮	不明	棒状の河原石。	8.0	2.7	2.5	88.8	SP1296	16
280	礮	不明	棒状の河原石。	(9.7)	2.5	2.5	80.9	SP1296	16
281	礮	不明	棒状の河原石。	8.2	3.6	2.2	107.6	SP1296	16
282	礮	不明	棒状の河原石。	7.7	3.0	1.8	64.7	SP1296	16
283	礮	不明	棒状の河原石。	(8.8)	3.4	(2.6)	84.6	SP1296	16
284	礮	不明	棒状の河原石。	9.3	2.3	2.4	65.6	SP1296	16

中世の出土遺物観察表 石製品

(2)

番号	器種	石材	形状	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
285	釵	不明	棒状の河原石。	8.4	2.6	1.5	55.1	SP1296	16
286	釵	不明	棒状の河原石。	7.4	3.0	1.9	46.4	SP1296	16
287	釵	不明	棒状の河原石。	4.3	2.1	2.0	21.0	SP1296	16

表15 SB2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土/土成	備考	図版
				外面	内面				
295	壺	口径 (15.8) 残高 1.8	口縁部。口縁部は外反する。口縁部は肥厚し、3条の凹線文を施す。	①マメフ ヨコナデ	マメフ (ヨコナデ)	褐色色 褐色色	石・長 (1) ○	SB2	
296	甕	底径 (7.0) 残高 4.9	平底。	マメフ	マメフ	に灰・黄褐色 金	石・長 (1~3) ○	SB2	
297	粘土 丸	長さ 4.8 幅 3.6	粘土の塊。	マメフ	—	浅黄褐色 (一部褐色)	石・長 (1~2)	SB2	
298	高杯	残高 3.7	筋部に4条の凹線を有す。	マメフ	マメフ	灰色 浅黄褐色	石・長 (1~2) △	SB2	

表16 掘立1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土/土成	備考	図版
				外面	内面				
299	壺	口径 (23.0) 残高 5.2	口縁部に断面三角形の粘付突起を施す。肩部に溝を穿つ。口縁直下に4条1組の縦と横の凹線文と直下の直状の縦筋文を施す。	①ヨコナデ ②ハケ	①ヨコナデ ②ナデ (ミガキカ?)	褐色 褐色	石・長 (1~2) △	黒斑 掘立1 P9	
300	壺	口径 (9.5) 残高 1.0	複合口縁部。口縁部は「く」字状を施す。無文。	ヨコナデ	①ヨコナデ ②ナデ	に灰・黄褐色 に灰・黄褐色	石・長 (1~2) ○	掘立1 P10	

表17 掘立1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	石材	形状	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
301	凹石	不明	一面に凹み面がある。	21.2	(12.2)	(7.9)	2850.0	掘立1P5	

表18 掘立3出土遺物観察表 石製品

番号	器種	石材	形状	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
302	石鏡	サヌカイト	打製品。平基無蓋式。	4.0	(1.8)	0.5	3.3	掘立3P5	

表19 掘立8出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土/土成	備考	図版
				外面	内面				
303	壺	口径 (19.7) 残高 2.1	口縁部は下方に垂下する。内面には突起が回り、口縁部にはへっ縮みの山形文を施す。	マメフ	マメフ	褐色 褐色	石・長 (1~2) △	掘立8 P1	

表20 時期不明出土遺物観察表 石製品

(1)

番号	器種	石材	形状	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
304	石鏡	サヌカイト	打製品。凹基無蓋式。	(2.2)	(1.9)	0.5	2.1	SK114	
305	石鏡	サヌカイト	打製品。平基無蓋式。	2.5	(1.2)	0.3	0.8	SK114	
306	石鏡	サヌカイト	打製品。凹基無蓋式。	(2.1)	(1.5)	0.2	0.5	SK13	
307	石鏡	サヌカイト	打製品。平基無蓋式。	2.8	1.4	0.4	1.2	SK26	
308	石瓶丁	結晶片岩	成品。丸丸長方形。	(11.4)	5.7	0.6	67.0	SK86	
309	石瓶丁	サヌカイト	成品。平面形は丸丸長方形。	(5.0)	(3.5)	0.3	13.3	SK127	
310	扁平片刃石斧	結晶片岩	平面形は長方形。基部は凹基。	5.6	2.5	1.1	32.2	SK13	
311	石瓶丁	結晶片岩	未製品。	14.4	6.0	1.9	202.6	SK131	
312	石鏡	サヌカイト	打製品。凸基有蓋式。	(4.9)	1.3	0.5	3.0	SP222	
313	石鏡	サヌカイト	打製品。凹基無蓋式。	3.2	1.8	0.4	1.5	SP976	

## 遺物観察表

時期不明出土遺物観察表 石製品

(2)

番号	器種	石材	形状	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
314	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	2.5	1.8	0.3	1.0	SP609	
315	石鏃	サヌカイト	打製品。	3.0	1.2	0.8	2.9	SP271	
316	石鏃	サヌカイト	頸部両側面に刃部がある。	4.5	1.5	0.4	3.2	SP976	14
317	スクレイパー	サヌカイト	刃部は若干外湾する。両面調整。	8.5	5.8	1.1	52.0	SP269	
318	石砲丁	結晶片岩	成品。破損品。刃が折れている。	(10.3)	3.5	0.6	47.6	SP630	14
319	扁平片刃石斧	結晶片岩	石砲丁の転用品。	5.8	(3.6)	0.6	15.9	SP975	
320	椎葉削片	サヌカイト	河原の円礫を打ち割っている。	13.8	11.0	2.4	420.0	SP975	15
321	扁平片刃石斧	結晶片岩	刃部は四角。横断面は扇形である。	(3.5)	(3.1)	(0.6)	10.4	SP624	
322	柱状片刃石斧	結晶片岩	断面に縁が無い。	(11.9)	(3.3)	(0.6)	30.5	SP15	
323	柱状片刃石斧	結晶片岩	有尖式。茎断面は平茎。	12.8	3.1	4.1	330.0	図1P16	14
324	大型片刃石斧	結晶片岩	刃部。破損品。横断面は扁平。	(9.8)	(7.0)	(3.0)	283.1	SP257	
325	大型片刃石斧	不明	破損品。破着を施している。	(6.8)	(5.1)	(1.3)	39.1	SP117	15
326	磨石	花崗岩	平坦面に一面に磨痕あり。	6.9	5.6	3.8	21.21	SP955	
327	磨石・磨石	不明	扁平な円礫。腹面に縦打痕あり。	6.8	6.1	2.5	142.4	SP968	
328	磨石	花崗岩	平坦面の両面に磨痕あり。	10.0	8.2	4.0	550.0	SP4	
329	磨石	不明	両面に縦打痕がみられる。	9.5	8.1	4.2	530.0	SP1276	
330	砥石	不明	欠損品。3面に磨痕あり。	14.8	13.8	10.8	3100.0	SP484	
331	砥石	不明	3面を使用している。1面に浅い溝が入る。	(11.9)	12.4	9.2	2050.0	SP494	
332	磨石	結晶片岩	穿孔が2つある。側立柱穴の磨石。	(25.4)	(17.3)	7.6	4100.0	埋立9P1	
333	用途不明石製品	結晶片岩	石器素材の可能性あり。	16.3	3.9	2.7	233.1	SP123	
334	用途不明石製品	不明	両端が欠損。断面が円形。	(5.7)	3.4	2.5	67.6	埋立6P3	

表21 表採遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内側)	胎土 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
335	皿	口径 (16.2) 底高 2.6	龍泉窯の青磁皿の底層。見込みには目跡がみられる。	縁輪 ◎回転ナデ	挽染	オリーブ色 ミリアンブルー	雲 ○	胎土： 浅灰黄色	
336	坏身	口径高 1.7	磨痕が深い。受皿が固く水平にのびる。	◎回転ナデ	◎回転ナデ	明青灰色 明青灰色	雲 ○	須恵	
337	甕	口径 (15.0) 底高 25.1	口縁部はやや外翹する。胴部は長胴。腹部に3本の沈線文を施す。	◎回転ナデ (マメフ) ◎ミガキ ◎ナデ (マメフ)	◎回転ナデ (マメフ) ◎ミガキ ◎ナデ	浅黄棕色 浅黄棕色	石・灰 (1~5) 金 ○	黒黒	

表22 表採遺物観察表 石製品

番号	器種	石材	形状	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
338	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	(1.4)	(1.4)	0.2	0.3	表採	
339	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	2.0	1.8	0.3	0.7	表採	
340	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	2.0	1.8	0.4	0.4	表採	
341	石鏃	チャート(赤色)	打製品。凹基無茎式。	1.7	(1.6)	0.2	0.6	表採	
342	石鏃	サヌカイト	打製品。平基無茎式。	(1.4)	1.8	0.3	0.9	表採	
343	石鏃	チャート(赤色)	打製品。平基無茎式。	(2.0)	(1.5)	0.5	1.0	表採	
344	石鏃	サヌカイト	打製品。平基無茎式。	(2.8)	(1.1)	0.4	0.9	表採	
345	石鏃	サヌカイト	打製品。平基無茎式。	2.9	1.2	0.5	2.0	表採	
346	石鏃	チャート(赤色)	未製品。	3.4	1.9	0.7	5.6	表採	
347	刃器	龍崎産黒曜石	産部を切り切り口面に調整を加えたもの。	(2.1)	1.2	0.5	1.6	表採	
348	石砲丁	結晶片岩	未製品。外湾若干半円形か？刃部は面を持つ。	(8.2)	(5.6)	(0.8)	51.5	表採	15
349	石砲丁	結晶片岩	成品の破損品。	(4.3)	(1.5)	(0.6)	5.9	表採	
350	大型片刃石斧	不明	成品。破損品。平面は長台形。	(9.8)	(4.6)	(2.8)	179.9	南カクラン	15
351	磨石・磨石	不明	扁平な円礫。	10.2	9.0	4.6	627.5	表採	
352	砥石	不明	両端が欠損している。	(9.0)	3.5	2.6	143.2	地点不明	



# 写真図版

## 写真図版データ

1. 遺物は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判で補足している。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン 90mm他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67 55mm他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール 28～85mm他
フィルム	白 黒	プラスXパン・ネオパンSS・アクロス	
	カラー	エクタクロームEPP・RDPⅢ	

2. 遺物は、4×5判または6×9判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー 45G・69ロールフィルムホルダー
レンズ	ジンマー S 240mm F5.6他
ストロボ	コメット/C A32・C B2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白黒 プラスXパン・ネオパンアクロス

3. 単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキーMD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ RCペーパー

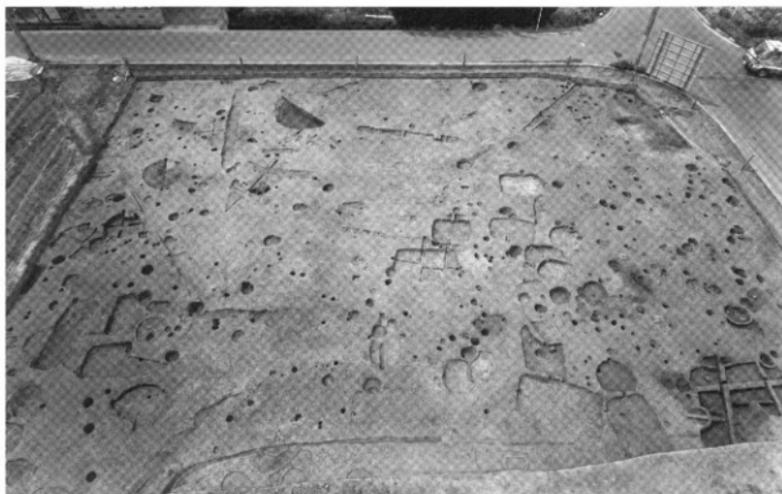
4. 製版 写真図版-175線  
印刷 オフセット印刷  
用紙 ニューVマッドコート 菊判76.5kg使用  
製本 アジロ綴じ

【参考】『理文写真研究』vol. 1～15 『報告書制作ガイド』

〔大西朋子〕



1. 2区遺構検出状況（北より）



2. 2区遺構完掘状況（北より）



1. 1区遺構検出状況（南より）



2. 1区遺構完掘状況（南より）



1. SK21遺物出土状況（北東より）



2. 2区西側完掘状況（北より）



1. SK24遺物出土状況（南東より）



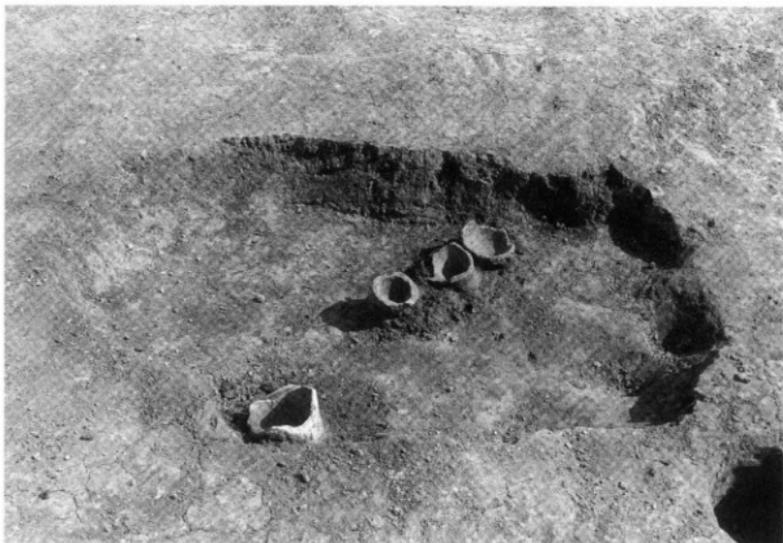
2. SK31遺物出土状況（南より）



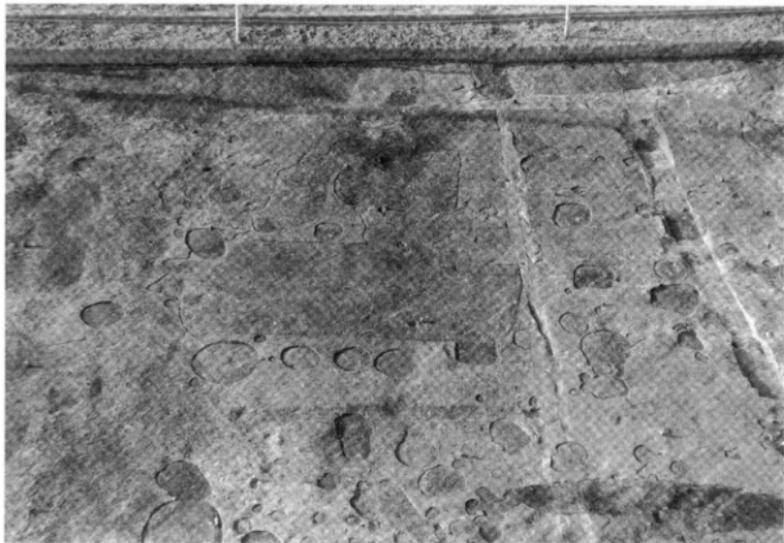
1. SK138遺物出土状況（南より）



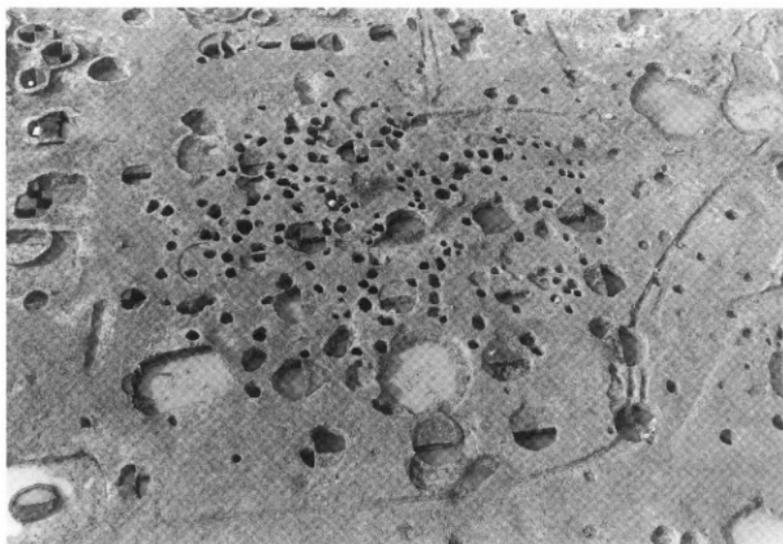
2. SK103遺物出土状況（南より）



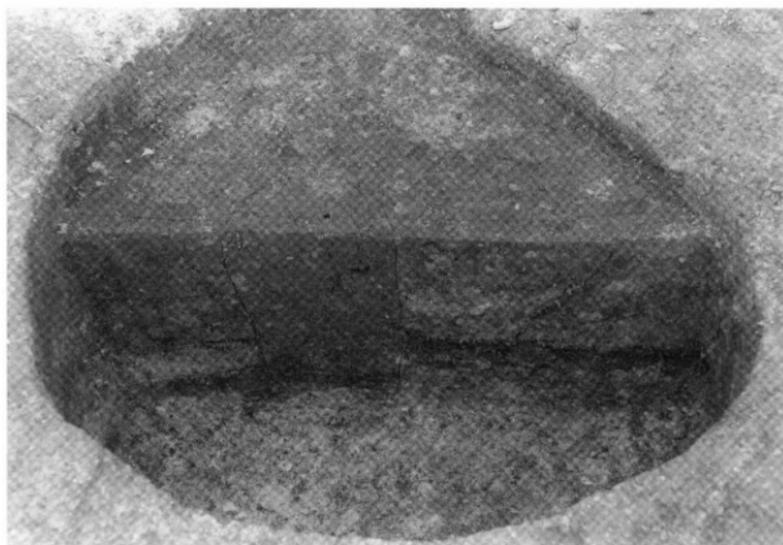
1. SK137遺物出土状況(南より)



2. 掘立2・SK122検出状況(南より)



1. 掘立1 完操状況 (南より)



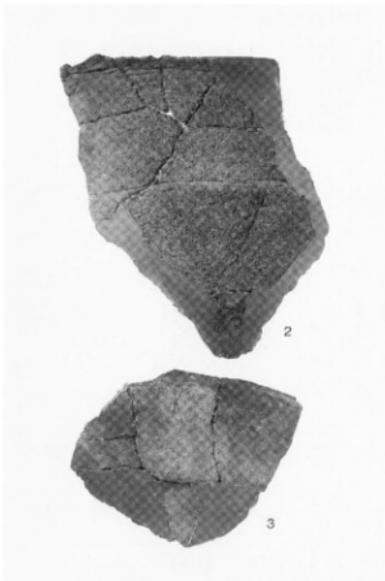
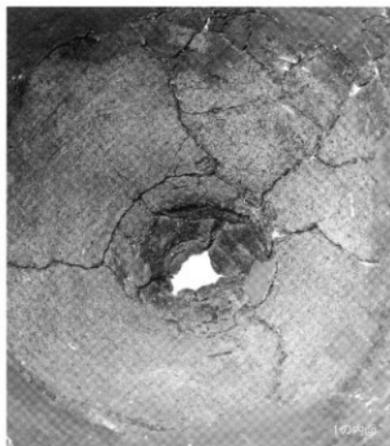
2. 掘立1 S P955断面土層 (西より)



1. 掘立2完掘状況（南より）



2. SP1296断面土層（西より）



1. SK21出土遺物



10



10



13



11



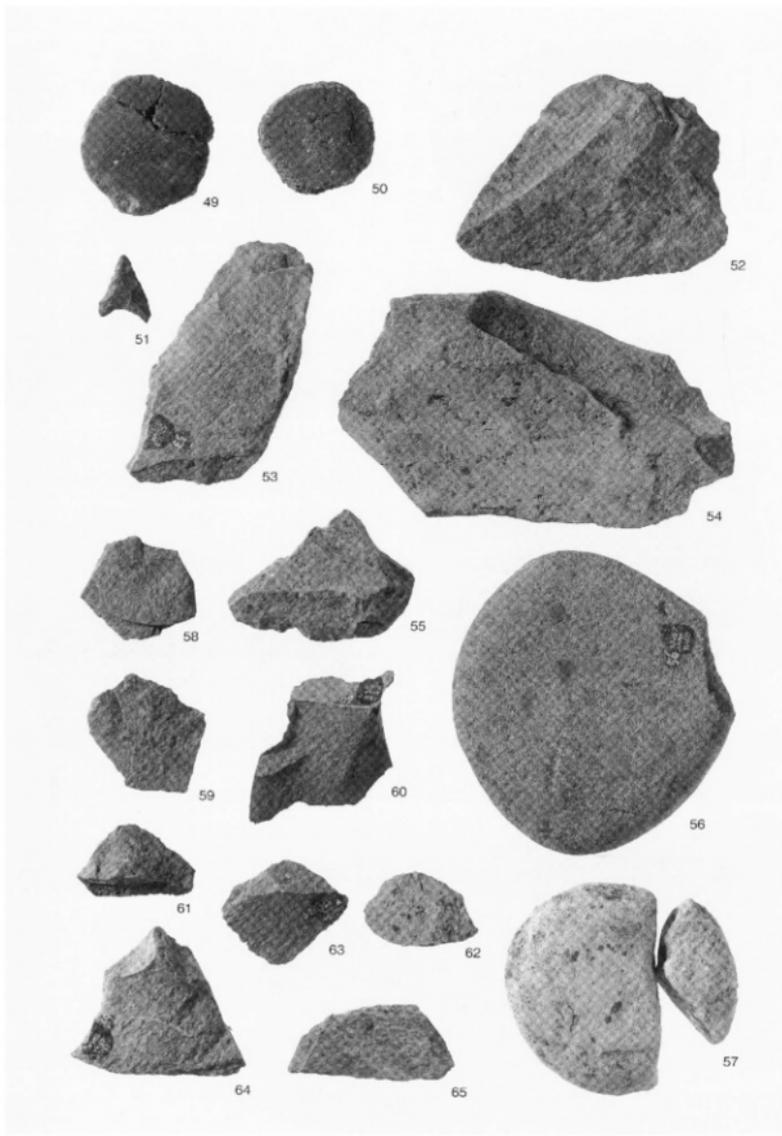
40

38



46

1. 出土遺物 (SK24: 10・11・13、SK31: 38・40、SK35: 46)



1. S K 40出土遺物



1. 出土遺物 (SK50: 69・70, SK53: 72, SK103: 103・104, SK106: 105, SK126: 126)



1. SK138出土遺物(1)



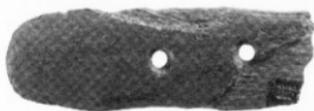
138



139



207



318



191



316



323

1. 出土遺物 (SK138(2): 138・139, SP1009: 191, SK122: 207, SP976: 316, SP630: 318、据立1: 323)